役人中

二九三三

安永七年戌三月

一一向宗執行ノ者不相止所モ有之、此節締方諸所へ申渡候間、鹿児島中ハ横目役気ヲ付候様可申渡旨、帯刀殿ヨリ大目付右近殿へ承知ニテ、五日詰横目へ申渡有之、

戌三月

二九三四

一浦抱候諸所、浦役人ノ内一人ツヽ、宗門方加役申付置候ヘトモ、依所浦々手広浦分ヲ以相勉、一人ニテハ差支候処モ有之候ハヽ、致吟味可被申出旨、地頭・領主・月番御用人へ可申渡候、

安永五申十月

公義御尋者

二九三五（の1）

一此節　公義御尋者ニ付テ、御領国中不残御改相済候、雖然此涯マテニ不相限、向後トテモ御尋者ノ内入来儀モ可有之候条、猶又入念、時々可致穿鑿旨、大坂町御奉行又々今度被仰渡趣有之候、尤、御尋者ノ内少々ハ召捕、国々ヨリ可差上候ヘトモ、未残党過分ニ有之、被仰渡事ノ由候間、得其意、左之通可相改候、

一改之次第、諸事先頃申渡置候通相心得、旅人・旅船堅固ニ相改、諸所津口・境目番所ノ儀ハ改証文等相渡候儀、此中ノ通可致候、

一ケ条略ス、

一国往来並津口・境目改証文無之旅人見得来候ハヽ、様体書ニ不似合（寄カ）者タリト云トモ先頃申渡候通早速召捕、御当地へ早々可差遣候、若又往来証文等致所持候テモ、何ノ所作モ不相見得、疑敷旅人於有之者、番人付置、早々其首尾可申出候、尤、出所相改候所ニ御尋者人相書ニハ不似合（寄カ）者ニ候ヘトモ、何様ノ子細ニテ疑敷者候間、委細書記可申出候、人相書ニ似寄候者ハ勿論、先頃申渡候通可相計候、

一御当国ノ者タリト云トモ、或他所致往来、或旅人宿、或ハ商スアイナトイタシ候者、自然紛敷唐物商売等ヘ相携候儀モ可有之候間、随分気ヲ付、疑敷儀モ於有之ハ、是又申渡置候通、猶以可申出候、

一御領国手広事候ヘハ、万一御尋者何方ヘモ紛居候テ脇ヨリ相顕候時ハ不可然候条、無油断気ヲ付可相尋(改)候、尤、到以後、右改被相止候節ハ其旨可申渡候条、差図無之内、曾テ緩セ有之間敷候、

右之通申渡候条、若大形ノ儀有之候節ハ、其所嘱、役人、津口・境目番人其外右改方ヘ相掛候面々可為越度候条、此旨堅支配頭並諸地頭、領主、諸所津口・境目番所諸島マテ、不洩様ニ可被申渡候、以上、

五月

享保四年亥五月　　頴娃長左衛門
　　谷山角太夫

（二九三五の2）

右之通、従　公義被仰渡候付テ、御家老中御相談ノ上被仰渡事候間、不洩様堅可被申渡置候旨、藤馬殿・彦太夫殿被仰候、以上、

二九三六

喜界島帳留ノ内

喜界島代官ヘ申渡覚

一此節　公義御尋者有之、御領国中改被仰付候ニ付、相(入)書一冊(相書カ)並印形帳案文一冊差越候、其島ノ儀、旅人ハ不罷渡事候ヘトモ、万一旅船致漂着候ハ、、所持道具船ノ様体書ニ引合相改、唐物等致所持、似寄疑敷者有之候ハ、、仮籠並囲等堅固ニ相調召込、飯料等モ別テ麁相ニ無之様ニ申付、慥成番人付置、欠落又ハ不思案等不致様可入念候、左候テ、便船次第可差上ス候、尤、様体書不似寄唐物等不致所持者ハ先例ノ通可申付候、

一右之通、似寄候者有之者、附役ノ内一人宰領可申付(候)ク、船中別テ念遣ノ事候条、船籠相調、随分入念候様、宰領人並船頭ヘ堅申付可差上ス候、

一御尋者多人数ニテ何方ノ者モ不相知候ヘハ、御国者モ其内若可有之儀モ不相知候間、御米積トシテ罷下候船々船頭水主ニ至マテ、不残人相書ニ引合、人別ニ相改、似寄候者▽(ヲ)於有之者△所持道具マテ相改、唐物等致格護疑敷様子ニ候ハ、右同断申付、其外ノ者ハ此節ノ御

尋者一向不存候ハ、其段承届、右体ノ者へ取会、買本疑敷唐物等商買仕候儀、曾テ無御座通相渡候案文ノ通、帳一冊調置、面々ニ得ト読聞セ、印形致サセ可差出候、

一人相書ニ相見得候御尋者、船住居ニテ洋中へ罷居儀モ有之候ハ、諸船共ニ島近方ニ相マキリ罷居候ハ、気ヲ可付旨、島人トモへ兼テ可申付置候、

一右御尋者、別テ入御念儀候間、致渡海候者ハ随分気ヲ付入念可相改候、右改此涯迄ニ不限儀候間、此方ヨリ下知無之内ハ右之通可相心得候、左候テ、代官代合ノ節、此書付並人相書其外案文等、向後ハ慥ニ可被次渡候、聊大形有間敷候、

右之通可申越旨、藤馬殿・彦太夫殿被仰渡候、以上、

亥四月　　谷山角太夫

　　頴娃長左衛門

二九三七

（令条記巻三十四　五三〇号）

嘱託

令条記巻三十四

一当五月廿六日夜、麻布坂下町庄兵衛所持ノ赤白ノフチ（ナシ）犬、首際ニ切疵一ケ所在（有）之事、

一当正月廿七日、イサラコ町野道（辺）ニ白黒フチ犬、切疵ニテ死有之事、

右、二疋ノ犬切候モノ存候ハ、申出ヘシ、生類アハレミノ儀、度々相触候処、不届ノ至候、タトヒ同類タリト云共其科ヲユルシ、御褒美（為御褒美）トシテ此金子被下（之）、其上アタヲ不仕様ニ急度可及沙汰者也、

元禄八年亥二月九日

右為嘱託黄金廿枚、四（日）本橋際被懸置候、

上使御国元へ

二九三八

（行間朱書）

「一御目附様御旅宅御門前下馬下乗」

一太守（重豪）様御若年ニ付、御国元へ為御目付、京極兵部（高寛）様・青山七右衛（成存）門様被遣候間可得其意旨、亥九月二十一日

御用番本田伯耆守様ヨリ被仰渡、

宝暦五年亥

二九三九

一子五月二十三日、　公義御目付衆京極兵部様・青山七右衛門様(列着)〈、左之通被仰渡候、

一我等共爰元へ到着以後、御領内相替儀無御座候哉、若往来ノ衆モ有之候ハ、、幾日罷通候段可被申聞候事、

一惣テ近国相替儀被聞及候ハ、、早速可被申聞候事、

一御城下ハ不及申、御領国(列内)火事・喧嘩等有之候ハ、可被申聞候事、

宝暦六子五月廿四日　　青山七右衛門

京極兵部

松平又三郎(重豪)殿

家老中

二九四〇

一御巡見　上使御当地へ御着御刻限前以、　太守様客屋へ御入被遊御待受、　上使直ニ御越被遊　御対顔筈候、

一御越ノ節、　太守様御玄喚迄　御出迎、御立ノ節モ同所マテ　御送リ被遊筈候旨被仰渡、

宝暦六

二九四一

一両御目付衆御立寄為御餞別、別紙之通御物調ニテ御留主居取計ヲ以進覧有之筈候、

一御立前日、為御暇乞参上可被致候、

一御立御当日、参上不及為御見送、青山七(右)左衛門様御門前へ可被罷出候、

右之趣、前以御留主居ヨリ申込置筈候旨、宝暦六子十月十九日被仰渡、

右ニ付別紙

一三島ノ濃茶々ワン十ツ、　島津主殿(久馮)殿

一毛氈二枚ツ、　島津主鈴(久品)殿

一三島薄茶々碗十ツ、　伊集院織部(久東)殿

一唐紙一箱ツ、　鎌田典膳(政昌)殿

一〈(列裏)布二反ツ、　高橋縫殿(種寿)殿

一蠟燭一箱ツ、

但、二百丁入、若御年寄衆相中、

一国分タハコ一箱ツ、　大御目付衆相中

以上、

二九四二

一御目付衆、子十一月三日御旅宿御出立有之、

一御目付衆、京極兵部様御高二千石ノ半物四ッ物成四百石代銀三十九貫九百二十目、一石ニ付九十九匁八分替、金子ニシテ六百四十七両二歩、給人寺田左門・馬場藤左衛門ヘ御用聞ヨリ差遣候事、

一右同、青山七右衛門様御高千石、

二九四三

古来　上使ノ人数

一宝永（応永）十一年六月、　将軍義満公上使朝山出雲守師綱・同氏小次郎重綱、

一天文十四年、　近衛稙家公使節日野宰相資将薩州ニ来ル、

一永禄三年、　将軍義輝卿上使伊勢備後守貞忠、

一明応四年、　足利義村使者一色兵部太輔、

一天正十三年二月、　義昭使者柳沢新右衛門元政、

一慶長十六年、　相国秀忠公弔使揖斐与左衛門、

一元和五年四月、　上使篠原七兵衛加治木ニ来ル、

一寛永十年、巡見　上使小出対馬（吉親）・城織部（信茂）・能勢小十郎（頼隆）、

一寛永十三年冬、久志本式部少輔（常尹）薩摩（列府）ニ来ル、

一寛永十四年冬、　上使新庄右近（直綱）太夫、

一寛永二十年十月、　上使水野藤右衛門ヲ以、御鷹之鶴ヲ国ニ賜、

一寛文七年、廻浦使竹林（高）又兵衛（直重）・向井八郎（正興）兵衛、

一同年、巡見　上使井戸新右衛門（幸弘）・青山善兵衛（正康）、

一宝永六年、巡見　上使小田切靱負（直広）・永井監物（白弘）・土屋数馬（喬直）、

一享保二年、巡見　上使妻木平四郎（頼隆）・大島采女（義敬）・小倉仲右衛門（正矩）、

二九四四

宝暦六年（列子）〈

一両御目付様御旅宅御門前、可致下馬下乗旨被仰渡、

子五月

二九四五

一御目付様御滞在中、鹿児島中遊興ヶ間敷儀・辻歌停止

被仰渡、

但、コセ座向、稽古三味線ツヒキハ不苦候、

宝暦六子五月廿七日

二九四六

一右同年子六月十一日、御目付衆御招請、

二九四七

宝暦十一年巳、巡見上使ニ付、

覚

一今度諸国巡見被仰付、国絵図・城絵図無用ノ事、

一人馬・家数改無之事、

一御朱印ノ外、人馬御定之通駄賃銭有之、無滞可出之事、

一何方ヲ見分仕候共、使者・飛脚音信物一切可為無用候、

但、案内ノ者入候所ハ其断可有之事、

一掃除等可為無用事、

但、有来通、道橋往行不自由ノ所ハ格別之事、

一泊々ノ宿所、作事等可為無用候、並茶屋新規ニ作申間敷候、

一国廻ノ面々、泊々ニテツキ米・大豆、以其所ノ相場可売之、此外売物常々其所ノ直段ニ売可申事、

以上、

辰八月

二九四八

覚

一宿々畳ノ表替無用候、古ク候共不苦候事、

一湯殿・雪隠無之処ニ成程軽ク可被致事、

一盥・柄杓・鍋釜、古ク候共不苦候、若無之所ハ軽ク可被致支度事、

一宿ニナルヘキ家、一村ニ三軒無之処、寺ニテモ村隔候テモ不苦事、

一其所無之売物、脇ヨリ遣置之、ウラセ申間敷事、

以上、

辰八月

二九四九

覚

一今度国々御領所村々巡見被差遣候付、右ノ面々相通候道筋掃除並道橋一切作リ申間敷候、馳走トシテ送迎ノ者出候儀可為無用事、

一右之面々、　御朱印員数ノ外人馬入候ハヽ、其所駄賃銭有之、其定ノ通、定無之所ハ近辺御定ノ割合ヲ以、駄賃銭取之、人馬可出候、　御朱印ノ外ニ賃ナシニ（ヵ之）人馬一疋モ不可出之事、

一巡見通リ候道筋ニテモ百姓農業ノ儀、少モ無遠慮イトナミ候様可被申付事、

一私領村々ニ若令旅宿候共、少々ノ木屋掛取繕ハ不及申、畳替可為無用、古ク候テモ不苦候、賄道具等モ有合候ヲ借シ可申事、

一旅宿ニ可成家、一村ニ三軒無之所ハ寺又ハ村ヲ隔候テ成トモ不苦事、

一泊・昼休ノ場所ニテ入用ノ飯米・塩・味噌・薪並酒肴・油・野菜等ハ、其所ノ相場次第売候様可被申付事、

一其所ニ無之商買物、脇ヨリ遣置売セ申間敷候、衣類・諸道具等ハ勿論、酒肴ニテモ持寄売候儀堅可為停止事、

一右之面々、金銀米銭・衣類・道具ハ不及申、酒肴・菓子等マテ一切受用無之筈候間、内々ニテモ堅音信不仕様ニ知行所ノ者共ヘ可被申付、若内々ニテ音信仕旨相聞ルニ於ヒテハ可為曲事候間、其旨急度可被申付候事、

一何方見分仕候共、私領方ヨリノ音物等モ一切受用無之筈候間、音信ハ不及申、使者・飛脚被出候儀モ堅可為無用事、

一右之面々、家来下々マテ▽（ヵ）在々ニおゐて△衣類・道具等ハ買不申様申渡候間、得其意、商買不仕様可被申付事、

一野道之馳走トシテ新規茶店等作候儀、堅可為無用事、

右ハ、今度御領所国々ヘ巡見被差遣候付、往来ノ道筋ハ私領村々ヲモ可罷通候間、書面ノ条々先達テ地頭ヨリ領知村々ヘ申触、無相違様ニ可被申付候、以上、

辰八月

右之通、巳正月十日、堀堀右衛門（貞紀）御取次ヲ以被仰渡、

二九五〇

写

一今度御巡見為　上使、青山七右衛門（成存）様・神保帯刀（忠能）様・

花房兵右衛門(正路)様、御領内御巡行ノ筈候条、参掛候人ハ慇懃ニ致式対可罷通候、就中末々ノ者猶又恐入蹲踞可申候、

一喧嘩口論御禁止ノ段ハ兼テ被仰渡置事候ヘトモ、猶以堅可相守候、御宿近辺・御通筋、無用ノ者徘徊並高雑談・辻歌、惣テ遊興ヶ間敷儀令停止候、勿論馬鹿者・胡乱者・行脚体ノ者共曾テ徘徊為致間敷候、

一御通路ノ節、長屋並二階窓戸可鎖置候、御宿近方町中、家職ニ付音高儀、御止宿中可相止候、店棚売物等出置商買候儀ハ可為平生之通候、

右ニ付テハ先達テ申渡置候通可相心得候、

一御宿休ノ所々ヘハ多人数相集候儀ニ候間、上使御荷物ニ不限、麁末ノ儀共無之様、随分可気付候、万一怪敷者於有之ハ不事立様可取計候、尤、火用心猶以可入念候、

一上使鹿児島御止宿ノ節、自然出火有之候ハヽ、相図並一駈付ノ儀ハ致有来通、騒敷無之様可相心得候、御宿近火ニ候ハヽ、南林寺塔司・大乗院坊中ヘ御退場定置候条、依火筋右之内ヘ御逃可被成候間、御通筋辻々ヘハ横目・足軽出置、御備並御荷物等行当無之様可致候、諸所ノ儀モ右準、役々罷出可致差引候、

右之通可被申渡旨、表方ヘ致通達、御側方・御下屋敷御方・御勝手方ヘハ写ヲ以相達、御通筋ノ地頭・領主ヘモ如例可申渡也、

(宝暦十一)
巳五月

(鎌田正芳)
隼人
(鎌田政昌)
典膳

二九五一

一御家老鎌田隼人殿

御用人堀甚左衛門(興貞)・堀堀右衛門

御用聞山元猪散太(清秋)

御内用聞伊集院覚左衛門(兼丘)

御目付上村茂兵衛(正方)・蒲生十郎右衛門(清定)

繰越方支配人三人

人馬賦方三人

火消奉行二人

表医師本道一人

御雇医師外科本道一人

内附衆中一人（列同）
御勝手方筆者一人
御徒目付二人
御用聞添役十二人
繰越方締方横目三人
三繰越方御歩行十一人
二繰越方御歩行四人
御用人座筆者四人
御家老与力二人
御用人与力二人
御料理役三人
　但、山川ヨリ鳥浜御船中、御料理被進候ニ付、
繰越方役人六人
時計役一人
御用聞筆者一人
御地物役御納戸付士三人
　但、鳥浜御渡海ニ付、
御末詰御料理役三人
御納戸附士三人

御小者三人
馬医三人
御厩肝煎一人
御中間四人
御厩人足十五人
次人足六人
御家老衆附足軽二人
御用人付足軽四人
御用人定番四人
御用聞付足軽二人
　内、一人与力、
御内用聞与力足軽一人
同（列）へ相付足軽一人
繰越方へ相付足軽六人
繰越方締方横目付足軽三人
御目付附足軽二人
三繰越方御歩行附足軽十二人
御徒目付附足軽二人
二繰越方御歩行附足軽六人

御用聞添役附足軽廿四人
人馬差引郡奉行へ相付足軽六人
御乗物廻陸尺方主取足軽三人
三繰越方役人付御春屋人足六人
三繰越方御歩行附同九人
御家老衆乗馬一疋
右飼料、於諸所可被申渡候、
右ハ、此節　上使御巡見ニ付、右ノ人被附廻候間、往来送人馬御賦方、諸事如例可被申渡旨御差図ニテ候、
以上、
但、(鎌田正芳)隼人殿御事ハ米ノ津ヨリ寺柱マテ　上使御通路筋一日ツ、先達テ御越被成候、御家老座筆者同断、
巳五月廿三日　堀甚(興貞)左衛門
堀堀(貞紀)右衛門

二九五二
一明後二十八日、　上使ノ御方御当地へ御着候ハ、、於客屋太守(重豪)様被遊　御対顔筈候、右　御対顔ニ付テハ御手当諸事無間違様可被申渡候、御納戸奉行・御普請奉行・御春屋役其外可承役々不洩様可申渡候、
巳六月廿六日　(鎌田政昌)典膳

二九五三
宝暦十一年上使
写
一用人二人　給人二人　近習三人　中小姓二人
徒士四人　足軽七人　中間十三人
右、青山七(成存)右衛門様
一用人二人　給人二人　近習二人　中小姓三人
徒士三人　足軽六人　中間十三人
右、神保帯(忠彪)刀様
一用人二人　給人一人　中小姓四人
徒士三人　足軽五人　中間十二人
右、花房兵(正路)右衛門様
右之通被召列候段申来候、　御朱印人馬ノ儀、先達テ申渡置候員数ニ相違無之候条、可承向々へ可申渡候、
巳三月　隼人

二九五四（の1）

宝暦十一年巳上使御手当帳ノ内

一関宮内丸十三反帆　船頭水手四十九人
一同一柳丸十三反帆　船頭水手同断
一同勝木丸十三反帆　右同
一小早久見崎丸六反帆　右同十八人
一同清川丸六反帆　右同
一使船七艘　右同六人ツ、

右ハ、上使山川御渡ニテ右之通差廻筈ニ候、　末略、

巳四月三日　久ミ崎御船手

御船手

（二九五四の2）

本文ニ付、

一関十三反帆一艘　船頭水手三十二人ツ、
一小早六反帆一艘　右同十二人ツ、
一使船一艘　右同四人ツ、

右之通、乗組人数御定ヨリ相減、右之通被召乗可然ト吟味仕候、船中依日和合、諸所ヨリ引船出候様被仰渡度奉存候、以上、

巳四月七日　鹿児島諸船頭

令条記巻廿六

二九五五　（令条記巻二十六　三二〇号）

諸国巡見使覚

五畿内　四国・紀伊・伊勢　上使三人略ス
東海道　従美濃至安房・上総・下総　右同断
陸奥　従常陸至出羽　右同断
北陸道　佐渡共　右同断
中国　隠岐共　右同断
九州　二島共　右同断

右、寛永十年癸酉被遣之、

二九五六

一寛文七年未諸国巡見使・六年廻浦使二手被遣、御国ハ廻浦使マテ被遣之、上使高林又兵衛（直重）・向井八郎兵衛（正興）、

右之節、国廻衆ヘ被　仰渡覚、

但、巡見使方、

（令条記巻二十六　三二一号）

一御料・私領共に、町・在ノ所々仕置善悪可被承之事、
一キリシタン宗門ノ仕置、常々無油断申付候哉、並盗賊等ノ仕置、其所々ノモノ存知候様相尋之、様子可被承ノ事、
一何事ニヨラス、近年運上ニ成、其所ノ諸色高直ニテ迷惑仕儀在之哉、可被承ノ事、
一公義御仕置者替タル事在之哉、可被承ノ事、
一買置イタシ、シメ売仕候モノ在之哉、可被承ノ事、
一金銀米銭相場可被承ノ事、
一公事訴訟目安、一切請取間敷事、
一高札ノ写不立置之所ハ向後立置之、文字不見節ハ又改可立置之旨、家数多所々ニテ可被申渡事、

以上、

寛文七年閏二月十八日

二九五七

（令条記巻二十六　三二二号）

覚　但、廻浦使方へ

一公事御訴目安、一切被請取間敷事、
一諸浦仕置ノ善悪並困窮ノ郷村於有之ハ、子細可被承ノ事、
一浦方船改・運上改等ノ儀、可被承ノ事、
一キリシタン宗門ノ仕置、常々無油断申付候哉、並盗賊等ノ儀仕置、其浦々ノモノ存候様に相尋之、様子可被承ノ事、
一浦々港々ニヲヒテ、此案文ノ通、重テ高札可被立之間、堅可相守之旨、御料・私領トモニ庄屋・五人組・船主・船宿等ニ可被申付事、
一浦々船数・水主数可被承之事、
一其所ヨリ江戸大坂へ之船賃、可被承之事、
一買置イタシ、シメウリ仕モノ在之哉、可被承之事、
一遠州御前磯崎之山ト豆州小浦ノ湊ノ山ト此両所、灯明ヲ立可然哉、可有見分事、
一公義御仕置ト替タル事在之哉、可被承之事、
一浦々湊々へヲヒテ、弥博奕惣テ賭ノ諸勝負不可仕、並遊女一切抱置間敷旨、庄屋・五人組・船宿等へ堅申付之、手形致サセ可被申事、

▽以上△

寛文七年閏二月十八日

坂井八郎兵衛殿
伴作平殿

二九五八（の1）

延宝九年酉諸国巡見使者覚

一筑前　筑後　肥前　肥後　日向　奥田八郎右衛門
大隅　薩摩　壱岐　対馬　五島　戸川杢之助　柴田七左衛門

外ニ七手、略ス、

（二九五八の2）　（令条記巻二十六　三二四号）

右ニ付、

覚

一今度諸国巡見雖被　仰付、国絵図・城絵図無用ノ事、
一人馬・家数改無之事、
一御朱印ノ外ノ人馬、御定ノ通駄賃銭取之、人馬無滞可出事、
一何方見分仕候共、使者飛脚音物一切可為無用、
　但、案内ノモノ入候所ハ其断可有之事、
一掃除等可為無用、
　但、道橋有来通可仕事、
一泊々ノ宿所、作事等可為無用、並茶屋新規作之間敷事、
一国廻ノ面々泊々ニテ、ツキ米其所之以相場可売之、其外売物常々其所ノ直段ニ売可申事、
右条々、国主・領主・御代官方へ先達テ可被相触者也、

酉正月日

二九五九　（令条記巻二十六　三二四号）

覚

一宿々畳ノ表替無用、古ク候共不苦事、
一湯殿・雪隠、若無之所ハ成程軽ク可被致事、
一盥・柄杓・鍋釜、古ク候テモ不苦候、若無之所ハ軽可致支度事、
一宿ニ可成家、一村ニ三軒無之所ハ寺ニテモ又ハ村場ニテモ不苦事、
一其所ニ無之売物、ワキヨリ遣置之、売セ申間敷事、
　但、衣類・諸道具ハ不及申、菓子・酒肴等ハ猶以持寄申儀可致無用事、

（延宝九年）正月日

右両通ノ前触ハ、寛文七年閏二月先触モ文言同断、

上使　江戸御屋敷へ

二九六〇

貞享元年子四月、平山勘兵衛日帳ノ内、但、光久公御暇御賜ニ付上使、

一四月十一日今七ツ過、阿部豊後守(正武)様ヨリ御用ノ儀候間可罷出之旨、右家来ヨリ切紙到来、則罷出候処ニ、明朝為　上使罷出筈ニ候、方々へ参候間、少ニテモ手間ヲ取不申候様ニ　中将様(光久)へ可申上ノ旨被仰候由、芦野太郎左衛門取次ニテ被申候、則此旨高輪・芝へ申上候、中略、　中将様七ツ半過、当上御屋敷へ　御入被遊候、阿部豊後守様へ御使者相勤候御口上、先刻ハ家来被召寄、明日為上使御出被成候由御知ラセ被仰聞候段、委細致承知忝存候、今晩ヨリ上屋敷へ罷出奉待候、此旨以使者申上候、御返事、先刻御家来へ申達候通被聞召候由、入御念御使者忝存候、弥為　上使可罷出ト存候処、従弟ノ差合ノ儀申来、戸田山城守(忠昌)殿被参筈ニ候、左様ニ御心得可被成由被仰候、御従弟ノ御差合ノ儀、如何様成事ニ候哉ト取次衆マテ相尋候処ニ、小浜民部殿姉死去ニテ候由被申候、大久保加賀守(忠朝)様へ御使者相勤候、明日為上使阿部豊後守様御出ノ由、御家来衆へ被仰、私家来マテ御知セ承達、御懇意忝存候、上使為可奉待請、上屋敷マテ参候テ罷居候、先為御礼以使者申達候、御返事御相応、同十二日、戸田山城守様御家来田中又左衛門六ツ過上御屋敷へ御拝領物等宰領ニテ被参候、

一御時服百

一銀千枚

右御拝領物請台並長持等、御番衆ノ歩行衆則被出合、御座へ被相廻、又左衛門下知ニテ同心ノ衆ヨリ御拝領物等台ニ被積候、此方騎馬ノ衆モ内ヨリ積被申、御書院へ被相直候、山城守様六ツ半時御出、私トモ同役両人共ニ御門前ニ御打向ニ罷出候、御中門・御本門ノ間、御老中・御用人・奏者番衆被罷出候、中門ノ涯ニ島津式部殿被為出候、御玄喚板ノ間マテ　薩州様御出、中

将様モ右同断、左候テ、山城守様御書院ヘ御通、　上意ノ趣被仰、御茶一服被召上候、御料理・御吸物等用意候ヘトモ不被差上候、御立ノ時モ右同断山城守様御立被成、則　中将様為御礼山城守様ヘ御出、私御供相勤候、直ニ御登　城、九ツ過　御目見、御馬御拝領御礼相済、御老中方・牧野備後（成貞）守様マテ御出、若御年寄衆並太田摂津（資次）守様・松平伊賀（忠周）守様・喜多見若狭（重政）守様ヘハ島津帯刀（久元）殿為御使者御勤被成候、御案内私相勤候、中将様御出ノ御老中松平日向（信之）守様ヘハ御供私相勤候、其外ハ十兵衛被相勤候、　中将様方々ヘ御見廻被成、直上御屋敷ヘ御入被遊候、御側衆ヘハ御使（列者）番ヨリ被相勤候、　中略、　御暇御拝領ニ付、　薩州様御老中方並若御年寄衆其外御礼ノ御使者被遣候例御覧被合可被仰上之旨、芝御用人衆ヘ申越候処ニ、先例無之ニ付テ達　貴聞候ヘハ、御親父様御方ケ様ノ節ハ御子様方ヨリ被仰候儀無之事之由、　御意ノ旨返事有之、　中略、　同十四日七ツ過、戸田山城守様御使者加藤助太夫ニテ御拝領ノ御馬御率セ被遣候、則十兵衛殿・私罷出、挨拶仕候、泡盛・菓子・シメ物等出申候、左候テ、中将様於御書院御逢被成、御口上被聞召候、則御玄喚ヘ御出、御馬栗毛伊瀬知半左衛門被相請取、　中将様御手自御手綱御取御頂戴、於御玄喚右御使者ヘ御礼有之、御返事被仰聞候、此以前山城守様御家来衆ヨリ以手紙、今七ツ時御拝領ノ御馬被遣候由被申越候、御厩ヨリモ半左衛門方ヨリ頼置人被仰付置候付、申参候、山城守ヘ御口上、一昨日於　御前拝領仕候御馬、御使者被相添御率セ被成候、見事成御馬ニテ、別テ忝仕合奉存候、為御礼以使者申達候、私相勤申候、御取次福井源蔵、御返事御相応、紗綾五巻山城守様御使者加藤助太夫ヘ以口上、先刻ハ拝領ノ御馬御率セ候ニ付、為御使者御出御太儀ニ存候、為御礼以使者申入候、印マテ目録ノ通進之候、　中略、　御馬御拝領被成、則高輪ヘ御帰館、

公義役廻浦

二九六一

文化三寅

一御代官高木作右衛門殿

右ハ、九州並中国其外浦々俵物糺方並唐物抜荷取締御用被仰付候段、先達テ長崎御船奉行所ヨリ被仰渡候付、向々へ申渡通候処、御領内浦方船掛場其外通筋間道へモ所ニヨリ手分トシテ手伝差遣、不及御掛合不時ニ見廻為致、荷物之様子ニヨリ改方等モ被致候儀可有之旨申来候、

一右ニ付、御領内浦々俵物出方等相進候様、御役場ニテモ精々教諭有之候様、此上出方不進之浦方等モ候ハヽ、前文作右衛門殿並羽倉権九郎殿被申合、致廻浦相糺候様可被致旨、是又申来候、尤、長崎出之煎海鼠出方ノ儀ハ去ル卯年斤高相究有之候、

右之通候条、不時ニ手伝被差越候テモ不都合ノ儀共無之様、兼テ相心得候様可取計候、若又前以差合ノ増様（模カ）相知候ハヽ、早々可申越候、

此旨向々へ可申渡候、

寅四月　　（菱刈実祐）下総

二九六二

一唐紅毛船漂着為取締、肥後国天草郡牛深港へ同心張御番所一ヶ所、同所後銀杏山へ遠見番所二ヶ所取建、長崎地役ノ者為致勤番、其外御普請役両人相詰候様被仰渡候処、右普請出来イタシ、近々勤番相始候、右ニ付、唐紅毛船漂着或不正ノ荷物積込候船為糺、右御番所詰御普請役長崎表地役召列罷越儀モ可有之候ニ付、浦々役人へ兼テ可申渡置候、

右之通、長崎御奉行ヨリ御達有之候、　中略、　御領内浦々ニヲヒテ不正ノ荷物等一切不積入様、猶又堅可相心得候、且御番所詰御役々等廻浦有之候付テハ、諸所浦役共兼テ相心得罷在、聊モ不都合ノ儀共無之様可取計旨、御船奉行ヨリ浦々へ早々可申渡旨申渡、可承向へモ可申渡候、

寛政十一年未四月　　（高橋種央）縫殿

二九六三

一近年不正ノ唐物商買有之趣ニ付、此度九州筋疑敷荷物改トシテ長崎御役所ヨリ役人被差出候旨、従　公義被

仰渡、別段申渡通ニ候、右役人御領内へモ可入来候条、諸所番所並津口番人気ヲ付罷在、右体ノ者入来候ハヽ、不都合ノ儀共無之様御法ノ通取計、早々申出候様、向々如例可申渡候、

寛政元酉四月　（島津久邦）石見

他国使者

二九六四

覚

一他国ヨリノ御使者入津ノ節ハ、津口番所ヨリ可相告候間、可被得其意候、右ニ付テ、川口案内船並向田マテ川筋案内船ハ御船手方ヨリ可相附候旨申渡置候ヘトモ、川口案内船ノ儀、御船手ヘ引合候テハ間ニ逢間敷ト見及候節ハ、京泊ヨリ無遅滞様ニ申付置、川筋案内船ノ儀ハ御船手ヨリ出候様致引合可然候、何方ヨリモ案内船間延ニ無之様差出可申事、

一御使者入津ノ時ハ、村中目通リノ所へ見苦敷物不取散様ニ掃除等屹ト可申付候、尤、女童ニ至マテ無作法ニ立騒致見物間敷候、目通ニ罷出候モノハ慇懃ニ蹲踞候様、所中へ稠敷可申渡置事、

一御使者為用聞物馴候者両人申付置、御使者京泊辺へ一刻ニテモ船繋候ハヽ、小船ニテ出迎、当郷御用承知ニテ候、何方様ヨリノ御使者、上下幾人ニテ御座候哉、何ソ御用等御座候ハヽ、可被仰付由相断、相応ノ用事可相達候、左候テ、向田マテ直ニ可罷上（被）哉、翌朝可被罷立哉、発足ノ刻限、人馬ノ員数且又何方々々ニ幾泊ニテ御城下へ可被致着哉、泊休ノ訳マテ委細承届、早々所嘱へ申聞候様可申渡候、若又其砌急ニ有之、直ニ被罷通候ハヽ、右ノ趣可難相達候間、出向ノ儀致無用、右次第ニ付不承届旨、向田嘱ヨリ慥ニ可申届置事、

一右承届候訳、嘱方へ具ニ相達候ハヽ、其旨早速以宿次町奉行所へ可申越候、左候テ、其晩泊所並翌朝立ノ刻限、人ノ員数、泊休ノ委細別紙ニ書付、右宿次便ニテ向田ヨリ鹿児島マテノ諸所へ無遅滞様ニ可申越候事、

一御使者乗船大キニ有之、向田マテハ登間敷ト見及候ハヽ、則其段モ御船手へ申遣候ハヽ、相応ノ小早可申付事、

右ノ趣、堅固ニ可相守之、若相滞候儀有之ヲヒテハ可及沙汰、尤、津口ニテ支ノ儀番人ヨリ見及候ハヽ、可得差図候間、得其意宜様可相勤者也、

（宝永カ）
寛永二年酉十月廿日　　御家老座印
取次
堀四郎右衛門

水引嘜中

二九六五（の1）

覚

一他国ヨリ御使者ノ節乗船ノ儀ハ、島津筑後殿自船関六反帆、御カリ船ニ被仰渡置、御物ヨリ御道具被相渡置候、然ハ古船ニ相成被相払、御物御道具ノ儀ハ去午十一月都城役人ヨリ返上仕候由、彼方船方役人ヨリ問合申渡置候、左様御座候ヘハ、此節筑後殿自船関八反帆造調相済申候、他国御使者ノ節ハ跡々ノ通、御成リ船被仰付儀ニ御座候哉、　中略、　筑後殿自船御成リ船被仰付置候節ハ、御物（予御）ノ道具左之通為被申渡置儀ニ御座候、

一渋紙笘八十枚

一モメン単兵次十八

一御紋付箱挑灯一ツ

一挑灯掛一ツ

一御紋付小指一ツ　肬金添

一中蠟十丁

右之通、御物ヨリ相渡居候、　末略、

元文三年午八月廿五日　　福山嘜
平原善右衛門
外ニ三人

御船手

（二九六五の2）

本文ニ付

御船奉行ヨリ是迄ノ通御カリ船被仰付度吟味申出趣有之、元文四年未九月廿三日、大野清右衛門殿御取次、左之通被仰渡候、

一享保四年亥六月、御船小早御引取被仰付、左候テ、島津筑後殿小早御カリ船ニテ御使者乗船被相済笘ニ候旨、亥年鎌田六郎太夫殿御取次御証文ヲ以被仰渡候、其節ハ急ニ乗船入用ノ儀カ可有之トノ儀ニテ、借物ノ品為

被仰付儀ニ候、然共其以後船造替等ニモ材木無代銀ニ被仰付置候、殊筑後殿御当地往来ニ付、右小早ニテ有之筈候、且又余方ヘ相替リ大身分ノ儀候ヘハ、此已来ノ儀ハ借物品不被仰付候、都テ筑後殿方ヨリ乗セ付、御使ハ乗船相調候様ニ可致旨、留主居方ヘ可申渡旨被仰渡候、

右ニ付、都城留主居立山伝右衛門ヘ未九月廿四日御船手ヘ召呼、御船奉行ヨリ申渡有之候事、

二九六六

古来使者人数

綱貴公、貞享四年丁卯七月廿六日　御家督ノ節、大口筋御使者通行、左之通、

一松平隠岐守様御使者上下十人　八月五日大口泊　園田藤太夫

一酒井靱負佐様御使者上下三十六人　八月十日右同　間宮九左衛門

一松平越中守様御使者上下十七人　八月十日湯ノ尾　投与左衛門

一細川越中守様御使者上下六十六人　八月十一日山野　西山八郎兵衛

一松平長門守様御使者上下四十六人　八月十六日大口　根来主税

一立花飛騨守様御使者上下四十二人　八月廿六日大口帰国　矢島助兵衛

一毛利式部様御使者上下十一人　八月廿九日大口帰国　片岡矢五兵衛

一松平陸奥守様御使者上下五十六人　九月七日大口　茂庭下野

一有馬中務太輔様同上下三十八人　九月九日山野　岡元源蔵

一彦山座主使者上下二人　九月十日大口　古川嘉左衛門

一同役所使僧上下二人　九月十日大口　方節坊

一亀井能登守様御使者上下十二人　九月廿三日小川内　原田新之丞

一宗対馬守様御使者上下十三人

九月廿三日湯ノ尾　高勢八右衛門

二九六七

吉貴公、宝永元年甲申十月廿九日御家督、翌年九月御帰国御使者、左之通、

一島津淡路守様御使者上下廿五人　九月十日登城　樺山清左衛門

右為御返礼、物頭西八左衛門被遣候、

一伊東大和守様同三十五人　九月廿二日右同　伊東内膳

右同、物頭野村監物被遣候、

一米良主膳様同十五人　九月廿三日右同　米良隼人

右同、御馬廻伊地知喜兵衛被遣候、

一松平肥前守様右同三十五人　九月廿五日右同　田中段右衛門

右同、御目付菱刈孫兵衛被遣候、

一細川越中守様・相良志摩守様ヨリ軽使被遣候、

一秋月長門守様御使者上下四十人余

十一月十四日登城　山田隼人

右為御返礼、物頭吉田右衛門次郎被遣候、

一松平越中守様右同二十八人　十一月十一日右同　三田尻徳兵衛

右同、御目付大村茂兵衛同、

一酒井靱負佐様右同三十人　十二月十一日同　北条茂兵衛

右同、御馬廻(列)くり松元茂兵衛同、

一松平隠岐守様右同十三人　酉二月十一日同　中村勘兵衛

右同、御目付五代舎人同、

一有馬筑後守様右同十九人　津毛与三兵衛

右同、御目付高崎四郎右衛門同、

二九六八

津口番人心得ノ覚

一他国ヨリノ使者入来刻ハ荷物改ニ不及、何方様ノ御使者何某、上下人数何程、持鑓等以下荷物ノ員数承届、陸地入用ノ人馬ノ員数相考、所役人中ヨリ通筋ノ外城

へ無滞人馬相渡候様ニ可致問合旨申達、尤、鹿児島へハ先達テ宿次ヲ以早々可申出事、

但、他国ヨリ他国へノ使者御領内可罷通刻ハ、無異儀差通、人馬無滞可相渡旨、通筋ノ外城へ問合候様、所役人方へ可申達事、

二九六九

元禄十四年巳

一他国ヨリ御当地へ御使者被差越候節、泊並休ノ諸所且又人馬等ノ儀、境目ヨリ先達テ可申越ノ間、人馬無滞可相渡候、尤、宿ノ儀モ御使者其所へ到着無之内ニ人数相応ニ見合掃除旁申付置、其所ノ役人又ハ亭主ニテモ先規ノ通町口マテ罷出可致案内旨可申付候、跡々ハ右案内ニ不罷出所モ有之、取合不宜ノ由候事、

一於諸所、飯米・故実・野菜・薪・馬飼料其外ノ用物、御使者方ヨリ相求度旨申候節、其所ノ役人共致大形、急ニ不相調、其上不成合挨拶ナト仕、用物ノ直段等モ不合ニ申掛候所モ有之由、不可然事共ニ候、右体ノ用事有之候節ハ早速相達、直段等不相応ニ無之様ニ可売渡ノ旨可申渡事、

一御使者御領国（内カ）往還之節、案内ノ者不相付候付、不自由ノ儀共有之由、是又不可然事ニ候、畢竟役人ヨリノ申付大形故、右之通ニ可有之候条、向後ノ儀ハ、慥成者無滞案内相付可申候、勿論人足共我儘ノ儀、其外互ノ雑談ヶ間敷儀共、曾テ不申候様ニ可申渡事、

一御使者通路ノ節、無作法ニ致徘徊者共有（之脱カ）旨相聞ヘ候、百性町人ノ儀ハ不及申、縦雖為士、御使者ヘ行逢候節ハ脇ヘ片付、往還ノ障無之様ニト兼々可申渡事、

一諸所役人共ヲ始、其外ノ者共、御使者ヘモ無遠慮徒ノ物語ナト仕所モ有之由候、自今已後不依何色、御領内ノ物沙汰其外徒ノ物語等不仕様ニ相慎候様ニ可申渡候、付、於諸所出シ候駕籠カキ其外ノ人足共、見苦敷為体ニテ不罷出様ニ可申渡事、

一他国ヨリノ御使者、福山又ハ加治木ヨリハ船ニテ御当地へ被差越、右ノ乗馬ハ陸ヲ取候節、右馬率共ヨリ於諸所用事於有之ハ相応ニ相達候様ニ可申渡事、

一御使者船乗下リノ節、乗船場へ下知人無之ニ付テ其所ノ者共無作法ニ有之儀候間、向後下知人可申付置候、

尤、見物ノ体ニテ不致徘徊様ニ可申渡事、

右之趣、曖・役人中致承知、堅固相守之、緩無之様ニ所中へ可申渡候、若違背ノ儀有之ニ於テハ可及沙汰之条、此旨各地頭所へ可被申渡也、

元禄十四年巳三月廿七日　評定所印

諸郷
郷士年寄
役人中へ

二九七〇

安永八亥

一島津加賀守（忠雅、佐土原）殿使郡司庄太夫、此節桜島燃ニ付、為伺御機嫌登　城ノ事、

亥十一月十一日

島津家歴代制度巻之四捨壱　享保 寛延

諸願向
申渡席

諸願向　申渡ノ場互ニ見合

二九七一
享保十二未十一月
一近年諸座御用漸々事多罷成候所ヨリ、諸座夫々ノ吟味不届事モ可有之御座候、且又首尾書留等二重ノ儀モ有之候、此節御倹約ニ付テハ、支配分等ノ儀モ御用依筋ハ被相改ニテモ可有御座哉之旨、段々申談候趣、総(吉貴)州様達貴聞、比志島隼人(範房)殿ヲ以、左之通被仰出候、
一大玄(綱貴)院様御代ニハ支配不被相分置、都テ表方ヨリ為致首尾事ニ候得共、総州様御代ニ、御側方・御勝手方・兵具所方・御厩方・御書院方ト支配ヲ為被分置事候、向後モ支配ハ只今之通分置、其外ハ大玄院様御代之通相心得可致首尾候、
一役目付申渡儀ハ支配頭ヨリ申渡、且又役座諸道具類ノ儀ニ付テハ、其支配頭ヘ可申出候、縦令御茶道役申渡候儀並御書院方ヨリ御道具類ノ儀申出候節ノ差引ハ御書院支配頭ヨリ致シ、又ハ横目役申付候儀、御免モ大目附ヨリ此内之通可申渡候、隠居・家督継目其外身ニ付テノ願事等ハ支配頭ニ相付、不及内意ニモ不及(衍カ)惣テ表方ヘ申出、願之通被仰付申渡モ表方ヨリ可致首尾候、右ニ準シ、御勝手方・兵具所方・御厩方モ可相心得候、御側方支配ハ依事、表方ヘ出候テ難成儀モ可有之候処、其品ヲ分置候テハ取違モ可有之候条、御側支配ハ此内之通可相心得候、其内相替(刊候)ケ条ハ左之通可相心得候、
一隠居・家督願、タトヘハ此内ハ親表方支配、子御側方支配ニ候ヘハ、親ヨリ隠居・家督願同案ヲ以、御側・表双方ヘ申出来候ヘトモ、向後ハ親支配ノ方ヘ相付、願書一通可差出候、願之通被仰付申渡候節モ親支配ノ

方ヨリ一所ニ可申渡候、

一養子願ノ儀、タトヘハ此内ハ実父御側方、養父表方支配ニ候ヘハ、是又双方ニ申出来候ヘトモ、向後ハ双方願書養父支配ノ方ニ相付、一方ニ可申出候、願之通被仰付申渡候節モ、養父支配頭ヨリ双方一所ニ可申渡候、

一縁組願、タトヘハ此内ハ男ハ表方支配ノ者ノ忰、女ハ御側方支配ノ者ノ娘ニテ候ヘハ、銘々支配頭ヘ申出、申渡モ銘々支配頭ヨリ致来候ヘトモ、向後ハ男ノ方支配ヘ双方願書可差出候、願之通被仰付申渡候節モ男ノ方支配頭ヨリ双方一所ニ可申渡候、

但、右三ヶ条　御隠居様御方モ同断願之通被仰付申渡ノ節、磯ヘ難罷出者ハ磯方勤ノ人ヘ名代可相頼候、

一敷舞台申渡

家督並隠居　継目　継目養子　嫡子成　養子成

外城養子　御役替　屹立候御褒美　拝領物

一御用人座申渡

別立　縁与　初テ高持成　高上リ

職人ヘ御切米被下事

右外ノ儀ハ時々吟味次第、席可相究候、

一外城養子申渡、養父並地頭ヘ一所ニ可申渡候、直ニ罷出候地頭ヘハ先地頭ヘ申渡、引次ニ養父ヘ可申渡候、与力・用頼等差出候地頭ヘハ養父ト一度ニ可申渡候、

一継目・継目養子・別立等願之通被仰付申渡、願出候親類ヘモ願之通被仰渡候段申渡来候ヘトモ、向後申渡ニ不及、首尾不申聞候テ不叶儀モ有之節、於御用人座屹ト無之為知ニ可申聞候、尤、書挙ニ不及候、

一家督・隠居申渡、家督ノ者ハ敷舞台、隠居ノ者ハ御用人座ニテ申渡来候ヘトモ、向後家督ノ者同席ニテ隠居ノ者ヘモ一所ニ可申渡候、隠居ノ者病体ニハ名代ニ可申渡候、

一御用人座申渡ハ、当人他行・病気等ノ節ハ名代召出可申渡候、

右之通、御倹約シラヘ方ヨリ未九月通達有之、御格相改候、

二九七二

一出火

一変死

右披露表方へ申出、首尾表方ヨリ可致候、
一大風洪水ノ損失
一諸人銀米拝借、山方・地方等ノ願
右披露御勝手方へ申出、其外惣テ御勝手向へ相掛候願事ハ御勝手方ヨリ首尾可致候、
右之通被仰渡候、
享保十二未十一月

二九七三　（二九七二号行間にあり、⑥1により補）
一押札　一隠居・家督　一継目　一養子并違変
一聟養子并違変　一継目養子并違変
一継目聟養子并違変　一別立　一嫡子成
一縁与并離別　一外城養子
右、御側支配之者より申出候節、書物差出候者又者御内意申上候儀者此内之通ニて、御側方承候御家老へ取次、御側御用人より遂披露、承届之上直ニ右取次より表方月番御家老へ遂披露、書物之儀ハ差図次第若御年寄へ可相渡候、
一右之通、御側方江相付願申出候者も誰人ニよらす願之通被仰付候節者於敷舞台表御用人より可申渡候、
一御側支配勤之内相果候者継目願出候節ハ、悴表方勤又者勤方無之者ニ候ハヽ、表方へ相付願書可差出候、申渡之儀も表方ニて有之筈候、
右者、支配分ハ只今迄首尾有之候へ共、此節より右之通被改候条、与頭并御側・表御用人江可申渡候、
延享二年丑八月十七日　（島津久甫）左衛門

二九七四
一初テノ　御目見願出候者、仮令親医師ニテ子モ医道ヲ致相伝存念ニテ幼年ヨリ稽古為致候者ハ、申出不及剃髪致サセ置、初テノ　御目見願ノ節右ノ訳可申出、右医師ニ準候者有之候ハヽ、同前可相心得候、且又親俗体ニテ子共ノ内剃髪願ハ有来通ニ候、
享保十八丑十月十七日

二九七五　（二九七四号行間にあり、⑥1により補）
一何そニ付願書等部屋栖之人名前申出候節者、都而何之何左衛門嫡子末子之段、肩書可相記候、御役相勤之者

部屋栖ニても不及肩書之旨被仰渡、

天明四辰八月　　大進（島津久起）
　　仲（島津久健）

二九七六

一外城ヨリ鹿児島士養子ニ罷成候者、向後ノ儀、外城ニテ持高所持致シ、直ニ其高持出候者マテヲ御免可被仰付候、無高ニテモ無拠血筋又ハ為差立訳有之、願ノ依訳被仰付儀モ可有之旨仰渡（被脱カ）、

元文二巳五月十五日　　主殿（島津久貴）

二九七七

一縁組又ハ離別願之儀、向後左之通被仰付、

一親御側方支配ノ者ニテ子表方支配ノ勤有之者ヘ縁組又ハ離別願申出候ハ、、子ノ方支配頭ヘ内意申出候上ニテ親支配ノ御側方ヘ相付願書可差出候、

一親表方支配ノ者ニテ子御側方支配勤有之者ヘ縁組又ハ離別願申出候ハ、、子ノ方支配頭ヘ内意申出候上ニテ親支配ノ表方ヘ相付願書可差出候、

一家督ノ者縁与又ハ離別ノ願親類共ヨリ申出候ハ、、聟支配ニ相付可申出候、右願書、組頭次書ヲ以、聟ノ親祖父ニテモ家督ノ支配頭ヘ双方トモ可申出候、

一御側方支配ノ御役人子共、男女トモ縁与又ハ離別ニ付御内意申上候儀ハ此内之通ニ候、

右之通被仰渡候、

延享二丑四月　　本（島津久豊）

二九七八

一養子家督ノ者違変不致候テ不叶訳有之節ハ、跡相続ノ者見立仕居置、其者ハ隠居ノ願可申出候、已後依申分、本家ニ立帰候様ニモ可被仰付旨、正徳三年被仰渡置候ヘトモ、向後養子難遂者於有之者、双方親類熟談ノ上致異見、何レノ筋ニモ違変不致候テ不叶儀有之節ハ、其身隠居願ニ不及、違変於御免ハ跡養子ノ儀ハ親類見合、追テ可願出候趣ノ書物ヲ以可申出候、

一小番・大番悴ヘ代番願ノ儀、御家老承届差免事候ヘトモ、已後ノ儀、当番ノ節差支ノ者ハ不及願、小番ハ嫡子又ハ小番ノ内名代番、大番ハ嫡子・二男・三男又ハ

大番ノ内名代番被仰付候、
但、一代小番・新番ハ嫡子名代番不被仰付候、同格ノ者名代番可差出候、
一諸士子トモ角入・前髪取願年生被極置候ヘ共、向後ノ儀ハ年生ノ極ニ不及、初テノ　御目見相済、勢比相応相見得候者ハ与頭可被申出候、御家老見分ノ上何分ニモ可申渡候、
一諸所ヘ勤方ニ付引取（刊越）居候者・田舎入御暇被下置候者ノ子共角入・前髪取ノ願、初テノ　御目見相済、勢比相応ニ相見ヘ候者御当地ヘ不及差越、其所ヨリ与頭ヘ相付願可申出候、不及見分ニモ可申出候、
一諸人御礼事等屹立候願書ハ竪紙、其外ノ儀ハ文言依長短、竪紙・横紙相用候様被仰渡置候ヘトモ、向後ノ儀、竪紙・横紙ニテモ勝手次第可相用候、
右之通被仰渡候、
延享五辰四月

二九七九
一御光儀願
一御役・地頭職ノ御礼願
一御直元服
一御名代元服並御前元服、又ハ元服ノ御礼、初テノ　御目見願
一家督継目御礼願
右ヶ条、有来（刊通）ノ竪紙可相用候、其外申出候書付ハ文言依長短切紙可相用旨被仰渡、
寛保三亥十二月

二九八〇
一諸人御礼事等屹立候願書ハ竪紙、其外ノ儀ハ文言長短ニ依リ竪紙・横紙相用候様ニ被仰渡置候ヘトモ、向後ノ儀、竪紙・横紙ニテモ勝手次第可相用候、
右之通、表方ヘモ致通達、御側方・御勝手方ヘハ写ヲ以可相達候、
延享五辰四月　（島津久丘）大蔵

二九八一
一御家老与ノ面々、角入・前髪取ノ願申出候節ハ、月番

御家老宅へ罷越、其後右之願可差出候、尤、対客前右
含ノ段内意可申込置候、
一小番ノ儀、若年寄支配ノ事候間、角入・前髪取願出候
節ハ、月番若年寄宅ニテ仕向右同断、
一新番ノ儀、大番頭支配ノ事候間、右同断ノ願申出候節
ハ、月番大番頭宅ニテ前条同断ノ取扱可致候、
一御小姓与ノ儀、御小姓与番頭支配ノ事候故、右同断ノ
願申出候節ハ、月番御小姓与番頭宅ニテ前条同断ノ始
末可致候、
右之通、以来被仰付候条、此旨致通達、可承御役々へ
モ可申渡候、
天明七未正月　　仲（島津久健）

二九八二

一毎月対客日
三日　十三日　廿四日
御家老与之面々角入・前髪取願付、対客ノ儀別段申渡
通候、依之右之通対客日相定候条、朝五時マテ又ハ八
ツ後退出掛可致面会候間、右之心得ヲ以可被相越候、
此旨致通達候、
天明七未正月　　仲

二九八三

一新番ノ面々、角入・前髪取ノ願申出候節ハ、月番大番
頭宅へ対客ニ罷越、其後右願書可差出候、尤、対客前
右ノ含ニ候段、内意可申込置候、左候テ、支配ノ事候
間、角入・前髪取候様大番頭ヨリ相達、月番御家老へ
モ右ノ段届可申出置候、
一御小姓与ノ面々、右同断ノ願申出候節ハ、御小姓与番
頭宅ニテ前条同断ノ始末ニ可致候、尤、支配ノ事候間、
角入・前髪取候様御小姓与番頭ヨリ相達、月番御家老
へモ右ノ段ハ届可申出置候、
右之通被仰付候条、此旨大番頭・御小姓与番頭へ可申
渡候、
但、向々へハ別段申渡候、
天明七未正月　　仲

二九八四　（二九八三号行間にあり、61により補）

一新番并御小姓与之面々、角入・前髪取願候者、対客之儀別段申渡通候、依之毎月両日ツヽ、対客日被相定置、朝出勤前又者八ツ後退出掛ケ対客有之候様可被取計候、尤、右日柄之儀者可被申出置旨、大番頭・御小姓与番頭江可申渡候、

天明七未正月　仲

二九八五

一奥向御役人直触以上以下トテモ何ソニ付取次ヲ以申渡事、向後ハ家ニ掛候儀トテモ都テ其分ニ相掛候儀ハ於奥可申渡候、継目家督其外右体家格相掛候分ハ是迄之通、於表申渡可有之候、

右ハ、当三月申渡候趣モ候ヘトモ、猶又右之通ニ相心得候様可申渡候、

天明七未八月　（喜入久福）安房

二九八六

一就御参府諸士御供ノ願書、御家老宅ヘ直差出来候ヘトモ、向後ハ其支配頭所ヘ可差出候、左候テ、大番頭・御小姓与番頭ノ儀ハ御家老宅ヘ右願書可致持参候、尤、御小姓与ノ願書ハ、与々ノ番頭銘々持参可有之候、

但、間ノ江戸詰願モ同断ノ事ニ候、

右、可申渡候、

天明七未六月　（市田教国）勘解由

二九八七　（二九八八号行間にあり、61により補）

一逼塞

奉行・頭人・御目付ヘ取合罷出候次第、御目付相詰候儀、前条同断、

右、御赦免之節も其座之奉行・頭人召出、何某事、何御咎目被仰付置候得共、御赦免被成候間、奉行・頭人宅江召寄、御免之段可申渡旨御用人より可申渡候事、

一当人之親類江も何某事、何御咎目被仰付置候処、御用有之候間、親類相付何某宅江可罷出旨御用人より書付、奉行・頭人江可相渡候間、奉行・頭人見届之、当人之親類御役所ヘ召寄可相渡事、

一親類当人を召列、奉行・頭人之宅江罷出候節、逢候而

御咎目被成御免候間難有可奉存旨申渡、且又月代仕不相替御役可相勤儀をも可申聞候事、

一致月代、当日ニても翌日ニても奉行・頭人召列致登城、御用人へ相付、御礼并首尾可申出候、其節大御目付衆於敷舞台見届可申候、御家老ハ不及対面候、於敷舞台大御目付御逢被成候節者、御用人壱人・御側目付壱人可相詰候事、

正徳三巳五月

二九八八

一御役懸之面々、不依何事被仰付候節ハ支配ノ大頭へ被仰渡、支配ノ奉行・頭人月次(内並)ノ御礼罷出候面々へ御用人ニテ可被仰渡候、筆者・小役人申渡候節ハ其支配頭へ申渡、支配頭ヨリ筆者・小役人へハ可申渡候、

一隠居・家督・養子成・継目・嫡子成・別立・縁与・元服・名替・拝借・取込・延訴訟、其外何事ニテモ願出候儀ハ、此内之通可申出候、被仰渡候節ハ右通ニ可相心得候、尤、支配付ノ面々此内之通、

一役掛ノ面々へ御咎目ノ儀被仰渡候節、且又御赦免ノ儀モ前条之通ニ支配頭へ可申渡候、

一月並御礼罷出候面々ニ御咎目御免ノ節、其支配頭於宅見届ノ上、月代等申付、御礼ニ罷出候節、此中ノ通大目付可被見届候、

一筆者・小役人御赦免ノ節、大支配頭ヨリ支配頭へ被仰渡候節、其支配頭於宅見届、月代等申付、御礼ニ罷出候節ハ右同断、

右之通、此節被相極候間、得其意間違無之様可申渡旨、(島津久賢)内記殿被仰渡候、

正徳四午七月

二九八九

一依科士並外城衆中・足軽・御小者・御中間・諸座付被召放、被処遠流、赦免已後無名字ニテ親類家内ニ被入置候者、又ハ親族依科右同断ノ者、家中奉公願出候節ハ、向後抱主人並願人親類双方書物ヲ以可申出候、左候テ、吟味ノ上、何分申渡可有之候、

右、支配々へ申渡、可承御役々へ可申渡候、

宝暦三年酉八月　(伊勢貞起)兵部

二九九〇

一諸向名替並奥向ノ面々等名拝領等ノ節、是マテ麻上下着用ニテ申渡来候ヘトモ、已来不及其儀、平服ニテ申渡、御礼並掛ノ向ヘ計相越候様被仰付候段申来候間、此旨可承御役々ヘ可申渡候、

寛政十二申七月　（川田佐賢）伊織

二九九一

文化五辰三月、大番頭座其外御引払ニ付、左之通、

一小番・新番、角入・前髪取ノ儀、御小姓与同様毎月五日廿五日両度ツヽ被相究置候ニ付、願存候人ハ前以六与触役所ヘ内意申出候様、各小与中ヘ不洩様写ヲ以申渡、本文無滞相廻、留ヨリ来ル廿日限御返納可有之候、

已上、

文化五年辰三月十四日　六組触役所　印

二九九二（の1）　（二九九三号行間にあり、㊶により補）

一御側支配之内家督之者ハ、其家内者御側支配、部屋栖ニテ候ハヽ、其身計御側支配、家内者表支配と被仰渡、

享保二酉十一月

（二九九二の2）　（二九九三号行間にあり、㊶により補）

一隠居・家督継目其外ニ付而之願書、向後支配無構、表方ヘ可願出候、御側支配之儀ハ此内之通可相心得旨被仰渡、

享保十二未十月

二九九三

一入来院石見殿（定勝）家来私遠流ノ願、用頼ヨリ申出、先年石見殿御番頭勤ノ節ハ直ニ被願出、不相並候付、此節藤（菱刈実詮）馬殿ヨリ主鈴殿（島津久品）ヘ御相談有之、向後石見殿身分同格ノ人ヨリハ用頼ヨリ申出候筋被究置候、

宝暦九卯五月七日

但、藤馬殿大目付御役、主鈴殿御家老カ、

二九九四

一御側方ヘ相勤居候部屋栖ノ者、別立願出候節ハ御側方ヘ相付筈候、縁与願ノ儀ハ貫請候方ノ支配ニ可相付旨

被仰渡、

享保十二年未十二月

二九九五

一隠居願ノ人、無役ニテ家督ニ罷成候人、御側支配ニテモ表方ヘ相付筈候、

御目見願、親無役ニテ又ハ御側支配ニテモ書物表方ヘ差出(ヲ)候、親御側支配ニテ子無役ニテ候ハ、親之方ヘ相付筈候旨被仰渡、

享保二十年卯九月十九日

二九九六

一縁与願・高上リ・御目見・御寄合・継目等ノ願、月次御礼罷出候表方御役人、右願申出候節ハ、次書ナシニ差出候様被仰渡、

元文五年申五月

二九九七

一御側支配ノ御役人、御番入ノ願御側ヘ差出、御家老衆被聞召届候上、与所ヘ差出候様被仰渡、

寛延二巳四月廿九日

二九九八

一御側支配・御隠居御方支配御役人帳ニ有之程ノ面々ヨリ家督継目・縁与其外不依何色申出候節ハ、与之次書ニ不及可差出旨被仰渡、

寛保三年亥八月廿四日

二九九九

一御側支配・御隠居御方支配御役人帳有之程ノ面々ヨリ家督継目・縁与離別其外不依何色申出候節ハ、与之次書ニ不及、御側方・御隠居御方御側御用人・御近習役ヘ相付可申出候、此已前右支配ノ面々縁与並離別等願出ノ節、与頭ヨリ次書ニテ差出モ有之、又ハ次書無之差出モ有之、不相並候付、向後御側方支配・御隠居御方支配御役人帳ニ被召載置候程ノ御役人自分ニ申出候儀ハ不及申、身ニ付テ小役人・無役ノ親類ヨリ願出候節ハ自分願ニテハ無之候付、組頭ヘ届ニ不及、申出直

ニ御側方・御隠居御方▽[61]へ有来通可申出候、御側方・御隠居方支配△御役人帳ニ無之小役人ノ面々願出候節ハ、先格之通与所次書ヲ以、銘々支配ノ御側御用人・御近習役へ〈[列]相付〉可申出候、

右之通被仰付候間、与頭・御側・表・御勝手方・御隠居御方御用人・御近習役へ承置候様可被申渡候、

寛保三年亥八月廿四日　　織部（種子島時成後北条時守）

▽[列]蒲生十郎左衛門（清高）△

三〇〇〇

一安藤善助二男安藤源太左衛門別立、源太左衛門当分御守殿方大番相勤居候、此節善助ヨリ附属方ノ願申出候、善助ハ表方、源太左衛門ハ御側方ニテ候ヘハ、双方ヘ申出方ニモ可有之哉ノ旨与頭ヨリ被申出候付、弾正殿ヘ申上候処、大蔵殿ヘモ被仰談双方ヘ申出候様、倉山角太夫ヘ被仰渡、

五月廿六日

三〇〇一

一縁与願ノ節ハ貰請ノ方支配ニ相付筈申渡置候、貰請ノ方支配ト有之候ヘハ聟支配ノ事ニテ候、聟ノ親支配ニテハ無之候、離別願ノ節モ右同断聟支配ニ相付筈候、

未十二月廿二日　　弾正

三〇〇二

一鎌田勘助弟鎌田与右衛門ヘ山川衆中丸山六右衛門妹縁与ノ願申出候、勘助事ハ納殿御役相勤、与右衛門事ハ勘助家内ニテ無時ノ御番者相勤候ヘトモ、御番等モ不相勤者ニ候故、勘助支配ノ方ヨリ申渡候筋可有之儀ト申談、御側方ヨリ申渡有之候、右ハ大蔵殿・中務殿・主計殿・蔵人殿被申談、右之通申渡有之、已後右ノ格式ニ申渡有之筈候事、

申四月九日　　官太夫

三〇〇三

一鎌田勘助弟鎌田与右衛門ヘ山川ヨリノ縁与、本文ノ通被仰渡、然処ニ御側御医師小田宗積忰ヘ縁与書物差出

候、左候テ（ハ）未十二月弾正殿ヨリ被仰渡置候御書付ハ勘助ヘ被仰付（渡）候首尾トハ致相違、何方ヘ相付可申出旨難決候付、御側御用人町田八右衛門ヘ申談候処、八右衛門ヨリ得差図候処、最初弾正殿ヨリ被仰渡置候通首尾可有之旨、中野駒右衛門致承知候事、

亥八月十八日

三〇〇四

一鎌田勘助二男鎌田与助ヘ、藤井助左（右）衛門娘縁与ノ願、御側御用人ヘ相付申出候付、小林中太兵衛ヨリ織部殿（種子島時成）ヘ御尋申上候者、親支配ニ相付可申哉、聟支配ニ相付可申哉、二様相見ヘ難決候旨申上候処、向後都テ聟支配ヘ相付可願出旨、織部殿被仰渡（ナシ）候事、

元文五年申十月八日　　取次　本田瀬左衛門

三〇〇五

一外城養子願被申出御法候ヘトモ、向後何方外城何某願奉存候、何程高持来候訳書記、願書可差出候、高持来由緒ノ者モ同前被仰渡候事、

元文二年巳十一月　　主計（樺山久初）　取次　有川幸右衛門（貞利）

三〇〇六

一表方支配人二男・三男・弟抔、御側方ヘ相勤居、其人別立願申出候節ハ、御側方ヘ相付筈候、

未十二月廿二日　　弾正

与頭

御側御用人ヘ

三〇〇七

一里村半右衛門継目養子、伊地知権右衛門弟伊地知郷八ヘ被仰付被下度旨、半右衛門親類トモヨリ与ヘ相付申出候、伊地知権右衛門ヨリハ、弟権八事里村半右衛門継目養子被仰付被下度旨、権左衛門（ママ）事表御小姓被仰付置候故、御側ヘ相付書物差出候、御側方ヨリ表方ヘ被相渡候ヘトモ、継目養子願ノ儀ハ継目養父方ヘ相付差出筈ノ事候間、権左衛門（ママ）ヨリ▽願之儀も組ヘ相付申出候様可申渡旨、御側方ヘ被相達候間、権左衛門（ママ）より△

願出書物組へ差出候ハ、、与頭次書ニテ月番御用人へ相付可差出旨可申渡旨、市太夫殿ヨリ小林中太兵衛へ被仰渡候付、二番与頭平田平左衛門へ申渡有之、

寛保三年七月二十八日

三〇〇八

一森春達継目養子願、表方へ差出候へトモ、春達事御側へ相勤居、先頃縁与願申出候節、御書院支配へ相付願書差出候、且又仰渡留ニ、親御側方へ相勤候内相果候テ継目養子願出候節ハ、子并養子ニ相成候者表方支配ノ者ニテモ御側方へ相付願出候様ニト有之候、然トモ御側御同朋・御茶道・小坊主支配者御書院支配ニテ、表方へ相付願出候筋（列ニ）ハ相見へ難決候故、主計殿へ西彦太郎ヨリ得御差図候処、大蔵殿・中務殿へ被仰談、春達継目養子願ノ儀ハ御書院支配へ相付差出可然旨被仰渡候故、春達親類へ右之段申渡有之候、

寅六月十六日　　取次　島津弥一郎

諸申渡事席ノ事

三〇〇九

敷舞台申渡

一家督并隠居　一継目　一継目養子
一嫡子成　一養子成　一外城養子
一御役替　一屹立候御褒美　一拝領物

御用人座申渡

一別立　一縁与　一初テ高持成
一高上リ　一諸職人江御切米被下候事

右、外之儀ハ時々吟味次第、席可相究候、

一江戸表大目付以上、直ニ申渡事、并奥向御役人ノ直触以上へ御役被仰付、其外右体御家老直申（渡之）候節ハ、御用ノ間ニテ申渡スヘク候、

但、大目付以上へ取次ヲ以申渡程ノ節ハ、御家老縁頼ニテ無屹可申渡候、

一奥・表御役人ノ直触以上、取次ヲ以申渡候節ハ有来通、尤、是ハ表ニ掛候儀ニモ、向後ハ御側御用人ヨリ於奥申渡候様可致候、

一御国元御用ノ間ノ場ハ鹿ノ間ニテ申渡、別(列前)ノ場ハ水仙ノ間ニテ可申渡候、
但、御家老座縁頬ニテ達ノ儀ハ前条同断可相心得候、
一大目付已上名代ヘ申渡事、若無役ノ者差出儀モ候ハヽ、其節ハ水仙ノ間ニテ可申渡候、
一直触已上ノ表御役人ヘ御家老直ニ申渡候節ハ、敷舞台ニテ可申渡候、
右之通被仰付候旨被仰渡、
天明七未三月

三〇一〇　（三〇〇九号行間にあり、61により補）

一元文
右者年号相改候段、享保廿一年辰五月廿八日於敷舞台島津主水殿より御弘メ有之、
一安永十年丑五月八日、於敷舞台今度年号天明と改メ之旨被仰渡、御側・表・御勝手方御支配諸御役人惣出仕、大御目付格已上御列座ニて、大進殿(島津久起)より口達を以被仰渡候御書付可有之、

三〇一一

一大目付ヘ役儀其外願事等申渡、是迄夫々ノ御役場ニテ申渡来候ヘトモ、向後其役所ノ縁頬(列敷)ト其席相付候別席等ノ内見合申渡候様被仰出候条、於向々申渡候席遂吟味可被申渡候、
天明六午十二月

三〇一二

一於御側御用人座申渡来候分ハ於縁頬可申渡候、
一表并御勝手方於御用人座申渡来候分ハ、於廊下可申渡候、
一右外、夫々於御役座申渡来候分ハ、都テ右之振合ヲ以(列可)致取扱候、
右申渡、可承向々ヘ(列も)可申渡候、
天明七未七月十日　安房(喜入久福)

三〇一三

一御城代　御家老　若年寄　大目付
右、御役々面々ヘ達　貴聞申渡程ノ儀ハ、御用ノ儀ハ

直ニ可申渡候、其内不達　御耳ニモ地頭所家来等ノ軽キ儀ハ御用人ヲ以可申渡候、首尾好キ方ニ無之御用ノ儀ハ御用人ヲ以可申渡候、以上、

正徳元卯十月

三〇一四

一島津兵庫殿

右、今日於椿之間　御名代島津越後殿ニテ、江戸御用之儀候間、中途差急キ出府有之候様被仰付候、

右之通、表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘハ写ヲ以可相達候、

天明六年午十二月二十六日　（喜入久福）安房

三〇一五

一島津将監（久起）殿叔父倉山藤八嫡子倉山善次事、此節御前元服被仰付、藤太ト名替ノ願被申出趣有之、願之通被仰付候間、自分御礼被罷出候前於椿之間申渡候様、（鎌田政）典膳殿ヨリ致承知候ニ付、御格之通於椿之間申渡有之候事、

但、御用人申渡、

寛延四年未九月十二日　伊集院十蔵（久東）

三〇一六

一御礼使之儀、此跡御用人座ニテ申渡来候ヘトモ、公方様ヘ御目見ヲモ仕事候ヘハ、御家老座ニテ申渡筋可然候由、　（吉貴）総州様仰出有之候付、以後御家老座ニ於テ御家老ヨリ被仰渡筈候、

但、委細ノ儀ハ　（重年）太守様御家督初テ御下国ニ付、北郷左中御礼使被仰付候節、右之通相究候、

宝暦三年酉四月晦日　取次　島津権左衛門（久智）

三〇一七

一島津玄蕃殿

右ヨリ　太守様・御前様ヘ自今屹立候御祝儀江戸ヘ以書状被申上候儀、備中殿同様被仰付候、　姫君様ヘ以書状御祝儀申上ラレ候儀ハ追テ何分仰付ラル可候、

右之通、（利可）相達候、

酉四月　兵部

右御本文ノ通、於御家老座次之間玄蕃殿ヘ申達候処、

御礼被申出候事、

取次
伊集院十蔵

三〇一八

一大身分ノ家来・外城衆中ナトヘ被仰付程ノ結構ナル儀被仰渡候節ハ、大身分ノ取次御用人ヨリ御用之段御手紙申達、若差支モ有之候ハ、名代可被差出旨、右紙面ノ内ニ書加相達、名代ノ人ニテモ於芳薬之間縁頼御格之通申渡筈候事、

但、右名代ノ人ハ与頭・御番頭ノ内ヘ申渡有之筈候、

此跡右体ノ儀ハ軽キ筋ニ候故、右通申渡候様ニ(列)と(稀)く主計殿(山久初)ヨリ致承知候、

寛延三年午六月十三日　　相良弥一(長圭)兵衛
御用人ニテ

三〇一九

一御兵具所付足軽亡川畑友助忰川畑喜兵(列)三次ヘ、親友助於求麻表御尋者捕候節疵付相果候付、福昌寺戦亡帳被載置、友助ヘ被下置候御切米直ニ被下候儀、是又幼少ニ候故、致成長相応之者ニ候ハ、到其節品能可被仰付旨、主殿(殿脱カ)ヨリ被仰渡候付、御兵具所方取次名越左源太(恒篤)御取次ニテ、於敷舞台物頭山岡斎宮(久達)ヘ申渡有之、

宝暦五年亥三月朔日

三〇二〇

一前条同断ニ付、列立罷越御用相勤候漆田林蔵・池田清左衛門、相捕候為御褒美一代御兵具所付士被仰付候節、於敷舞台物頭召列罷出候付、直ニ両人ヘ申渡、左候テ、物頭ヘモ申聞候事、

但、林蔵・清左衛門、無刀ニテ罷出候事、

宝暦五年亥三月朔日

三〇二一

一寄合以上ノ人次男三男等別立ノ願被申出、願之通被成御免候節、直披露ニテ御家老衆ヨリ願出(列)書物御張紙ヲ以被仰渡候、代々小番并新番等ニ被入置候旨被仰渡候節、当人ヘ於敷舞台御取次御用人ヨリ申渡、与頭ヘモ右之趣申渡有之、左候テ、首尾掛ヘ御取次証文ヲ以申渡有之、宝暦五年亥正月二十八日平田休兵衛御番入御取次

戸田伝五郎（盛庸）、寛延三午七月十八日市来次郎兵衛御番入ノ節島津権左衛門（久智）御取次ヲ以、右之通ニテ候事、

三〇二二

一御側御医師池田隆雲

御城下代々士被仰付候節、於敷舞台当人へ直ニ被仰渡、御取次相良弥一兵衛（長圭）ヨリ、

宝暦四年戊十一月二十八日

三〇二三

一山岡斎宮（久澄）嫡子山岡政次郎、御直元服ノ願被申出、願之通御免被仰付旨、於御用人座斎宮麻上下着用ニテ申渡有之、取次川上弥五太（久福）夫、

宝暦三年酉十二月二十五日

三〇二四

一村橋左膳

右ハ、亡父島津左膳代別立被仰付候処、此節嫡子村橋源十郎元服為仕度御座候、別立已後元服仕候者無御座候付、御見合ヲ以被仰付度旨願被申出趣有之、　御前元服被仰付、折三合・御樽二荷・御太刀・馬代進上被仰付候旨、内蔵殿（新納久品）ヨリ被仰渡候、右申渡席ノ儀、家格ヲ以被定置候面々元服申渡候節ハ、御用人座ニテ申渡来候へトモ、別立已後此節御見合被仰付被下度旨願被申出候付テハ、席ノ儀ハイヅ方ニテ可申渡哉ト及吟味候処、小笠原郷左衛門（列右）嫡子・河野安之左衛門（列右）嫡子、当分之家格被相定候已後元服願ノ節、両家トモ御内証被仰付、其節申渡候先例ハ有之候へトモ、此節ハ　御前元服被仰付候旨被仰渡候付、内蔵殿へ得御差図候処、此節モ右先例ノ通可致旨致承知、於御用人座申渡有之、

但、当人支度麻上下、御目付（列相）詰、取次宮之原宇右（通直）衛門、

宝暦三年酉十一月十五日

三〇二五

一園田与藤次、御切米被相重、都合五十表被下候節ノ申渡敷舞台ニテ候、無役ニテ候へトモ江戸御供（列をも）近年被仰付、　御前へモ被召出（列候）ニ付、右之通ニテ候、取次島

津権左衛門(久智)、

宝暦三酉十一月十五日

三〇二六

一肥田覚右衛門継目養子弟肥田藤助

右、願之通被仰付候付、一処ニ於敷舞台被仰渡候処、願人有馬筑右衛門・湯地休右衛門致江戸詰居(ル)候由申出候ニ付、江戸詰イタシ候人へ被仰付候先例見当不申候間、如何可仕哉内記殿へ得御差図候処、西田藤助マテ於敷舞台可申渡旨致承知候付、藤助へ申渡候、願人筑右衛門・休右衛門名代(ル)ニハ不申渡候様是又致承知候、申渡無之、取次堀甚左衛門(興貞)、

宝暦三年酉八月二日

三〇二七

一平田靱負殿(正輔)付衆中栗野預内田吉左衛門養子吉利杢右衛門家来小村次郎兵衛事、内田次郎兵衛

右、由緒ノ訳ヲ以養子被仰付候処、地頭入来院石見(定勝)殿於芍薬之間縁頰申渡、吉利杢右衛門事ハ甑島移地頭被仰付置、甑島へ差越候へハ、名代ニモ可被仰付哉、琉球并道ノ島・京・大坂抔へ差越相勤候人へハ先例名代ニモ被仰渡候、此節ハ如何ニ可被仰付哉、典膳殿(鎌田政昌)へ樺山左京ヨリ御尋申上候処、弥名代へ可申渡旨承知ニ付、名代吉利杢左衛門(ママ)(ル)ヘ於敷舞台申渡候、石見事其身独礼ニテ候ヘハ、御礼廻ノ儀大目付已上へ御礼廻可致候哉ノ旨被申出、是又典膳殿へ御尋申上候処、大御目付以上可被相廻旨致承知候ニ付、石見殿へ申渡候、杢左衛(ママ)門ニモ同断御礼廻之儀申渡候事、

宝暦三年酉七月十一日

三〇二八

一村田五右衛門

右者、市来左中殿(政方)ヨリ右五右衛門二男村田政次郎事、左中殿孫ニテ養(ル)ヒ子致度旨被申出、五右衛門ヨリモ願申出趣有之、願之通被仰渡(ル)候間、北郷権八三男種子島蔵人弟分致度旨願被申出、願之通被仰渡候節、於御用人座申渡有之先例ヲ以、此節将監殿へ堀堀右衛門(貞紀)ヨリ右先例之通可申渡(ル)候哉之旨得御差図候処ニ、将監殿難

被決、兵部殿（伊勢貞起）へ被仰談候処、兵部殿ヨリ相馬殿（義岡久中）并典膳殿へ被仰談候上、養ヒ子イタシ候儀訳モ相替事ニ候間、五右衛門へ申渡候席ハ於敷舞台申渡可有之儀可然ト被仰談、五右衛門へ於敷舞台申渡有之、

但、養ヒ振ノ儀願之通被仰渡候節ハ訳モ相替事候間、時々得御差図候様致承知候事、

宝暦三年酉七月十一日

三〇二九

一関太次右衛門二男関次郎右衛門

右次郎右衛門別立之願、太次右衛門ヨリ申出筈之候処、御奉公ニ付他行致シ候ニ付、親類四元幸左衛門ヨリ願申出趣有之、幸左衛門へ御用申渡候処、右幸左衛門ニモ御奉公ニ付他行ニ付他行仕候由、親類築瀬玄兵右衛門首尾申出候、依之御家老へ御尋申上候ハ、右通親類ヨリ願申出置候処、幸左衛門ニモ致他行候ニ付、名代へ被仰渡候先例ハ無之候へトモ、縁与ノ儀ハ、願人御奉公ニ付致他行候節ハ名代ノ人へ被仰渡事御座候へハ、大概為似寄例ニテ有之候、家督継目又ハ養子願ナトトハ訳モ為相替筋相見へ候、然ハ右幸左衛門へ名代可被仰渡哉ト御用人中吟味ノ上、主計殿（樺山久初）へ被得御差図候処、幸左衛門へ名代ニテ申渡ヘク旨被仰渡、右玄兵右衛門へ於敷舞台申渡有之、

寛延三年三月十一日　取次　諏訪次郎右衛門

三〇三〇

一部屋栖ノ者名替願、向後ハ家督ノ者不在合節ハ親類より願出候様可致候、勤方有之候節ハ有来通候旨被仰渡、

延享元子五月

三〇三一

一門首於敷舞台御家老衆直申渡有之候節、席詰人数御首尾ノ御家老衆・大目付衆一人、奏者番一両人ノ間、表御用人一人、引廻御近習役一人、御目付一人、相詰候事、

但、寺社奉行奏者ニテ被罷出候事、

正月十五日

三〇三二

一吉川玄隆事、国分衆中ニテ候処、御当地士ニ被召成、奥医師ニ被仰付候、依之与入ノ願申出、五番与被入置候、然ハ右式願、此跡御側支配之者与入ノ儀、御側方申出被申渡候儀有之候ヘトモ、向後右体組入之儀、支配無構表方ヨリ御差図被成筈候間、御用人中可承置旨、中務殿（島津久賢）ヨリ被仰渡、

享保十八年丑九月十八日　小林中太兵衛

三〇三三

▽61本文申渡之場に入筈也、△

一取次ヲ以於敷舞台申渡候儀ハ、一人ハ不益ノ由ニテ仰渡無之候、

一右ニ付、同日梅之間ニテ申渡ノ人有之候節、一人ニテモ不苦候事、

一右ニ付、学文稽古市来清兵衛稽古扶持十八表（俵）、其外御中間黒江六郎右衛門依功御厩付士被仰付候節ノ申渡ハ依訳一人ツヽ申渡有之、

一不依何事申渡候儀、支配方ヨリ申渡事候、其事ノ初リニテハ、勿論其通可有之候、依事以前之支配方ニテ有之儀ヲ其当人別支配ニ成候ヘハ其方ノ支配ヨリ申渡候儀モ有之候ヘ共、左候テハ帳面ノ首尾方モ区々有之候間、向後ノ儀ハ不依善悪、其当人別支配ニ成候テモ其事ノ初ヲ承候支配方ヨリ申渡候儀モ其節ノ支配ニ無構、最前ノ支配ヨリ申渡候様可然ト申談候間、支配有之（79）面々右之通可被相心得候、

以上、

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

三月　谷山角太夫

▽（61行間にあり）本行付、小倉作左衛門継め嫡子小倉市兵衛継め者別而延引之訳を以壱人ヘ申渡有之、△

三〇三四（の1）

▽61本文申渡之場に入筈也、△

一御精進日申渡候事并不申渡事ニ付テ段々被　仰出、

一十日　十四日　十七日　十九日　晦日

但、小之月、二十九日、

右、御精進日不申渡事、左之通、
一御祝儀事并進上物之事
一御役人帳有之程ノ御役被仰付候事并御役替之事
一地頭職被仰付候事并御繰替之事
一重キ勤方被仰付候事
一敷舞台申渡程ノ屹為致御褒美ノ事
一軽キ儀ニ付テモ御科目被仰付候事
一首尾能無之御役御免并御役替　軽キ役人マテモ
右之御精進日申渡候事、左之通、
一御役料被下候事
一御心付拝領物之事
一自分依願被仰出候儀ヲ申渡事
一依願首尾能御役御免之事
一軽キ役人役替之事
一御座ニテ申渡程ノ軽キ御褒美之事
一八日　二十日　正月二十四日　十一月二十九日
右之御精進日不申渡事、左之通、
一御祝儀事并進上物
一軽キ儀トモニ御咎目之事
右外之儀ハ何辺ニテモ可申渡、
享保六年丑十二月二十六日

（三〇三四の2）

朱書
一五日
右ハ霊龍院（吉貴室）様御忌日ニテ候間、御祝儀事并進上物ノ儀不被仰付候、
一江戸詰ノ人御請判形、御精進日ニテモ被仰付候間、左様承置候様被仰渡、
享保二十卯年

三〇三五

一三日
月桂院（吉貴側室、継豊実母）様御忌日ニテ、御肴進上ノ事、御役人自分祝事致候儀ハ無用、当時表方ハ不苦候哉、
一二日
知光院様、
以上、

三〇三六

一比志島隼人三弟成比志島源助

右ハ四弟ニテ幼少ノ時分ヨリ山田源左衛門方ヘ養子遣置候処、養子難遂違変候(列)之願申出、願之通御免被仰付候、依之右源助三弟男上リノ願申出趣有之、兵部殿(伊勢貞起)ヘ得御差図候処、願人ヘ於敷舞台申渡候趣致承知候事、

宝暦二年申十一月　　島津権左衛門(久智)

右、申十一月十五日、樺山左京御取次ニテ隼人ヘ申渡候事、

三〇三七

一五代喜左衛門弟五代長右衛門儀、高山武右衛門養子被仰付筈候間御用申渡候処、喜左衛門当分江戸詰之由申出候付、名代ヘ申渡候先例相糺候処、橋口権兵衛二男橋口助左衛門事、牧与左衛門養子被仰付候節、権兵衛江戸詰故名代藤田利(列)里右衛門ヘ被仰渡候先例有之、将監殿ヘ申上候処、右通例有之事候ハヽ、名代ヘ可申渡旨致承知候付、五代喜左衛門名代山路太次右衛門ヘ御格ノ通申渡候、向後右通可致首尾旨被仰渡候事、

宝暦四年戌十一月二十八日　取次(興貞)堀甚左衛門

三〇三八

一比志島太次右衛門事、多年病気有之、去秋ノ頃ヨリ気分不相勝致間別(列)候之儀有之、座敷ノ内取拵養生仕候ヘトモ今以快無之、先キ様御奉公相勤候体無之、隠居願親類ヨリ申出、願之通被仰付、家督嫡子比志島彦七郎ヘ被仰付、右玄(列)兵次郎申渡何様可致哉ノ旨、大蔵殿ヘ御尋申上候処、被仰談候上、隠居願人ニ申渡可然旨伊集院十蔵致承知、親類西八太郎ヘ申渡有之候事、

一加治木藤内隠居、家督嫡子加治木彦七ヘ被仰付候、然処彦七事先年ヨリ片輪ニ有之罷出体無之由申出候、依何様可仕哉ノ旨、諏訪仲右衛門ヨリ大蔵殿ヘ御尋申上候処、名代ヘ可申渡旨被仰付候付、彦七名代ハ於敷舞台申渡有之、藤内事モ名代差出候ニ付、彦七名代一所ニ申渡有之候事、

一木場吉兵衛、多年依科被処遠流候処、御恩赦ニ付テ、去年御赦免被仰付、隠居ノ姿ニテ親類家内被入置候、吉兵衛事直子無之、木場半左衛門儀無拠者之儀候間、

吉兵衛養子御免、直ニ家督被仰付被下度旨親類木場次郎兵衛申出趣有之、願之通被仰付候、依之半左衛門儀ハ御格之通於敷舞台申渡、次郎兵衛儀ハ江戸詰ノ故於御用人座申渡方可然哉ト杢殿へ諏訪仲左（列右）衛門ヨリ御尋申上候処、其通ニテ可然旨被仰渡候ニ付、半左衛門儀ハ於敷舞台申渡、次郎兵衛名代西角兵衛へ於御用人座申渡有之、

亥四月十八日　宝暦五年ノ亥カ

三〇三九

一桐野権右衛門養子、御兵具所付代々士桐野喜右衛門へ被仰付、妻子家内入ノ願申出、願ノ通被仰付候旨、此跡ハ与頭へ申渡来候へトモ、此節ヨリ願人召出於御用人座申渡有之候事、

巳二月四日

三〇四〇

一内田次右衛門、其身代別立被仰付置候処、致病死直子無之家跡不被召立筋親類トモヨリ申出趣有之、願之通被仰付候、此跡右体申渡節、親類麻上下着用ニテ罷出、御用人座ニ於テ致承知来候へトモ、主計殿へ御尋申上候処、典膳殿へ被仰談、向後親類麻上下ニ着用ニ不及由致承知候付、右親類内田清右衛門へ平服ニテ於御用人座申渡有之候事、

午三月十九日

三〇四一

一島津藤次郎妹島津小平太へ縁与被仕居候処、離別之願（列被）申出、願之通御免被成候、依之御首尾之御家老衆マテ御礼可参哉ノ旨、御首尾（樺山久初）主計殿へ御尋申上候処、其通被仰渡、

享保十五年戊正月二十七日

三〇四二

一鎌田源左衛門へ島津筑後娘縁与ノ願、源左衛門親類西彦太郎ヨリ申出、願之通被仰付候段被仰渡候節、彦太郎儀寄合並ニテ候処、於敷舞台申渡候節、取次ノ御用人向キ様ノ儀何様可仕哉、寄合以上ノ人へ申渡候節ハ、

取次ハ南向キニテ申渡候、平人ヘハ北向キニテ申渡候、寄合並ノ儀先例無之候故御尋申上候処、大蔵殿ヨリ御同役中被仰談候上、寄合並モ平人同前可仕旨被仰候事、

辰六月八日　　▽取次△（列により補）左近允与太夫

三〇四三

一大河平源助嫡子大河平源太左衛門、木藤休八郎娘縁与願ノ儀ニ付申渡置候処、源助事屋久島ヘ在番故、（樺山久主計）殿（初）ヘ得御差図候処、長旅ノ儀ニ候間申渡ヘク旨致承知、源助名代大河平才蔵ヘ申渡有之候事、

元文三年午三月九日　　取次　本田信次郎

三〇四四

一伊地知諸兵衛忰ヘ津留八郎兵衛娘縁与御免被仰付筈候処、諸兵衛事御奉公ニ付致他行候付、名代可申渡哉ノ旨織部殿ヘ御尋申上候ヘハ、被仰聞候者、先頃貴島源左衛門（列右）忰縁与御免候節（列之）モ源左衛門（列右）他行イタシ居候ヘトモ名代ヘ被仰渡候条、此節諸兵衛事モ同様（列格）名代ニ可申渡旨被仰渡候付、名代篠原角左衛門（列右）ヘ申渡有之候事、

元文三年午正月二日　　取次　本田信次郎

三〇四五

一町田源（列孫）七嫡子町田孫左（列右）衛門ヘ山下次左衛門妹縁与願ノ儀ニ付テ申渡置候処、孫七事長島ヘ在番故、（樺山久初）主計殿ヘ得御差図候処、孫七名代ヘ可申渡旨致承知、名代児玉休右衛門ヘ申渡候事、

延享三年寅八月十一日　　取次　三崎平太

三〇四六

一二階堂舎人

右、郷原金（久雄）太夫ヘ娘縁与ノ願被申出置、先頃御用被仰渡候処、病気ノ段申出ラレ仰渡無之候、右ニ付、将監殿ヨリ兵部殿（伊勢貞起）・典膳殿（鎌田政昌）ヘ被仰談候上、長病者同前ノ儀ニ候故、名代申渡可然旨致承知候付、名代ヘ申渡有之、

宝暦三年酉四月十一日

三〇四七

一飯隈山蓮光院

右、嫡子陽慶坊へ山田新助娘縁与申渡候席、兵部殿ヨリ於敷舞台寄合以上ノ人へ縁与申渡同前ニ致承知候付、其通申渡候事、

丑十二月二十九日　取次　戸田伝五郎

三〇四八

一谷山角太夫願ノ通隠居、嫡子谷山善左衛門へ家督被仰付候付、角太夫事一代寄合為被仰付置人ニ候ヘハ、右被仰渡候席ノ儀於御家老座被仰渡、善左衛門ニハ敷舞台ニテ申渡ニテモ可有之哉ノ旨、織部殿へ御尋申上候処、玄蕃殿御差図ノ趣ヲ以、主殿殿（島津久賢）・主計殿（樺山久初）被仰談候由ニテ、織部殿ヨリ致承知候ハ、角太夫儀ハ隠居被仰付、善左衛門家督被仰付儀ニ候ヘハ、家督ノ方ニ被相付、善左衛門仰渡ノ席ニテ角太夫隠居被仰付候段モ善左衛門同席ニテ申渡可然旨被仰聞候付、於敷舞台角太夫長病ノ故、名代高橋七郎右衛門・善左衛門へ申渡相済候、尤、角太夫直ニ罷出候テモ右ノ席ニテ申渡有之事、

元文二年巳七月二日　取次　西彦太郎（純孚）

三〇四九

一御家老直申渡、御用人・御近習役申渡候御役被仰付候節、同御役々申渡者幾人ニテモ一所ニ召出可申渡候、

一隠居・家督・縁与申渡候儀ハ、先年同席ニテ一所ニ申渡候様被仰付置候処、近年寄合以上隠居・家督等申渡候儀、家督者御家老座ニテ直申渡、隠居名代ハ御用人座ニテ申渡候様為究筋候ヘトモ、右申渡候儀ハ（列）已前〈被仰付置候通、同席ニテ▽（列）一所ニ可申渡候、△

▽（列）一隠居・家督之者△一所ニ召出申渡候節、▽（列）隠居之者を先可申渡候、名代同格ニ而△無之候テモ同席ニ呼出、一所ニ申渡ベク候、

享保廿一年辰三月二十六日　取次　鎌田源左衛門（政昌）

三〇五〇

一高崎惣右衛門附衆中阿多預泊市左衛門嫡子泊武左衛門

右、御城下士竹木仲兵衛へ血筋ノ訳ヲ以テ願之通養子

被仰付候付、阿多地頭伊地知千左衛門在旅中頼置候島津十太右衛門并仲兵衛へ於敷舞台御格之通申渡、惣右衛門事江戸詰故、名代平田清兵衛麻上下着用ニテ呼出、於御用人座右之通被仰付候段申聞候、且又地頭千左衛門ニテ候故、名代島津十太右衛門ニテ候へトモ、取次ノ御用人北向キニテ申渡有之候事、

取次
新納次郎兵衛

三〇五一

一有馬太右衛門継目外城養子、桂李右衛門付衆中日州高城預リ松崎常音院嫡子松崎鏡音院へ被仰付候節、高城地頭市来次郎左衛門湯治御暇中故、申渡候儀何様可仕哉ノ旨主計殿（樺山久初）へ申上候処、名代へ可申渡旨致承知候付、次郎左衛門名代伊地知千（列）与左衛門へ申渡有之、

寛延二年巳三月四日

三〇五二

一継目養子願

一継目聟養子願

右申渡、養子ニ成候当人へ於敷舞台申渡、養父方願人へハ御用人座ニテ為知有之候へトモ、向後当人并願人於敷舞台申渡候事、

一養子願

一聟養子願

右申渡、養子ニ成候当人并養父へ申渡来候へトモ、当人へ申渡ニ不及、向後実父并養父へ於敷舞台可申渡候、

但、養子ニ成候当人実父無之、親類ヨリ願出候テモ申渡様右同断、

寛延三年午五月十五日

三〇五三

一継目養子願出、伺之上願之通被仰出候節、忌服ヲ為受候様ニ（列）と願人へ為知申置、忌明可申渡候、

右之通被仰出候、

寛保二年午（マヽ）四月十六日

取次
中野駒右衛門

三〇五四

一迫田太次右衛門弟迫田甚右衛門事、折田四郎左衛門養

子被仰付被下度旨、太次右衛門・四郎左衛門ヨリ願申出候間、願之通被仰渡筈ニテ御用申渡候処、四郎左衛門ニハ直罷出候ヘトモ、太次右衛門事ハ御奉公ニ付他行仕居候段、名代ヲ以首尾申出候、敷舞台申渡候儀ハ名代ニ不被仰渡御法候ヘトモ、太次右衛門事ハ望請ノ方トハ相替、軽メノ方有之候、此脇別立被仰渡候節願人他行ニテ名代ニ被仰渡候、太概右例ニ似寄候間、名代ヘ可被相(ヲ)仰渡哉如何可仕哉ノ旨、主殿殿ヘ得御差図候処、太次右衛門名代ヘ可申渡旨致承知、御格之通申渡相済候事、

寛保三年(マヽ)午五月十五日　取次　諏訪次郎左衛門(右)

三〇五五

一別立申渡、別立ノ当人ヘ申渡来候ヘトモ、向後当人ヘ不及申渡、願人マテ於敷舞台申渡ベク候、

寛保二年戌五月三日　主計(樺山久初)　取次　川田与右衛門(国福)

三〇五六

一薩州吉田衆中児玉四郎左衛門直子無之、島津左衛門殿家来吉元市助二男吉元市右衛門、由緒ノ訳ヲ以養子被仰付候、申渡、薩州吉田地頭麻上下着用ニテ、左衛門殿方ハ与力麻上下ニテ、於敷舞台申渡有之、

三〇五七

一嫡子申渡、嫡子成ノ当人ヘ申渡来候ヘトモ、向後当人ヘ不及申渡、願人マテ於敷舞台可申渡候、

戌三月　取次　蒲生十郎左衛門

三〇五八

一北郷作左衛門弟北郷八右衛門、別立并分地之願被申出御免被仰付、家格代々小番被仰付旨申渡候節、於敷舞台申渡有之候、寄合以上縁与御免被仰付候節、敷舞台ニテ申渡有之候故、右ニ準ッ申渡有之候事、

延享元年子十二月十五日　取次　義岡左平太(久中)

三〇五九

一養子願　一継目　一継目養子

一嫡子成　一養子成　一外城養子

一御役替　一屹立候御褒美　一拝領物

右九ヶ条ノ通、諸家中・町・浜浦人等御赦免被仰付候者有之候節申渡候席不相見得候付得御差図候処、大蔵殿被聞召被仰談候上、向後右体ノ儀於敷舞台申渡候事、

一右九ヶ条、寄合並以下敷舞台ニテ申渡候様、主計殿ヨリ被仰渡、小林中太兵衛承知、

丑十二月十九日

三〇六〇

一江戸詰又ハ他所ヘノ御使者被仰付、御賦米被仰付候節、御使者ノ儀御用人座ニテ申渡、御賦米ノ儀ハ於敷舞台申渡来候ヘトモ、向後ノ儀、一所ニ被仰付候節ハ於敷舞台御使者御賦米ノ儀モ一所ニ可申渡候、

申十二月六日　島津中務

三〇六一

一本田六郎(ナシ)右衛門、梶山在番被仰付、御役料高四十石被下候節、於敷舞台申渡有之、

取次　小林中太兵衛

丑七月

三〇六二

一外城ヨリ鹿児島士被召出(成)候人、於所ニ持高鹿児島高ニ被召直度旨申出、願之通被成御免候節、御用人座申渡麻上下着用ニテ候、元文二年巳九月於御側御用人座愛甲喜春右例ニ準シ、延享四年卯三月谷山衆中前田助兵衛麻上下ニテ申渡有之、取次新納次郎(久品)兵衛、

三〇六三

一本田治兵衛

右、五十石高上リノ願申出置御用有之候処、江戸詰ニテ名代本田清左(右)衛門ヘ麻上下着用ニテ申渡有之、

取次　有川幸(貞利)右衛門

延享四卯三月二十一日

三〇六四

一継目・継目養子・別立等願ノ通被仰付、申渡願出候親類へモ願ノ通被仰渡候段、申来候へトモ、向後申渡不及候、首尾不申聞候テ不叶儀モ有之候節ハ、於御用人座屹ト無之為知ニ可申聞候、尤、書挙ニ不及候、

一継目ノ願又ハ継目養子ノ願、遺言書ヲ以親類トモヨリ願出候節ハ、子并養子ニ罷成候者表方支配ニテモ、親御側方支配ノ内相果候ハヽ、右継目并継目養子願申出候節ハ御側方へ相付願出、子并養子表方ノ者ニテ候ハヽ、申渡ハ表方ヨリ可申渡候、尤、親表方支配ノ者ノ節モ右同断致方ニテ候事、

但、本文ノ通ノ儀親類トモヨリ願出候節ハ、願出ノ親類トモヘモ願ノ通被仰付候段可申渡候、

右本文ニハ、親類へ申渡ニ不及、首尾不申聞候テ不叶儀モ有之節ハ於御用人座為知申聞候様、右但書ニハ、願出候親類へモ可申渡旨相見得候儀ハ親ト子ノ支配違ノ事候、親并子同支配ノ者ハ本文ノ通可相心得旨、未十二月二十九日主計殿ヨリ左近允与太夫致承知候事、

三〇六五

一隠居・家督申渡、隠居ノ者ハ御用人座、家督ノ者ハ敷舞台ニテ申渡来候へトモ、向後於敷舞台隠居・家督同席ニテ隠居・家督被仰付候段一所ニ可申渡候、隠居ノ者病人体ニハ名代可申渡候、

一御用人座申渡候内、別立ノ願ハ当人へ直ニ可申渡候、其外当人他行・病気等ノ節ハ名代召出可申渡候、

本文ノ通ニテ候へトモ、大坂・京都又ハ下代島方渡海ナト長勤ノ人ハ名代へモ被仰渡候事、以上、

三〇六六

一種子島権助聟養子種子島新蔵事、萩原新右衛門二男ニテ候処、新右衛門嫡子萩原郷右衛門相果、外ニ男子無之候ニ付、新蔵事妻子召列本家へ帰参被仰付被下度旨、双方書物ヲ以願申出、願ノ通御免被仰付候付、於御用人座申渡置候処、右式願ハ於敷舞台申渡候先例有之候付、双方トモニ於敷舞台申渡有之候事、

寛延二年巳十二月五日　　取次　相良弥一兵衛（長主）

三〇六七

一肥後八右衛門ヨリ、弟肥後十郎兵衛初テ高持成御免ニ付、持高ノ内差分度旨申出候、分地ノ儀ハ与頭ヘ為被仰渡趣モ有之候ヘトモ、八右衛門儀ハ御目付御役故、於御用人座直ニ申渡候様、主計殿ヨリ被仰渡(ヲ)候、向後右ニ準シ候、無役ハ此内ノ通与頭ヘ申渡候事、

三〇六八

一御役人外ノ人ヨリ分地願申出、御免ノ段被仰渡候節ハ、於御用人座直ニ高主ヘ御取次御用人ヨリ申渡有之筈候事、

但、此跡ハ、御役人外ノ人ハ与頭ヘ被仰渡、与頭ヨリ被申渡来候ヘトモ、去ル卯年今通御用人座申渡相成候段、御家老座御帳留相見ヘ有之候ヘトモ、御用人座御格式帳ニ不相見ヘ候故、右申渡有之候節、区々ニ有之難決、此節右之通相究候事、

寛延(マ)三年亥(ニ)三月二十一日　取次　川上瀬兵衛(親興)

三〇六九

一宅間勘兵衛二男宅間了阿弥事、別立ノ願申出、願ノ通被仰付候旨被仰渡候、了阿弥事御側勤ノ者ニテ候ヘトモ、御書院支配ノ者ニ候故、表方ヨリ被仰渡候旨被仰渡、

亥正月廿二日　伊集院十兵衛

三〇七〇

一大目付衆御支配ノ面々、名替ノ願申出、願ノ通被仰付申渡有之候節、御用人ヨリ月番御目付ヘ申渡モ有之、又ハ当人ヘ直ニ申渡候モ有之、跡々不同有之候ニ付、向後ハ御用人ヨリ当人ヘ直ニ申渡、月番御目付ヘハ申渡相済候節、願書物張紙ニテ相渡候筋被仰付置度奉存候、致区々候付、此段奉伺候、以上、

明和五年子正月四日　御用人

朱書ニテ

本文ニ付、織部殿(桂久中)ヨリ口達ヲ以、仲殿(島津久健)ヘ被仰談候上ニテ、伺之通已後致首尾候様致承知候事、

島津家歴代制度巻之四十弐

天明
享保

御礼廻
御届向
縁与
訴訟向
角入
御暇事
他所御暇
永御暇
他国居住
披露事

御礼廻

三〇七一

一諸御礼廻ノ儀、大目付衆以上へハ当日可致廻勤、尤、勉向ニ付当日相仕廻兼候儀モ候ハヽ、翌日屹ト相済候様、其外廻勤有之向へモ右ノ心得可有之候、此旨御差図有之致通達候、以上、

天明七年未八月十八日　　御目附

三〇七二

一島津主水

此程家来黒木吉右衛門儀、市来衆中被仰付(刎)候、右之通結構家中者被仰付候儀、主水ニモ別テ難有儀ニテ不軽儀候間、大御目付以上ノ御役人へハ主水相廻御礼申上可然候、

一地頭所ノ者、右ニ準候程ノ結構成儀被仰付候節ハ、其地頭大御目付已上ノ御役人へ御礼可申上候、

元文三年午十二月廿一日　　（島津久純）大蔵

三〇七三

一月限申渡候内、此程於敷舞台申渡候儀トモ、去年以来

御用人座申渡被仰付候ヶ条ノ儀、敷舞台ニテ申渡候節ハ大目付以上御礼相廻候ヘトモ、御用人座申渡罷成候テハ御首尾ノ御方マテ御礼(列相)廻候筋ニモ可有御座哉ノ旨、主計殿ヘ御尋申上候処、大蔵殿・中務殿被仰談、申渡ノ座席替候テモ被　仰出儀ニ候ヘハ同前ノ事候間、大御目付以上相廻筈之由被　仰聞候間、(列向後)右通可有之事、

申九月十一日　　讃良善助

「本文之通ニて候ヘ共、縁組・離別なとハ御首尾迄相廻事ニて無之哉、」(61行間にあり)

三〇七四

一明所ノ衆中

右、御城下士何ソニ被仰付候節、明所ハ月番御用人御礼相廻候儀、地頭所トハ相替候旨被仰渡、

享保二年戊(マヽ)十一月十四日

三〇七五

一島津備中殿　　島津周防殿

島津三次郎殿　　島津善次郎殿

右ノ家来、外城衆中ナトヘ被仰付候節ハ、大御目付以上並御取次御用人ヘ役人ヲ以御礼可被申達候、

一島津又六郎　　島津大学

島津図書殿　　島津筑後

右之家来、前条同断ノ節ハ、中抑・用頼ヲ以、前条之通御礼可被申達候、中抑・用頼無之方ハ用頼代ヲ以御礼可被申達候、

右之通、向後御礼被申達候様ニト主計殿(樺山久初)ヨリ口達ヲ以承知致シ(列候ニ付)、銘々留主居ヘ申渡置候事、

寛延三年午六月十八日　　取次　相良弥一兵衛(長主)

三〇七六

一島津藤次郎妹島津小平太ヘ縁与被仕居候処、離別ノ願被申出、願之通御免被成候、依之御首尾ノ御家老衆マテ御礼可参哉ノ旨、御首尾ノ主計殿(樺山久初)ヘ御尋申上候処、大蔵殿(島津久純)被仰談、御首尾方マテ被参候様島津右平太致承知候事、

享保十五年戊正月廿七日

三〇七七

一松方甚八相果、島津筑後家来入水権平ニ被仰付候節、甚八方願人並中抑へ於敷舞台申渡有之、御礼廻ノ儀ハ図書殿同前ノ儀ノ例ヲ以、大御目付已上ハ相廻候事、

但、筑後儀ハ都城へ召置候故、於彼地承知ノ上御礼ニ相廻候由、右ニ付テハ即日又ハ後日ニテ候ヤ可相糺事、

延享四年卯七月六日

三〇七八

一新納次兵衛家来杉崎源右衛門事、高崎惣右衛門附衆中阿多預橋口佐平次養子成ノ願申出趣有之、願之通被仰付候、右ニ付、阿多地頭伊地知千左衛門・新納次兵衛ハ麻上下御用ニテ於敷舞台御格之通申渡候処、イツレモ御礼被申出候、左候テ、千左衛門ヨリ御礼廻ノ儀ハ何様可仕哉ノ旨被申出候ニ付、左衛門殿へ得御差図候処、右通難有被仰付候間、大御目付已上御礼廻致候様可申渡旨致承知、千左衛門へ右之趣申渡御礼廻有之候事、

延享元年子十二月　　取次　三崎平太

三〇七九

（行間朱書）「本文、申渡ノ部ニ入筈ナリ、」

一木尾慶右衛門　　関太次右衛門

右ハ、木尾筑右衛門相果、男子無之極貧者ニテ養子罷成候者無之、平田新左衛門殿附衆中栗野預リ内田武左衛門弟内田権右衛門㊀儀、筑右衛門本家血筋ノ訳ヲ以養子願出御免被成候ニ付、両人ノ内一人御用触申渡候処、関太次右衛門事御奉公ニ付他行、慶右衛門事ハ長病ノ由ニテ名代木尾千兵衛罷出、右ノ首尾申出候、然ハ親類両人ノ願ニテ、慶右衛門儀ハ長病ノ事候ヘハ格別候ヘトモ、太次右衛門事御国行ノ事候故何様可仕哉ノ旨、若御年寄衆大蔵殿へ御尋申上候処、先例相糺候様承、相糺候ヘトモ右式ノ先例無之ニ付、其段申上候処、御家老衆被仰談候上、慶右衛門名代木尾千兵衛へ於敷舞台筑右衛門養子御免ノ段御差図ノ上申渡有之候事、

延享三年寅四月十八日　　取次　北郷助太夫（久儔）

三〇八〇

一享保廿一年辰正月、島津玄蕃殿事御家老座へ御(出)勤被成候様被仰付候付、左之通被仰渡、

一御役又ハ継目・家督・別立等被仰付、其外何ソニ付御家老宅へ御礼ニ罷出候程ノ儀ハ玄蕃殿宅へモ可罷出候、

享保廿一年辰二月　本(島津久豊)

三〇八一

文化八年未三月

一久見崎仮脇船頭岩元嘉左衛門年罷寄、役儀御断申出、願之通御免被仰付、多年首尾能相勤候付、御褒美トシテ御銀三枚被成下候旨、未三月廿三日同格名代中村八次郎承知ニ付、大目付以上並御取次ノ御用人へ御礼廻イタシ候、左候テ、御船奉行ヨリ御礼廻ノ儀御目付ヘ相尋候処、其身御礼廻勤ノ格式ノ者ハ支配頭御礼廻ニ不及段、御目付伊集院源七ヨリ御船奉行寄土持権之丞承候事、

三〇八二

一文化八年未五月廿八日、三原善兵衛・岩下佐八郎・伊地知休蔵・鈴木郷十郎、先達テ地頭職被仰付置候付、地頭職ノ御礼被仰付候ニ付、大目付已上並奏者番等ヘ御礼廻ノ儀、御目付四元長右衛門ヘ被相尋候処、不及御礼廻段被承届候、右ニ付テハ、以前ハ御礼廻為有之由候ヘトモ、寛政八年比カ、御礼廻ニ不及筋被仰渡候由、是又長右衛門ヨリ被承リ由、

帰着・出立御届並病気等

三〇八三

一御一門

右着之儀ハ、当日月番御家老宅へ使者ヲ以申達置、翌日登　城ニテ御機嫌可被相伺候、其節御家老一統ニ可謁候、

一大身分並寄合已上

右勤先ヨリ帰着ノ節、八時前ニテ候ハ、直御城へ可罷

出候、八ツ時後ニ候ハヽ、月番御家老宅へ相越着ノ届可申置候、

但、病気差合ニ候ハヽ、用頼又者以使者、当日可相届置候、

一御家老

右同断ノ節、朝ニテ候ハヽ、月番ノ同役宅へ（列相越）着ノ届、且又面会ニテ可奉伺御機嫌候、其節直ニ可及出勤儀ニ候ハヽ、其段挨拶可有之候条、直ニ　御城へ可罷出候、八ツ後ニテ候ハヽ、是以当日相越同断応挨拶、翌日御城へ可罷出候、

但、病気差合候ハヽ、用達ヲ以其段可相届置候、

一御側詰　若年寄　大目付　大目付格

右同断、

但、同断、

一御側役以上

右同断、不及面会都テ取次ヲ以可相達候、

但、病気差合候ハヽ、月番御用人へ用達又ハ用頼ヲ以其段可相届候、

一諸御役人

右、御用番（月カ）御用人へ被相越、諸事前条ノ振合可有之、尤、直触已上ハ致面会、其以下ハ以取次可相達候、

一奥・表御勝手方勤ノ面々等、ヲノツカラ其面々ノ御家老・御用人へ可相付候、表御役人並月次致出仕候面々ヘハ着付テ当日又ハ翌日ニテモ、　御城へ罷登候節月次ノ通夫々ニ相謁可奉伺御機嫌候、

一書役・小役人

右同断ノ節ハ当日其当人ノ内一人へ相届、且又其小組頭へモ可相届候、尤、八ツ時マテニテノ間ハ直ニ勤所へ罷出、頭人へハ同役ヲ以相届、且小組頭へモ可相届候、　御城遠方ノ勤所ニテ候ハヽ、小組頭ノ儀ハ宅へ可相届候、

但、病気差合候ハヽ、同役・同組・親類等ノ間ヲ以当日可相届候、

一無役ノ諸士

右同断ノ節、御用人並小与頭へ同断、

右之通、御一門ヨリ無役ノ諸士ニ至マテ、自他国トモ勤帰リ又ハ御暇ニテ差越罷帰候節モ可相心得候、勤帰リノ節ハ着振有来通可有之候、湯治並私領其外自分御

暇ニテ差越候旅先ヨリ罷帰候ハ、、当日タリトモ麻上下可相用候、

但、御領内公私共三日以上、本文之通可有之候、

右之通被　仰出候段申来候旨被仰渡、

天明五巳五月　　安房（喜入久福）

右ニ張紙　御一門ノ場

一出立ノ節ハ、為届前日　御城へ使者可差上候、尤、出立ニ付登　城ノ節ハ不及其儀候、

十二月廿四日、張紙

一本文病気ノ節ハ、月番御家老宅へ留主居又ハ番頭使者ヲ以被届置候、追テ登　城本行ノ振合、

一着之節、届ノ使（列者）ハ留主居・番頭ノ間被差出申置、八ツ後ニテモ同断、

一出立ニ付登　城無之節ハ為届同断、

但、月番御用人へ届ノ儀モ是迄之通、

大身分並寄合以上ノ場へ張紙

一出立ノ節ハ本文振合ヲ以、前日月番御用人マテ可相届候、尤、出立ニ付　御城へ罷出候節ハ不及其儀候、

御家老ノ場へ張紙

一出立ノ節、本文之振合ヲ以、前条同断、

十二月廿四日、張紙

一本文昼ノ内ニテ候ハ、直ニ　御城へ罷上、月番御家老へ届、且又同人へ相付奉伺　御機嫌、病気等ノ節ハ出勤ノ上奉伺筈候、

御側詰・若年寄・大目付格ノ場張紙

一出立ノ節、前条同断、

十二月廿四日、張紙

一右同本文昼之内着ノ節、届又ハ奉伺　御機嫌候儀前条同断、尤、朝ノ内八ツ後ノ儀ハ月番御家老宅へ相越、仕向ノ儀本行ノ振合可有之候、病気等ノ節ハ前条同断、

御側役以上之場張紙

一出立ノ節、前条同断、

十二月廿四日、張紙

一寄合並ノ儀ハ本文御側役格已上列仕向ノ通、出立ノ節、前条同断、

諸御役人之場張紙

一出立之節、本文ノ振合ヲ以、前条同断、

十二月廿四日、張紙

一本文伺　御機嫌ニ罷登候面々、病気等ニテ届置候ハ、（列追テ）快気ノ上登　城、本行之通可奉伺　御機嫌候、謁ノ儀ハ先達テ申渡置通ニ候、

書役・小役人ノ場張紙

一出立ノ節、本文ノ振合ヲ以、前条同断、無役ノ諸士モ

同断、

十二月廿四日、張紙

一本文八ツ時マテノ間帰着、直ニ　御城内勤所ヘ罷出候節、小組頭届之場ハ与方取次ヘ相届、其外ハ本行之通、

無役ノ諸士之場張紙

一本文御暇ニテモ差越罷帰候節ハ小与頭ヘ相届、御用人ヘ届ニ不及候、尤、無役諸士ノ内、江戸詰其外御用人取次ニテ一往ノ勤方等申付候者ハ、其面々ノ御用人並小与頭ヘ可相届候、

本文之通、先達テ申渡置候ヘトモ、猶又右引札之通可被相心得旨、向々ヘ可致通達候、

十二月廿四日　　安房

三〇八四

一書役・小役人等着出立其外諸届向、御用人致対談（列面）来候ヘトモ不及其儀候、向後ハ其頭々ヨリ向々御用人ヘ相届、付状等モ候ハ、是又同断可差出候、出水・高岡・大口地頭代、伏見御仮屋守、隈之城押等ノ頭支配無之面々並御家老座書役ノ儀ハ、向々御用人ヘ直相届、付状等モ可差出旨被仰付候条、面々ヘ不洩様可申渡候、

天明六午六月九日　　（喜入久福）安房

三〇八五

一御役人外出府出立ノ節、是迄御家老座ヘ御家老謁来候ヘトモ、向後御用人謁被仰付候、且式日御使ノ儀モ同断ニテ御用箱御用人ヲ以相渡シ、着之節八ツ時ヨリ内ニテ　御殿ヘ罷出候ハ、御用人ヘ相付御用箱差出、退出後ニハ月番御家老宅ヘ差越、何月幾日ニ差立候御使致着候段、用達又ハ取次ヘ申達、御用箱可差出候、

一年頭御使ハ格別ニ候故、着出立トモニ於樋之間可謁御家老旨被仰渡、

天明五巳十一月

三〇八六

一月々御礼罷出候御役人、江戸詰並他所ヘ御用ニ付罷越、其外外城行、湯治、自分用事ニ付御暇ニテ田舎ヘ罷越又ハ罷帰候節モ、其首尾御側御用人・御近習役ノ内ヘ申出来候ヘトモ、向後不及其儀候間、此段可承御役々ヘ可申渡候、

延享二年丑十二月　（樺山久初）主計

三〇八七

一湯治御暇並看病御暇等、諸座定筆者並定寄筆者其外寄筆者勤方ノ内ニテハ、御暇願出候テモ不被取揚筋被仰渡、

寛保四子三月

三〇八八

一奥掛　御家老座　御勝手方　異国船掛

大御目付座　書役

右、御領国中勤方並自分御暇等ニテ差越候節ハ、前日向々御用人ヘ相届、帰宅ノ節、御頭人ノ内御一人ヘ可相届候、江戸詰等ニテ出立ノ節ハ前日御目付ヲ以御用人ヘ可相届候、着ノ節届ノ儀ハ前条之通ニテ、翌日御目付ヲ以御用人ヘ可相届候、御家老衆方ヘ相付、着ノ節ハ当日御頭人ヘ届ニ不及、尤、着出立トモニ翌日又ハ当日ノ儀ハ直ニ御用人ヘ可相届候、小与頭ヘ届ノ儀ハ有来通、

右之通可被致順達旨、安房殿御差図ニテ候、

▽（列）天明六午五月△

三〇八九

一大円寺ヘ　御代参、朝ノ内相勤、直ニ出勤、御家老ハ御側役ヲ以其段可申上候、御番頭ハ月番御家老ヘ其段申出、従御家老可達　御聴、御家老出勤前・退出等ニテ候ハ、　御代参相済候段直御側役ヘ申達置、御家老ヘハ当日又ハ翌日其段可相届候、

但、朝之内難迦儀モ候ハ、其段申上置、御用済次第相勤、為晩方トモ罷出其段可申上候、

右之通被　仰渡、

天明六年午五月

（行間朱書）「本文、御在府ノ節届ノ儀ハ是迄ノ通申渡置候ヘトモ、御在府・御在国トモニ月番御家老（列）くえ届申出候様被仰渡、

午二月　伊賀」

三〇九〇

一鎌倉・日光へ　御代参帰府ノ節、御家老ハ麻裃直ニ罷出、其段御側役ヲ以可申上、尤、当日又ハ翌日ノ間於奥　御目見可被仰付候、御番頭ハ月番御家老宅へ罷越、其段相届可申候、翌日於御座之間　御目見可被仰付候、右之通、向後可相心得旨被　仰出、於　御当地モ右ノ振合ニ被仰付候旨、申来候段被仰渡、

但、御在府ノ節御届申上（出カ）候儀ハ是迄之通、

三〇九一

一大身分ヲ初、月次御礼罷出候無役ノ面々病気ノ節ハ、当朝月番若年寄宅へ以使可相届、且　御城へモ家来差出、表坊主ヲ以、当番御目付へモ相届候様被仰付置候へトモ、已来ハ家督並嫡子計其通イタシ、二男以下登城有無ハ不及其儀旨被仰渡、

天明八申十月　（菱刈実祐）大炊

上文略、

三〇九二

（三〇九一号行間朱書）一病気ニ付及六日不致出勤候ハヽ、御役人・小役人軽キ御扶持人迄モ其頭々へ届可申出候、又ハ其上ニモ百日ニ及候節ハ又々可申出候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へモ写ヲ以可致通達候、

元文二巳四月　（島津久賢）主殿

三〇九三

一御勝手方支配月次御礼罷出候御役人、御用ニテ外城行被仰付、又ハ湯治御暇其外自分用事ニ付御暇ニテ田舎罷越候節ハ、幾日ヨリ罷越候段御側御用人座へ罷出、御側御用人・御近習御役ノ内へ可被申出候、罷帰候節モ翌日右御座へ罷出、罷帰候段可申出候、尤、御勝手方御用人へ相付申出候儀ハ、早晩之通相心得可罷居候、一江戸詰又ハ他所へ御用ニ付罷越候節モ右同断ノ首尾ニ可相心得候、

右之通可申渡候、以上、

享保廿一年辰四月　（堀興昌）四郎太夫

三〇九四

一月次御礼罷出候御役人、御用又ハ湯治御暇等被下、外城ヘ罷出候節ハ、往来トモ（刃其）首尾、御側御用人・御近習役之内ヘ可申出候、且又江戸詰又ハ他所ヘ御用ニ付罷出候節モ右同断可相心得旨、去辰四月被仰渡置候、外城行ノ面々ハ其首尾時々申出事候ヘトモ、江戸詰等ノ人、間ニハ翌日其首尾不申出モ有之候間、是又往来トモ無失念首尾可申出候、

元文四年未六月　（島津久豊）　杢

三〇九五

一勤向ニ付諸郷ヘ差越罷帰候届ノ儀、当日申出候様被仰渡置候ニ付テハ取違ハ無之筈候ヘトモ、万一実ハ前日罷帰、翌日ニ及当日罷帰候届申出候テハ不可然事候間、左様ノ儀無之様申渡、帰着ノ届申出候節、奉行・頭人ヨリモ応里数日合相考、相違ノ儀無之様ニ可取計候、乍此上不都合ノ儀モ有之候ハヽ、迷惑ニ可及候条、此旨可申渡旨大目付衆被仰候間、致通達候、

天明八申八月　御裁許掛

三〇九六

口達之覚

一諸郷勤方付被差越候人罷帰候届ノ儀ハ、其当日申出来候処、頃日今朝罷帰候段向々御役所ヘ届申出、御扶持米ノ儀モ日数書出ニ相違候者モ間ニハ有之由候ヘトモ、八ツヨリ内御役所ヘ罷出、今朝又ハ今日罷帰候届申出候ハヽ、御扶持米ノ儀ハ（刃向後）其当日ハ相除、前日マテ可被相渡候、尤、八ツ過支配頭宅ヘ差越、届申出候ハヽ（刃者ハ）有来通可有之候、且又先役有之、代合ニ付次渡等ノ依程合ハ重合候儀モ可有之候ヘトモ、天気沙汰等ノ儀ニ付相滞、何ソ無故重合、罷帰候届及遅滞候モノハ、滞日数ノ分ハ御吟味ノ上、御扶持米被下間敷候条、於向々委承届、無間違様可被致取扱旨御差図ニテ候、以上、

寛政七年卯二月十八日　松崎次左衛門

三〇九七

天明七年未

一大番頭ヨリ当番頭マテ並詰衆月番等ヲ始、出仕ノ節病気等ノ人ハ都テ同役ヘ申越、同役ヨリ出仕書之内ニ病

気別勤等相記、御目付ヲ以若年寄へ可相達候、
一奥・表御用人巳下御側役マテ同断ノ節、用達書役等ヲ以御目付マテ可相届候、
一御留主居以下奥向御役人ノ儀ハ御目付マテ可相届候、
右之通、都テ出仕前以無遅滞可相届旨被仰付置候、

巳十一月

右之通被仰渡置候処、病気別勤等ニテ当朝御目付方ヘハ届別テ遅滞候儀モ有之、差支ニ相成候条、当朝五ツ半マテノ間、無間違屹ト被申出候様、御目付ヨリ可致通達候、

七月

右之通可被致順達旨、(川上久敬)久馬殿被仰候、以上、

天明七年未七月(朔)二日　伊集院伊膳

御目付

三〇九八

一諏訪御神事ニ付、　御名代兵庫殿被為勤候、右相済候首尾今日被申出候、右ニ付テハ御家老衆モ被為詰候付テ、首尾被申出ニ及可申哉ノ旨、民部殿ヘ川田与右衛門ヨリ御尋申上候処、御家老衆・若御年寄衆被為詰候場所　御名代被成御勉候節ハ、首尾ニ不及旨承知仕候間記置候、

縁組願之事

三〇九九

一月次御礼罷出候御役人縁与仕候節ハ、持高有無ニ無構申出筈候処、願ヲモ不申出、内々ニテ縁与仕候人モ有之由、此段(朔)心得違ニテ候間、月次御礼ニ罷出候御役人ハ不及申、其家内ノ者マテモ縁与仕候節ハ支配頭ヘ相付願可申出候、尤、縁与願申出候儀ニ付テハ去年被仰出候趣有之、寅(朔)八月申渡置候ヘトモ、其内末々ニテ取違ノ儀モ有之候故、此節別紙之通又々申渡事候間、可得其意候、右外之儀ハ先年申渡置候通、別ニ相替儀無之候間、左様ニ相心得、自今以後取違不仕様支配中

ヘ可被申渡者也、

正徳五年未十月廿三日

三一〇〇

一縁与願ノ次第、月次御礼ニ罷出候御役人ハ其頭々ヘ願事致シ候格式ニ可致候、無役ニテモ寄合並已上ハ高ノ不依多少、其下ハ二百石已上、其頭々ヘ可願出候、已上、

同年未十月廿三日

三一〇一

一縁与願致候者、初テノ　御目見モ不致者ハ願候テモ取揚間敷候旨被仰渡、

同年未十月

三一〇二

一縁組離別ノ儀、最前願不相立取組候者モ、以後願相立候格ニ成候ハ、願可相立候、且又最初願相立取与候者已後願不相立格ニ罷成候ハ、願立ニ不及候、

右之通被仰付候間、表方ヘ致通達、御側方・御勝手方ヘモ例之通可被致通達候、以上、

享保十七子正月廿八日　（島津久純）大蔵

三一〇三

一御側廻ヘ相勤候者、外城衆中ノ娘縁与仕候儀、向後ハ無用ニ可仕候旨　御意候間、此段致通達候、

享保二酉十二月

三一〇四

一縁与ノ儀、父無之親類ヨリ願申出来候ヘトモ、以来ハ家督ノ人ハ当人ヨリ願可申出候、二男末子又ハ家内ニ罷在候人ハ家督ヨリ可願出候、江戸詰ノ者ハ親類ヨリ願出候儀、有来通可相心得旨被仰出、

天明五巳四月

三一〇五

一縁組願、タトヘハ此内ハ男ハ表方支配ノ者ノ忰、女ハ御側方支配ノ者ノ娘ニテ候ヘハ、銘々支配頭ヘ申出、

申渡モ銘々支配頭ヨリ致来候ヘトモ、向後ハ男ノ方支配ヘ双方願書可差出候、願之通被仰付申渡ノ節モ男ノ方支配頭ヨリ双方一所可申渡候、　上下文略ス、

享保十二年未十二月

三一〇六

一縁与又ハ離別願ノ儀、向後左之通被仰付候、

一親御側方支配ノ者ニテ子表方支配ノ勤有之者ヘ縁与又ハ離別願申出候ハヽ、子ノ方支配頭ヘ内意申出候上ニテ親支配ノ御側方ヘ相付願書可差出候、

一親表方支配ノ者ニテ子御側方支配勤有之者ヘ縁与又ハ離別願申出候ハヽ、子ノ方支配頭ヘ内意申出候上ニテ親支配ノ表方ヘ相付願書可差出候、

一家督ノ者縁与又ハ離別ノ願親類方ヨリ申出候ハヽ、聟支配ニ相付可申出候、右願書、与頭次書ヲ以聟ノ親祖父ニテモ家督ノ支配頭ヘ双方トモ可申出候、

一御側方支配ノ御役人子共、男女トモ縁与又ハ離別ニ付御内申上候儀ハ此内之通ニ候、

右之通被仰渡候、

延享二丑四月

三一〇七

一諸人縁与ノ儀ハ親兄弟ハ勿論親類中熟談ノ上、婚儀相整事候ヘハ可成程離縁不致筈候、然トモ無拠訳合ニ依テハ左モ可有之儀候ヘトモ、間ニハ若キ者取違、物数寄ノ様相聞ヘ、不埒ノ至候旨　御沙汰ノ趣有之候、離縁ノ儀ニ付テハ先年モ被仰渡置候付、此已後尚又左様成儀無之様人々相心得、縁中相遂候様専親類トモ申談置、兼テ教諭(訓)可相加候、此旨不洩様通達可致候、

安永二巳十二月　左中(島津久金)

三一〇八
(三一〇七号行間朱書)
一諸人妻女ヲ致離別候儀、軽々敷無之様ニト先年被仰渡、不縁ニ付離別不仕候テ不叶時節ハ、双方親類中申談、縁中難遂訳ヲ互ニ申談、其上ニテ離別ノ願申出筈ニ被仰渡置候、然処頃日離別願申出候者多々有之、不宜候、自今離別ノ願申出候者委可遂吟味候条、軽々敷不申出様可相心得候、

此旨致通達候、

享保九辰十二月　　（島津久純）大蔵

三一〇九

一諸士縁与、不達　貴聞取組面々ハ、家中士書付名字附候者又ハ足軽・御中間・御小者ノ娘ニテ候ハ、縁与被成御免候、

一達　貴聞縁組被仰付候程ノ諸士ヘハ右同断娘縁与不被差免候、乍然本妻離別又ハ死後ニ罷成、右体ノ者共ノ娘妻ニ致置、嫡子致出生候ハ、、妻ニ御免可被成候、二男以下致出生候ハ、、母札御免可被成候、

一家中士肩書名字付ノ者娘且又諸士下人札ノ者ノ娘ハ、諸士妻札ニハ都テ不被成御免候、乍然嫡子致出生候ハ、其時ノ吟味次第母札ニハ可被成御免候、

一諸士家内札ニ罷居候者ノ娘、士筋慥成者候ハ、、不達貴聞縁与取組ノ者ヘハ被成御免候、其外段々被仰渡、

正徳三年巳十一月

三一一〇（の1）

口上覚

一私養子三原善太夫娘、松崎平左衛門ヘ縁組為仕度内約仕申候間、御免被仰付被下度奉願候、此等ノ趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

文化八未九月　　三原善兵衛

（三一一〇の2）

右ニ付、相手左之通、

口上覚

一私事、三原善兵衛養子三原善太夫娘ヘ縁組仕度内約仕候間、御免被仰付被下度奉願候、私事、縁組願申上候御格ノ者ニハ無御座候ヘトモ、善兵衛ヨリ奉願旨承申候間、私儀モ此旨奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

未九月　　松崎平左衛門

右之通申出置候処、申三月十六日、西恰之助御取次ヲ以、願之通御免被成候旨被仰渡候付、御礼廻有之、

訴訟向

三一一一

一何ソニ付訴訟事、縁取ヲ以、大奥並御一門・御女中方ヘ御口ヲ被添被下候様内願等ノ儀トモ不申上様、先年申渡趣候処、到頃日、間ニハ心得違ノ者有之段相聞得、不可然候、向後ハ右式ノ儀トモ一切申上間敷旨、向々ヘ可申渡候、

寛政四年子七月　　（伊勢貞矩）播磨

三一一二

一向々ヨリ差出候諸願事等、到テ事長ク書認、入用ノ儀ハ纔計相込候儀ノミ有之、取扱候節別テ手間取相成、尤、御帳留等ニモ其成リニ書留事候ヘハ、於座々筆紙墨ノ費勿論、別テ不入事ニ帳内重高ニモ相成、夫故向々ニテ隙取、旁以不都合ノ到候間、不依何事願訴訟等申出候書付ハ別紙之通為書改、以来方（万カ）事書付事短ニ取仕立、尤、座々シラヘ書等ノ儀モ右ニ準シ相認可差出候、先年来事短ニ相認候様ニトノ儀（刃）モ度々被仰渡事候ヘトモ、于今其弁薄候付、猶又此節分テ被仰渡候間可被得其意候、此旨可申渡旨御差図ニテ候、以上、

寛政四年寅（マヽ）二月五日　　小笠原郷左衛門

御勘定奉行

已下諸御役々略ス

別紙

口上覚

一船作願ノ事願人何方何某

一何ノ何月限成就ノ事

一船働方何方働被仰付被下度候

一御心付年数何ケ年ノ事

一前文船造ニ付拝借米等何程ノ事

一返上方何年限運賃ノ内ヨリ差引ノ事

一掛合人何某ノ事

一取込拝借有無ノ事

右之通奉願候間、不差障御儀ニ御座候ハ、御免被仰付被下度奉願（刃）上候、以上、

年号月日　　何方何某

何方御座御書役衆中

右、向々相認候様可申渡候、自然其内為入組訳筋モ有之儀候ハヽ、是又同断一ツ書可相認候、

三一一三

一是迄御役等相勤候人、差迫ノ訳ヲ以、琉球・島方付役等名代勤被仰付度訴訟(列等)ク申出来候ヘトモ、以来ハ其身相勉候筋カ又ハ親類懇意ノ者ニテモ、誰ヘ被仰付被下候ハヽ、合力等致約諾置候趣ヲ以願可申出候、蔵方願等モ同断ノ趣意ニ可有之旨、御沙汰ノ段申来候条、此旨可致通達候、

天明八年申十月　　大炊(菱刈実祐)

三一一四

一就　御参府諸士御供ノ願書、御家老宅ヘ直ニ差出来候ヘトモ、向後ハ其支配頭等ヘ可差出候、左候テ、大番頭・御小姓与番頭ノ儀ハ御家老宅ヘ右願書可有持参候、尤、御小姓与ノ願書ハ其組々ノ番頭銘々持参可有之候、

但、間ノ江戸詰願モ同断ノ事ニ候、

天明七年未六月　　勘解由(市田教国)

三一一五

一其身願事ニ付テハ其支配頭ニ相付願申出筈候処、自分心易キ人有之候ヘハ支配外ノ人々ニテモ欲ノ程ヲ申込候儀有之候間、此已後ハ其筋々ノ支配ニ相付訴訟内意可申出候、支配外ノ人ヲ頼、支配頭ヘ申込候儀勿論、御前ヘ御内意申上候事仕間敷候、　末略、

正徳三年巳正月九日　　取次　向井市之丞

角入・前髪取

三一一六

一島津大学角入之願ニ付御格式不相知候故、総州(吉貴)様ヘ御内意被申上候処、大学ニ不限、兼テ御家老(列能)ク為存者右体ノ願申出者候ハヽ、不及見分可差免候、夫トモ久々御家老逢不申者ハ可及見分候、右之願、御格式ニテ致見分ト申儀ニテハ無之、別テ不成合ノ者ヲ不差免事ト可存居旨被　仰出候、

享保十一年

三一一七

一御家老組ノ面々、角入・前髪取ノ願申出候節ハ、月番御家老宅へ罷越、其後右之願可差出候、尤、対客前右含ノ段内意可申込置候、

一小番ノ儀、若年寄支配ノ事候間、角入・前髪取願出候節ハ月番若年寄宅ニテ仕向右同断、

一新番ノ儀、大番頭支配ノ事候間、右同断ノ願出候節ハ月番大番頭宅ニテ前条同断（列之）取扱（列候）可致事、

一御小姓与ノ儀、御小姓与番頭支配ノ事候故、右同断ノ願申出候節ハ月番御小姓与番頭宅ニテ前条同断ノ始末可致候、

右之通、以来被仰付候条、此旨致通達、可承御役々へモ可申渡候、

天明七未正月

三一一八

一毎月対客日　三日　十三日　廿四日

御家老与ノ面々角入・前髪取願ニ付対客ノ儀、別段申渡通候、依之右之通対客日相定候条、朝五ツ時マテ又ハ八ツ後退出掛可致面会候間、右ノ心得ヲ以可被相越候、此旨致通達候、

天明七未正月　仲（島津久健）

三一一九

一新番ノ面々角入・前髪取願申出候節ハ、月番大番頭宅へ対客ニ罷越、其後右願書可差出候、尤、対客前右ノ含ニ候段内意可申込置候、左候テ、支配ノ事候間、角入・前髪取候様大番頭ヨリ相達、月番御家老へモ右之段見届可申出置候、

一御小姓与ノ面々右同断ノ願申出候節（列は）、御小姓与番頭宅ニテ前条同断ノ始末ニ可致候、尤、支配ノ事候間、角入・前髪取候様御小姓与番頭ヨリ相達、月番御家老へモ右ノ段ハ届可申出置候、

但、向々へハ別段申渡候、

天明七未正月

三一二〇

一新番並御小姓与ノ面々角入・前髪取願ニ付対客ノ儀、

別段申渡通候、依之毎月両日ッ、対客日被相定置、朝出勤前又ハ八ッ後退出掛ケ対客有之候様可被取計候、尤、日柄ノ儀ハ可被申出置旨、大番頭・御小姓与番頭へ可申渡候、

天明七未正月　　仲

三一二二

一小番・新番、角入・前髪取ノ儀、御小姓与同格(列様)毎月五日・廿五日両度ッ、被相究置候ニ付、願存候人ハ前以六組触役所へ内意申出候様、各小与中へ不洩様可被申渡候、　末略、

文化五年辰三月十四日　　六組触役所　印

三一二三

一諸所へ勤方ニ付引越居候者、田舎入御暇被下置候者ノ子共、角入・前髪取ノ願、初テノ　御目見相済、勢頃相応ニ相見へ候者御当地へ差越ニ不及、其所ヨリ与頭へ相付願可申出候、不及見分向々ニモ可申渡候、　末略、

延享五年辰四月

三一二三

願書案文

口上覚

私嫡子何某事、当年何年何歳罷成候間、前髪取角入御免被仰付被下度奉願候、尤、初テノ御目見相済申候、何ノ何某角入御免被仰付置候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

但、御面会相済申候、

月日　　何某　印

小与頭衆中

右之通、申出趣承届申候、願之通被仰付度奉存候、以上、

月日　　小与頭何某連印

何番触役所

御付紙

可為(列)願之通候、

▽何月△　　月番御小姓与番頭

（行間朱書）
「本文願書ハ御面会前日認置、小与頭印形取置、御面会相済候（刊）て四ツ後六与触役所へ差出置候へハ、御付紙ニテ願ノ通被仰付、直ニ前髪取又ハ角入致シ▽（刊）自分組頭又月番組頭所江即日御礼廻いたし候、左候而、△両日中角入・前髪取トモニ跡書物組所へ差出候事、」

湯治其外諸御暇事

三一二四

一湯治願ノ儀、数日申出来候へトモ、向後一廻ヨリ三廻マテノ間相限、場所何方ト可願出候、尤、日数幾日ト認来候へ共、是以往来日数相除幾廻ト可相願候、様子次第湯治先ヨリ少々ノ追願ハ不苦候、別テノ長病ハ日数モ格別ノ事候、且又心当ノ場所無覚束存候ハヽ、何方不相応ニモ候ハヽ、何方へ差越度段願置罷越候儀ハ勝手次第候、

右之通、　御沙汰之趣申来候段被仰渡、

天明五巳七月十二日　（島津久起）近江

三一二五

（三一二四号行間朱書）
「諸郷へ御奉公ニテ他行ノ内、無拠儀有之御断申上罷帰候時ハ、当人ヨリ御断ハ不申上（刊）出、親類ヨリ申出候、急成時ハ先罷帰リ、跡首尾ニテ相済候事、

三一二六

一一廻リノ儀七日

湯治願ノ儀、一廻ヨリ三廻マテノ間相限リ願申出、湯治先ヨリ少々ノ追願ハ不苦旨、先達（刊）て申渡有之候通、人々取違無之筈候へトモ、向後追願申出候テモ一廻ノ外容易ニ御暇被下間敷候、乍然為差知依病症テハ格別ノ事候条、此旨不洩様可申渡候、

天明六午三月　（島津久健）仲

三一二七

一諸人依願湯治御暇被下差越居、御暇日数筈合、今少シ不致入湯候テ不叶様体ニテ参先ヨリ御暇申次願出候節、所医師証文相添可願出候処、医師ニモ病症見届ノ上、入湯可致相応見及候ハヽ、証文可差出候、尤、最寄並

遠方マテモ相掛リ医師トテモ無之、証文不相調候ハヽ、
其訳書認、病症ノ次第委申出、御暇申次願出候様可致
旨被仰渡、

寅三月十六日　天明二年也　（喜入久福）主馬

三一二八

一諸人湯治参候者多有之〈列候〉、先年モ被仰渡置候通、病気
ノ節ハ薬ヲ用、痛有之者ハ鍼灸ナト致シ、夫ニテモ兎
角不致快気、湯治ニテ無之候ヘハ不致快気旨吟味ヲ極
候者ノ外、証文出シ申間敷候、少々痛有之候ヲ申立、
慰ニ参候者多有之由候、先年御医師トモヘ被仰渡候処、
大形ニ相心得候ト相見ヘ候、以後湯治願多有之候ハヽ、
御医師トモ不吟味ニ可相成ノ旨被　仰出候、
右之通、御医師ヘ申渡候、湯治ノ儀ハ為養生参儀候処、
鉄炮ナトヲ持参候テ遊山ノ体ニ致シ候儀、不被宜（ママ）事候
条、此以後湯治ヘ罷越候者ハ養生一篇ニ可仕候、尤、
鉄炮持参仕間敷候、此段表方支配ノ御役人ヘ不洩様申
渡、尤、与中ヘモ右之段被致通達候様与頭ヘ可申渡候、

享保五子二月廿三日　本（島津久豊）

三一二九

（三一二八号行間朱書）
一湯治並田舎ヘノ御暇、未　御目見不仕者ハ願申出ニ不
及〈列候〉、若輩者ニテモ　御目見仕候者ハ、部屋栖又ハ家
内ニ罷在、御番不相勤者モ時々与所ヘ申出、与頭承届、
御暇可被差免旨被仰渡、

元文二巳八月

三一三〇

一是マテ病気等ニテ引入候面々、為養生歩行御暇願出来
候、然トモ奥・表御役柄〈列勤柄〉ノ向ハ勿論、無役タリ共家
柄ノ向〈列面〉々ハ、御城下武士小路・市中等ノ場所ハ遠慮モ
有之事候間、右体ノ面々ハ下屋敷・抱屋敷等其外右ニ
準シ候場所ヘ相越、其所ナトニテ歩行ノ趣ヲ以可相願
候、
但、軽キ御役トテモ支配下等有之面々ハ支配ニ対候
間、自ラ本文ノ趣可準事、
右可申渡候、

天明七未七月四日　（市田教国）勘解由

三一三一

一諸人湯治御暇申出候節ハ、致薬用候テモ其詮無之、此上ハ湯治ニテ無之候ヘハ致全快間敷旨、療医見及候病症ノ者迄御暇申出、右体病人外御証文不差出様、先年申渡有之候条（刻処）、頃日御暇申出候人多有之候、最早程過キタル儀ニテ自然取違（刻候）ニテハ不可然候条、療医中ヨリモ右ノ旨趣ヲ以証文可差出候、依体ハ療医召出承届サセ候儀モ可有之候条、御暇申出候節ハ与頭其外致取次候御役々ヨリモ右ノ趣ヲ以病症承届可遂披露旨被仰渡候、

安永四未八月

三一三二

一隠居ノ面々、湯治・在所等ヘ罷越候儀、向後ハ其家督ヨリ相願可申、都テ部屋栖ノ通可相心得候、

一部屋栖ノ面々、私領等ヘ差越候節、家来ヘ用事申付候儀申立有之候ヘトモ、家督与（刻ナシ）ト（刻ハ）相替候付、向後右体仕置向々（刻ニ）相掛候テノ御暇被下間敷候、墓参リ其外無拠用事等ニ付テハ是迄之通御暇可被下候、

右之通可致通達候、

天明七未七月

（市田教国）勘解由

三一三三

一遠方寺入被仰付候者ヘ相付差越候親類御暇ノ願、勤方有之者八ツ後ニ相成候テハ奉行・頭人承届暇差免、翌日其首尾可申出候、尤、御暇被下何某相付差越候段、与頭ヘ首尾申出候様、可承面々ヘ可申渡旨被仰渡、

天明四辰六月

三一三四（の1）

一終日並八ツ星御暇等、毎々申出来候ヘトモ、其身並父母兄弟等格別ノ訳合無之候テハ申出間敷候、

右之通　御沙汰候条、此旨可承面々ヘ不洩様可申渡旨被仰渡、

天明五巳七月十二日

朱書

本文ニ付、小役人・書役等ハ御暇ノ儀如何可有之哉ノ旨、（島津久起）近江殿ヘ左源太ヨリ御尋申出候処、依人ハ差当リ

無拠用向モ可有之事ニテ、御役人等ハ相替候間、無拠筋合ヲ以御暇等申出候ハ、、御目付委承届ノ上ニテ其段申出候ハ、暇差免可然旨致承知候事、

（三一三四の2）

口達（刃之）覚

一諸御役人八ツ時星御暇ノ儀、去ル巳年被仰渡趣有之候処、到頃日一切不被下筋ト相考候哉、八ツ星御暇申出候人至テ相少（刃候）シ、格別無拠内用ノ儀ハ同役中申談、御用不差支節ハ申出候ハ、可被下候、尤、用向ノ子細ハ申出不及候条、無屹致通達候様ニ勘解由（市田教国）殿御差図ニテ候、

寛政元酉三月　　島津主水

但、書役・小役人支配下ノ向モ右ニ可準候、

三一三五

（三一三四号行間朱書）

一諸奉行ノ儀、無拠儀有之、一両日ノ仕廻致候節ハ、同役ヘ相断用事相達候ヘハ（刃共）、一日又ハ半日ニテモ御暇不致候テ不叶節ハ支配頭ヘ申出、差図次第可致御暇候、筆者・小役人右体ノ節ハ、其座（刃々）ノ奉行ヘ相断致御暇、御側目付座ヘ其段奉行ヨリ可申達候、已上、

正徳四午五月十五日

三一三六

一星御免ノ御役人致出勤居、無拠儀有之節、支配々々ヘ相付御暇申出、御暇被下候上可致退出旨被仰渡、

安永三年午十月十六日

三一三七

一十二月十三日御煤払、御対面所御書院御包丁人、二之丸御書院ノ儀モ同断、奥・表御役々其外当番迄罷出、御用仕廻次第退出、

但、御役人中着服麻袴、

右之通被仰渡候条、可被得其意候、此旨左京殿（頼姫久番）被仰候、

寛政四子十二月十二日　　取次　迫水善左衛門（久具）

三一三八

一正月三ヶ日

右星御免、諸役人御用相仕廻次第、八ツ前ニテモ退出、

一盆両日

右星御免、当番外御暇、当番モ御用仕廻次第御暇、

右三ケ条、（ママ）（空白、ママ）

一十二月廿七日

右御煤下ケニ付、当番外御暇、当番モ御用仕廻次第御暇、　御在江戸　御在国ノ時モ、表・御側共ニ向後此通ニ可致候、

一毎月七日　十九日　廿九日

右三ケ日、為　御寺参物頭已上ノ御役当番外御暇、

右一ケ条、　御在江戸ノ御留守計、表・御側共ニ此通ニ可致候、

已上、

宝永七寅閏八月廿一日

三一三九

一今日大雨ニ付、川近辺ヘ罷居候書役・小役人、宿元念遣存候者ハ奉行・頭人承届、暇差免、其届明日星検使御目付ヘ可被申出候、

一御役人ノ儀ハ筋々ニテ其訳申出、暇可被申出候、

右之通、（菱刈実祐）大炊殿ヨリ被仰渡候間、此旨致通達候、以上、

寛政六寅五月十九日　　御目付

三一四〇

一三月三日　五月五日　七月七日　八月朔日　九月九日

右ハ、月番御家老ヲ初諸御役人、右ノ日ニモ平日之通四ツ八ツ（刻之）星合被仰付事候ヘトモ、節句日ニハ差テ御用モ無之、何レモ毎日罷出候テ御用弁事候、依之休ミニモ可罷成候間、向後ハ節句日ニハ八ツ星御免被成、八ツ同前ニ九ツ時ニ星合被仰付候間、九ツノ星合ニ何レモ退出可致候、尤、正月三ケ日ハ此内之通被仰付候、小役人ノ儀モ右ニ可準候、

右之通被仰出候旨被仰渡、

享保三戌三月三日

三一四一

一月番御家老退出無之内ハ、向後八ツ打候テモ奉行・頭人・筆者・小役人マテモ惣様相詰罷在、月番御家老退出以後、諸御役座可罷立候、八ツ以後月番御家老長々

相詰候節ハ、時々暇ノ儀可申渡候間、其節ハ此内之通座々へ一人ツヽ、相残居候面々ハ、月番御家老退出以後御役座相締可罷立候、

此旨座々へ可申渡候、

享保五子五月廿七日　本（島津久豊）

三一四二

一八ツ打、月番外御家老御暇ノ節、何レモ退出可仕候、月番御家老御暇無之内相残候面々ハ、此内之通月番ノ御家老御暇ノ節退出可仕候、

右、表方支配ノ面々へ可申渡候、

同年子二月晦日　本

三一四三

一御奉公ニ付田舎へ差越又ハ湯治ナトニ差越候者、田舎ニテ狩致シ候儀、且又鉄炮ナト持越候事無用可仕旨、先年以来為被仰渡候事、此儀間違有之候ヘハ了簡違モ仕、末々ニテハ、与風右通ノ儀致シ候テハ如何ノ事候間、猶以先年被仰渡置候通可相守旨、可致通達旨被仰出候、

享保九辰十一月

三一四四

一大御目付以上ノ面々毎日相勤事候間、毎月朔日御礼相済次第、御用無之候ハヽ八ツ前ニテモ御暇可被下候、左候ハヽ、御寺参等モ仕、且自分ノ休ニモ可相成旨被仰渡、

宝暦十辰十二月七日

三一四五

一毎月朔日、御礼相済次第、御用無之候ハヽ、御暇可被下旨、先達テ被仰付渡置候ヘトモ、御沙汰ノ趣有之、四ツ八ツノ勤ニ被仰付度旨申談、山田司ヲ以奉伺候処、被聞召置候旨同人ヲ以承知仕候趣、大御目付限御通達、

安永四未七月二日

三一四六

一大御目付ヘ、医道為稽古江戸ヘ被差越候面々、当分マ

テハ年限ヲ以被仰付置候ヘトモ、向後ハ無年限被仰付候、左候テ、此内ヨリ年限ヲ以稽古被仰付置候面々、以後年数筈合候節、又々被召置候様申出候ハヽ、稽古下地等吟味ノ上、年限ノ沙汰ニ不及筈候旨、此節江戸ヨリ申来候条、其通可被相心得候、

明和九辰五月　　主馬(喜入久福)

三一四七

一湯治又ハ普請修補、其外何ソニ付一日ノ御暇被下、日数筈合、翌日御礼申出候モ有之、又ハ不申出モ有之、不同ニ候間、向後ハ相並候様御礼被申出可然候、此段寄々可被申通候、以上、

享保廿一年辰五月三日　　郷原金太夫(久雄)

三一四八

一士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソニ付、為稽古江戸・京・大坂・長崎ヘ被遣置候者トモ、去ル辰年被呼帰、又ハ其内年限相究置候者モ有之(列候)ク、依之向後左之通被仰付候、

一右体稽古方ニテ他所ヘ御暇被下罷越候者ハ、御暇内御家中被召放可被遣候、右之通御家中被召放被遣事候ヘハ、於他所何様ノ儀仕出候テモ此御方御計不被仰付候、

一御暇中ノ儀、薩摩牢(浪)人ナト、申筈候ヘトモ、他所ノ人ヘ挨拶等モ此御方御家中ノ者ナト、ハ曾テ不申筈候、

一稽古中、銀銭等何様ノ手迫リ有之候テ訴訟申出候テモ御取揚無之候、

右ハ、自分為稽古御暇申出、他所ヘ罷越候節ハ、右(列)之格を以被遣候間、御暇申出稽古△ニ罷越候者、右之趣ヲ以御暇願出候様可申渡置候、

三月　　織部

三一四九

一士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソニ付、為稽古江戸・京・大坂・長崎ヘ罷越候者、稽古中御家中御暇被下切ニテ罷越候節、書物案文、

一私事、此節何為稽古何事(方カ)ヘ何ケ年御暇被下切ニテ罷越候ニ付、右之通御家中御暇被下候付テハ、於先方此御方御家中ノ者ニテ稽古方ニ罷越候ナト、曾テ申間敷候、

一御免年数筈合候ハ、則罷帰候様可仕候、若又稽古方未熟ニ有之、今少罷居申度候ハ、前以申上、御差図次第可仕候、何様ノ訳モ不申上弁々ト他所ヘ罷居申間敷候、

一御暇中随分律儀仕、稽古方精ヲ出可申候、

右ハ、此節何為稽古何方ヘ何ヶ年御暇申上罷越申候付テハ、御家中被召放罷出候間、書物仕差上置申候、以上、

年号月日　　何ノ何某

右、此節何方何為稽古何ヶ年御家中御暇被下候ニ付、御暇中ハ御家中被召放候ニ付、於他所何様ノ儀仕出申テモ此御方御計不被仰付候間、其通可被相心得候、

三一五〇

一御暇中差迫候儀共有之、訴訟申出候テモ御取揚無之筈候、

一稽古中御家中召放被遣候ヘハ、（トモカ）年数筈合候節ハ本之通立帰事候ヘハ、手札等相除ニ不及候、

一通手形ノ儀ハ向々ヨリ可申渡候、

右ハ、士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソニ付、為稽古自分ニ江戸・京・大坂・長崎ナトヘ罷越候節、御暇中御家中被召放被遣候間、右之通被仰付被差越筈候間、此旨帳面記置、江戸・京・大坂・長崎ヘモ申越、首尾係ヘモ可申渡置候、尤、稽古被遣候者有之（列候）節ハ時々此旨申越候様可致候、

酉三月　　織部（種子島時成後北条時守）

寛保元年酉仰渡、

三一五一

一部屋栖ノ人湯治並田舎ヘノ願ノ節、家督ノ人御暇内ニテ他行ノ節ハ親類ヨリ願有之事候ヘトモ、向後右体御暇内ニテ他行ノ人ハ御国中ノ儀ニテ候間、不因誰人、家督ノ参（列り）先ヨリ願有之候様被仰付候条、寄々可致通達候、

安永四未正月

張紙

本行家督ノ人、湯治並田舎ヘノ御暇願次等ノ儀モ本文ノ通、参リ先ヨリ願出候筋可致旨、波門殿被仰候、

三一五二

一船路ノ所ヘ日帰リニ差越候節ハ御暇申出、陸路ノ所ハ不及其儀旨被仰渡、

享保廿一年辰五月廿五日

三一五三

一隠居ノ人、御暇等ニ不及旨被仰渡、

享保廿一年辰五月

三一五四

一御目見不仕者、御暇願申出ニ不及旨被仰渡、

元文二年巳八月

三一五五

一御番人、修補普請御暇願申出候節、日数十五日限リ申出候様被仰渡、

一田舎入御暇申出筈合候節、御番申出候(列)御届申出候節、持高等有之者候ハヽ、其段書加ヘ申出候様被仰渡、

十二月十九日

三一五六　（列）により補）

一親類寺入被仰付、同心として相付差越候節、御暇与頭前より被下候而、届を以被申出候様被仰渡、

明和元年

三一五七

一部屋栖ノ人御暇願、家督ノ人御暇内ニテモ御国元ノ事候間、参先ヨリ可願出、寺入出寺等ニ付列越度願ハ急成事故、親類ヨリ願出候様被仰渡、

安永四年未八月廿六日

三一五八

一御番不相勤組ノ士又ハ部屋栖家内罷在候者、湯治並田舎ヘノ御暇組所ヘ申出、組頭承届御暇被差免事候ヘハ、未　御目見不仕者ハ願申出ニ不及候、若輩ニテモ　御目見仕候者ハ、部屋栖又ハ家内ニテ罷在御番不相勤者モ湯治並田舎ノ御暇時々組所ヘ申出、組頭承届御暇可被差免旨被仰渡、

元文二年巳十一月廿二日

三一五九

一湯治御暇願申出候節ハ御医師ノ証文ヲ以申出候様ニ先頃申渡置候、然共病気ニ付勉難成節ハ療治頼候医師ノ証文迄ヲ差出者モ有之候条、向後致療治医師ノ証文ニ御医師ノ次書ヲ以可申出候、此旨与中支配中へ可致通達候、以上、

正徳四年午七月廿八日　（島津久朗）大蔵

取次　町田八右衛門

三一六〇

写

一此跡御暇申出候節、一七日・三七日ト申出候ヘトモ、日数幾日ト申出候様ニ申渡置、当時ハ七日・十四日・廿一日ト大形申出候、依事テハ五十日ノ御暇モ願出事候、湯治御暇等ハ一廻（ヲリ）く・二廻リ（ヲリ）ノ考ニテ右日数（ヲリ）之通可願出儀候ヘトモ、湯治ノ外看病又ハ普請御暇、其外何ソニ付御暇申出候節モ右日数（ヲリ）外ハ願不申出儀ト存違候儀モ可有之候、向後ハ大体御暇ノ日数ヲ考、幾日ニテ可相済ト存候ハ、其日数ヲ願可申出候、必七日・十四日・廿一日御暇ノ日数限候ト不存様ニ可相心得候、此旨可致通達候、以上、

享保十一年午八月十五日　（樺山久初）主計

三一六一

一御用日ニ八ツ星御暇申出候人有之候節、訳ノ相立候程ノ無拠儀有之、御暇申出候者ハ、取次可致候、一通リ無拠儀マテニテハ向後取次致間敷旨、（島津久馮）主殿殿ヨリ致承知候事、

宝暦二年申四月八日　取次　川上弥五太夫

三一六二

寛保三年亥

一無役ノ大身分・寺社奉行已下、月次御礼罷出候御役人、何ソニ付御暇被下候節ハ、取次ノ御用人ヨリ御目付ヘモ時々可申聞置旨、民部殿ヨリ被仰聞候事、

寛保三年亥五月

他所御暇

三一六三

一士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソニ付、為稽古江戸・京・大坂・長崎へ被遣置候者トモ、去ル辰年被呼帰、又ハ其内年限被相究置候者モ有之候、依之向後左之通被仰付候、

一右体稽古方ニテ他所へ御暇被下罷越候者ハ、御暇中御家中被召放可被遣候、右之通御家中被召放被遣事ニ候へハ、於他所何様ノ儀仕出候テモ此御方御計不被仰付候、

一御暇中ノ儀、薩摩牢人（浪）ナト、申筈候へ共、他所ノ人へ挨拶等モ此御方御家中ノ者ナト、ハ曾テ不申筈候、

一稽古中、銀銭等何様ノ手迫リ等有之候テ訴訟申出候テモ御取揚無之候、

右ハ、自分為稽古御暇申出、他所へ罷越候節ハ右ノ格ヲ以被遣候間、御暇稽古ニ罷越候者ハ右之趣ヲ以御暇願出候様可申渡置候、

寛保元酉三月　織部（種子島時成後北条時守）

（三一四八号文書に同じ）

三一六四

一士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソ（四）ニ付、為稽古江戸・京・大坂・長崎へ罷越候者、稽古中御家中御暇被下切ニテ罷越候節、書物案文、

一私事、此節何為稽古何方へ何ケ年御暇被下切ニテ罷越申候、右通御家中御暇被下候ニ付テハ、於先方此御方御家中ノ者ニテ稽古ニ罷越ナトト曾テ申間敷候、

一御免年数筈合申候ハ、則罷帰候様可仕候、若又稽古方未熟ニ有之、今少シ罷居申度候ハ、前以申上、御差図次第可仕候、何様ニモ訳モ不申上、弁々ト他所へ罷居申間敷候、

一御暇中随分律儀仕、稽古方精ヲ出可申候、

右ハ、此節何為稽古何方へ何ケ年御暇申上罷越申ニ付テハ、御家中被召放罷出候付、書物仕差上申候、以上、

年号月日　何ノ何某　印

一何ノ何某

右、此節何方へ何為稽古何ケ年御家中御暇被下候ニ付、

御暇中ハ御家中被召放候付、於他所何様ノ儀仕出申上(ヲ)候テモ此御方御計不被仰付者候間、其通可被相心得候、
一御暇中差迫候儀トモ有之、訴訟申出候テモ御取揚無之筈候、
一稽古中御家中召放被遣候ヘハ、(トモカ)年数筈合候節ハ本之通立帰リ事候ヘハ、手札等相除ニ不及候、
一通手形ノ儀ハ向々ヨリ可申渡候、
右ハ、士並人家来其外ノ者、医道又ハ何ソニ付、為稽古自分ニ江戸・京・大坂・長崎ナトヘ罷越候節、御暇中被召放被遣候間、右之通被仰付被差越筈候間、此旨帳面記置、江戸・京・大坂・長崎ヘモ申越、首尾係ヘモ可申渡置候、尤、稽古被遣候者有之候節ハ、時々此旨申越候様可致候、

寛保元年酉三月　　織部

（三一四九・三一五〇号文書に同じ）

三一六五

一外稽古被仰付置候者、五ケ年ヲ限可被(ヲ)差下旨被仰渡、

安永三年午十一月廿一日

三一六六

一医道・御能方・諸細工、其外不依何事、御物ヨリ付届被下置、外稽古被仰付置候者トモ、御倹約ニ付都テ付届一往被下間敷候、右ニ付、自分付届ヲ以外稽古致シ(ヲ)候儀ハ勝手次第被仰付候、
一学文ノ儀ハ、聖堂御銀ノ内ヲ以、定式付届料ノ半分程被下旨被仰渡、

安永三年午十一月

永御暇

三一六七

一御領国素生ノ者ハ、不依高下、古来ヨリ他国ヘ在付候儀被禁置、他国出ノ節ハ訳相立願出事候処、軽キモノニ至候テハ間々取違有之由、他所居付ノ儀トモ(ヲ)ク取企、或御大家ナトヘ立入、無拠御貰請等モ申来、畢竟其身共内々仕合ニ存候趣故、右ノ事候間、御国法相障リ不可然儀候、依之已来右体ノ儀、御大家方御内意等有之

候テモ堅難相成趣、屹ト可申断〱候、若此上不依誰人御貰請等ノ儀申来候ハヽ、其身存候モ不存モ無差別、他国出差留候、勿論依所テハ屹ト其咎目可申付候、尤、此節前件体ノ者トモヽ有之候ニ付、右通可申付〱奉候ヘトモ、畢竟委ク御国法ヲ不相弁所ヨリ事起候儀故、有免申付候間、向後ハ右之趣得ト相心得可罷居候、右之通、向々ヘ不洩様申渡、支配下等ノ者ヘハ頭人・主人ヨリ申聞候様可申渡候、

寛政七年卯二月　（川上久致）久馬

他国居住

三一六八　山川ノ孫右衛門

一右ハ、先年ヨリ町奉行証文ヲ以天草ノ内牛深村ヘ致居住候処、此節島原御所替ニ付、御当地ヘ差越申出趣有之候間、先年已来居住為仕来趣ヲ以、町奉行ヨリ先一往居住ノ証文相付差越候様申渡、首尾係ヘモ右之通趣可申聞候、

寛延三午七月　（樺山久初）主計　取次　島津権左衛門（久智）

三一六九　山川ノ孫右衛門

一右ハ、島原御支配天草ノ内牛深村ヘ居住被仰付置候処、先比島原所替ニ付引続居住ノ願申出候付、戸田能登守（忠盈）様御方ヘ申込ノ趣有之候処ニ、彼地ヘ致居住候儀支無之旨彼方役人方ヨリ申通候条、此段承知仕候様可申渡旨、御船奉行・糺明奉行ヘモ可申渡候、

寛延四年未正月　（島津久篤）主殿　取次　二階堂十郎右衛門

披露御届

三一七〇

一欠落帰参者致病死候節、向後不及披露候、変死等ノ節

ハ是迄之通可申出候旨、向々へ可申渡旨御差図ニテ候、
以上、
寛政十二申閏四月十五日　樺山物集女

三一七一
一行倒者又ハ自縊者何方者トモ不相知節、札相建候儀不同有之候故、向後所持道具等有無ニ無構、近方寺へ葬置札相建候様可申渡候間、其通可被相心得候、
安永七戌五月十二日　（小松清香）帯刀
右近殿

三一七二
一何ソ訳有之、行衛不相知者、内々尋方等披露及延引候モ有之、御尋方等ノ間後ニモ相成候間、向後ハ無遅滞披露申出、其上ニテ親類トモ致尋方候儀ハ其通可有之候、勿論乱気体ノ者ナト右体ノ節ハ、猶又早々可遂披露旨、向々へ不洩様可致通達候、
安永七戌五月　帯刀

三一七三
一於諸所一向宗執行ノ者有之候節ハ、加役トモヨリ宗門改方マテニ申出筈候処、百姓相交居候ヘハ取違、郡方ヘ首尾申出候所モ有之候ヘトモ、右宗旨ノ儀ハ兼テ申渡趣有之、別テ被入御念候事候間、若執行ノ者有之候ハ、、一切不申発随分致隠密、夫々支配頭ヘ申出ニ不及、早々宗門改方へ可申出候、
安永七戌五月

三一七四
覚写
一百姓・岡町人・浦人等火災ノ儀ハ、横目方ヨリ横目頭所へ相伝之、所役人ヨリ地頭方へ申出、及披露事候、又御船手郡座へモ申出候ニ付テハ致次書帳面ニ書留仕、御勝手方へ申出候故、再三披露有之儀ニ候間、小火ニテ自火無別条、人牛馬死失怪我等於無之ハ、郡座・御船手へ承置之可申候、若又地頭へ相付申出候訳書面ニ不相知候ハ、、小火ニテモ書付奉行持参仕、御用人ヲ以差出可申哉、次書ニモ及申間敷候、尤、火事ニ付已

後御沙汰可有之候、奉行書付相添可申候、
付、当所中浦・在郷出火ノ節ハ承届、此中ノ通可被
申出候、
右之通可有其意得也、
宝永二年酉九月　　御勝手方印

三一七五

一何ソ訳有之行衛不相知、着先内々ニテ致尋方、手掛リ無之節ニ至リ其段申出候テハ、御尋方ノ間後レ相成候間、披露致延引間敷トノ儀ハ先頃申渡置通ニ候、就中乱気体ノ者ハ御尋方及遅滞候テハ何様ノ異変カ可致到来モ難計、到テ大切ノ事候間、夜中ニテモ御家老与ノ面々ハ月番御家老宅ヘ申出、其外ハ向々支配頭ヘ同断可申出候、　末略（列ス）く、
安永八亥正月

三一七六

一諸郷浦方ヘ出火・変死者等有之、其所ヨリ申出候節ハ、次書ニテ御勝手方御内見ノ上、表ヘ相付披露申出来候ヘトモ、諸郷ノ儀ハ地頭ヨリ申出事候間、御船奉行支配浦ノ儀ニ候ヘ共二重相成候故、申出ニ不及旨、未十一月二日讃良善助口達（列）ニテナリ、三原佐々右衛門致承知置候段ハ御規帳朱書ニ相見ヘ候ヘトモ、是マテ押通シ右式披露申出候節ハ時々申出来候付、取扱致両□（空白、ママ）候間、已後御規帳朱書之通、七島・三島・荒田浜、両御船手出火・変死等有之候節マテ其段申出、外浦方右体ノ儀有之候節ハ申出ニ及間敷ヤノ旨、山元助右衛門ヨリ伊集院四郎ヘ内分ニテ承候処、成程其通ノ事（列）ニく候ヘトモ、若ヤ地頭方ヨリ申出候書付相滞候節ハ御船手ヨリ申出候書付ヲ以御取計無之候テ不叶事候間、是迄之通披露書可差出旨、卯四月十九日助右衛門致承知候間、已後為見合致壁書置候、
寛政七年　御船手壁書

三一七七

一火事並変死等ノ節ハ、御側支配トテモ都テ表方ヘ相付申出候様被仰渡、
延享三年寅十二月四日

三一七八

一御役相勤候内相果候節、御家老衆へ首尾申出候ニ不及、御役御免以後相果候者ハ首尾申出候様被仰渡、

明和五子三月十七日

三一七九

一御法度ヲ背候者、又ハ悪意ノ企ヲ致候者有之(列)候節、其訳ヲ存候者ヨリ有筋ヲ可申出ト存候者、御城下士並外城衆中末々ノ者ニテモ、筋々ノ役目ニ相付申出候儀有之候テハ思違有之候間、向後右体ノ儀可申出心底ノ者ハ、大御目付与力ニ相付申出候(列)ニテモ、御目付へ相付申出候(列)ニテモ、直ニ其訳可申出候、尤、右通(列)申出候者ハ△申出候者ノ名書ヲモ相記、直(列)ニ致持参可申出候、名書モ無之、越訴コトク(列)の致方ハ曾テ不被取揚候間、此取違無之様可相心得旨被仰渡、

寛保二年戌八月十八日

三一八〇（の1）

享保三年戌

一諸御役座並支配ノ御蔵方へ或盗人或何ソ変有之候節、八ツ以後ハ御家老宅へ申出事候へトモ、右通ニテハ手当申付様廻達ニ有之、遅滞相成事候間、向後ハ先ツ早速月番ノ大御目付(列)宅へ可申出候、則手当ヲ申付筈候間、御家老宅へハ大御目付へ申出候已後、其次第申出候様ニ可相心得候、

右之通、奉行・頭人へ可申渡候、

享保三戌十一月朔日　　取次　相良権太夫

（三一八〇の2）

右ニ付、又々　以上略ス、　夜中計右ノ次第申出事ト、間ニハ心得違候者モ有之由相聞得候、御家老御座退出已後、又ハ朝不致出勤内ハ、昼夜トモ何時モ先頃申渡置候筋ニ可申出候、

右之通可申渡候、

享保三年戌十二月　　（種子島久基）弾正

島津家歴代制度巻之四十三　天明（ママ）文和

認振
御書向
書礼向
式対
送迎

触書認振並諸書付認振

三一八一
（行間朱書）「享和酉年、御倹約ニ付、朱書ノ通、」
御前御用ハ御家老連名、其外ハ一名、
一大奉書切紙、上包状封紙「（朱書）「張紙此場小奉書杉原ノ間切紙、上包下紙、」」
御側廻以上無役ノ寄合以上ヘ御用人所ヨリ、
一中奉書切紙、上包美濃紙下紙
御留守居以下御役（ヲ役）〈人限無役之寄合並ヘ御用人等ヨリ、
一中奉書切紙「（朱書）「張紙　本文二ケ条下紙切封ジ、」
諸士ヘ御用人ヨリ触書、
一杉原切紙ニテ上包下紙等「（朱書）「張紙　此場下紙横切ノ触書、」
右ハ、御役替又ハ重立候御用ニ付、着服・麻上下ニテ罷出候様、是マテ御側役以上ハ切紙、其以下ハ触書ニテ申渡来候ヘトモ、以来切紙等差出候節ハ右之通相改、御役人已上ハ不及着服沙汰相認、尤、取仕立認様別紙之通、於御役席御目付直達ノ儀ハ是マテノ通可相心得候、尤、外御役々ヨリ向々ヘ申越候儀共右ニ可準被仰出段申来候ニ付、無間違可致首尾旨可承御役々ヘ申渡、其外不洩様可申渡候、
天明五巳二月　（島津久記）近江

三一八二
（三一八一号行間朱書）
一触書取仕立方等ノ儀ハ、別紙ノ通相究置（ヲ被）候ヘトモ、已来ハ張紙ノ通被仰付候条、可承面々ヘ可申渡候、
享和元年酉五月　（川田佐賢）伊織

三一八三

一御前御用御家老直達

何某殿　何ノ誰

御用ノ儀候間、明何日何時可被差出候、――以上、

月日　何之誰

――

――

――

――

何某殿

一御家老直達之分

何某殿　何之誰

御用ノ儀候間、明何日何時可被罷出候、――以上、

月日　何ノ誰

何某殿

一御側役以上無役之寄合以上へ御用人等ヨリ

何某殿　何之誰

御用之儀候間、明何時可被罷出旨、何殿詰御差図申達候、以上、

月日　何之誰

何某殿　（朱書）「引札　御受ノ儀ハ有来通可有之候、」

御用之儀候間、明何日何時可被罷出旨、何殿依詰申達候、以上、

月日

一御留守居以下御役人限寄合並へ御用人等ヨリ

何某殿　何ノ誰

御用之儀候間、明日何時可被罷出旨、何殿詰依御差図申達候、以上、

月日　（朱書）「引札　右同、」

一諸士へ、御用人等ヨリ

触書　奉　何某

何某

――

（朱書）「引札　御受ノ節星ヲ掛来候へトモ、如此奉ノ字ヲ可相認候、」

右御用候間、明何日何時麻袴着用ニテ可被罷出候、以上、

（朱書）「引札　麻袴ト有之節ハ麻上下ニテ罷出訳（ヵ儀）ト可相心得候、」

月日　　何之誰

右之通被仰渡候、

天明五巳二月廿九日

三一八四

口達覚

一此以前ヨリ、御役人諸士ヘ御用ノ節ハ、是マテハ御受星ヲ以相済来候処、御受ノ節星ノ場ヲ奉ト可相認旨、此節被仰渡候付テハ、軽キ御用トテモ勤方有之人ハ勤御座候、又ハ同役ヨリ問合、書付等差遣候節ハ右被相替候奉ヲ相用候様、近江殿ヨリ島津十太右衛門御取次ヲ以、（列）乞〈被仰渡事ニ付（列）ハ無之候ヘトモ、此涯間違等モ有之候テハ如何ニ候間、御目付ヨリ申達候様致承知候間、此段致通達候、以上、

巳三月廿日　　御目付

三一八五

（三一八四号行間朱書）

一御用通達等ノ諸書付、都テ奉ノ字相用候ヘトモ、一通ノ儀ハ有来通星又ハ棒点ナト不同ニ相用、其身ノ奉行・頭人等ノ書付、或ハ重キ向ヨリノ書付其外屹ト御受ニモ及候程ノ場ニ奉ノ字可相用候、此旨可致通達候、

天明六午正月

別紙ノ通リ先達テ申渡置候処、不相並不同有之由候故、以来ハ向々御用人受持ニテ申渡ノ意味合能相分、夫々其分ケ有之、不同無之相並候様、支配有之御役々ヘ申談可取計候、尤、右ニ付得差図候儀モ有之候ハ、可申出旨被仰渡、

午七月

三一八六

一島津兵庫殿　島津小源太殿　島津周防殿

右三人ヘ

一重キ儀申渡候節ハ、於御家老座其御用ニ係候御家老直ニ可申渡候、

一以書付申渡候儀ハ、其御用ニ係候御家老ヨリ以手紙可申達候、手紙案文ノ大格奥ニ記、

一軽キ御用口上ニテ申渡ハ、中抑又ハ仮屋守召出、御用

人ヲ以可申渡候、

手紙案文

何々ノ儀付テ、来ル幾日御能御興行御祝被成候、依之其御元御相伴被仰付候ノ旨　御意候、熨斗目・長上下御着、朝五ツ半時御登　城可被成候、以上、

月日

島津兵庫殿　周防殿モ同案

明幾日、南泉院へ　御代参可有御勤旨被仰出候、以上、

但、兼日(ヲテ)　御代参被仰付候時ハ　御代参御勤可被成候、以上ト可有之候、

月日

島津周防殿

一島津左衛門殿(ヲヲ)(ナシ)　島津筑後へ

右両人へ

一重キ儀申渡候節ハ、於御家老座其御用ニ係候御家老ヨリ以手紙可申渡候、手紙案文奥ニ記、

一願付ニテ被　仰出事カナト(ママ)類ノ儀ハ御用人ヲ以可申渡候、

手紙案文

陽和院(光久継室)様御法事付、来ル幾日福昌寺へ可被相詰候、以上、

月日

島津左衛門殿

来ル幾日、吉野御馬追　御名代被　仰付候間、可被相勤候、以上、

月日

島津筑後殿

一島津図書殿　独礼之方　組頭

右、向々へ以手紙申渡候案

来ル幾日、何方へ　御代参被　仰付候間、可被相勤候、以上、

月日　御代参ノ儀ハ、此間之通若年寄ヨリ可申渡候、

何某　独礼格ノ衆ヘハ此殿ノ字可相用候、

何某　組頭・御番頭ヘハ此殿ノ字可相用候、

一島津図書殿　独礼之方　御城代　御家老　若年寄

大目付　御側役㊀詰

右向々へ

一重キ儀ハ兼テ被定置候段々之通、於御家老座其御用ニ係候御家老ヨリ直ニ可申渡候、

一願付ニテ被　仰出候儀ハ、御用人ヲ以可申渡候、

一軽キ儀或ハ当病差合等ノ節ハ、与力召呼、御用人ヲ以可申渡候、

一御用問合等付テハ御用人ヨリ以手紙可申達候、案紙並殿ノ字ノ儀ハ独礼格之通可相認候、

一独礼之方ノ内、与力無之人ハ用頼ノ者呼寄可申渡候、

一寺社奉行　御勘定奉行　一所持列　御番頭　与頭

与頭列　御家老直触格

右向々へ

一重キ儀ハ兼テ被定置候段々之通、於御家老（座脱カ）其御用ニ係候御家老ヨリ直ニ可申渡候、

一願付テ被　仰出候儀ハ御用人ヲ以可申渡候、

一御用問合等ノ儀ハ御用人ヨリ以手紙可申渡㊀達候、

一連名ニテ触流候節ハ、御用ノ儀ハ前ニ書、奥ニ殿ノ字書ニ相認可触流候、

御用人手紙案紙大格

月日

何某㊞

独礼格之衆へハ

何某㊞

与頭・御番頭手紙案紙大格

明幾日、何々付テ、支度熨斗目・半袴着用候様可相達旨、誰殿被仰聞候間、可被得其意候、以上、

月日

何某殿

何某殿

一御用人已下召出候節案紙

▽㊀何某△

右、御用候間可被罷出候、以上、

月日　　取次ノ御用人名

一御用人已下へ御用付テ連名ニ触流候時ハ、直触格ノ人

有之候トモ同役連名ニ書認可相認候、面々身付トノ儀ヲ触流候節ハ、直触格ノ人ヘハ御用人ヨリ以手紙可申遣候、以上、

正徳二辰五月

三一八七

一御側・表トモ月次ニ御礼申上候御役人、御用付テ名代差出候時ハ、同役同列諸御役人不依高下、月次ニ御礼申上候御役人ノ内頼可差出候、無役ノ者ハ名代ニ差出間敷候、且又無役ノ者ノ名代モ勤間敷候、

一御側・表トモ親類御用ノ節、同列ノ者ニ親類無之時ハ御側・表ノ遠慮不仕、又ハ無役ノ者ニテモ可差出候、又無役ノ者親類御用ノ節、外親類無之時モ、御側・表ノ無遠慮名代可差出候、

右之通、向後相心得候様被　仰出候事、

正徳三巳六月廿三日

三一八八

一諸人ヨリ願出候書付、是マテ張紙ニテ相下ケ、取次前ヨリ写ヲ以申渡来候得トモ、向後願書・張紙トモ願人ヘ可相渡候、

一御家老申渡諸書付、取次前ヨリ写候書面ニ写ト口書イタシ来候ヘトモ、以来ハ何某殿ヨリ被仰渡候御書付ノ写又ハ何某殿被相渡候御書付ノ写ナト、可相認候、

右之通被仰出候段申来候条、願人ヘ張紙ノ儘相渡、申渡相済候段首尾書ヲ以可申出候、此旨可承向々ヘ不洩様可申渡候、

天明五巳八月廿二日　（喜入久福）安房

三一八九

一支配下ノ一身者以下、其外軽キ者勤方等ノ儀申付候節、御家老ヘ得御差図候付、何被仰付候ト申来候ヘトモ、其頭ヨリ取計ノ儀トモ御家老ヘ得指図、其頭手前ニテ申付候儀ハ何々申付候ト可相認候、御家老差図有之候分ハ何某殿ヘ得御差図申付候ト申振合可相認候、将又支配下外トテモ可相準候、諸給分等ノ儀モ何々為取之候ト可相認候、若為士者トモ支配頭手前ニテ相済程ノ軽キ事トモ等ハ、申付候ト可相認候、

右之通、諸向相心得、申渡ノ書付等モ其頭ヨリ相認候テ、頭名前ニテ可申渡候、且又士已上ヘ申渡事、御家老ヨリ申渡候書付等相下候ハヽ、其紙面通書写、見返シニ何々ノ写ナト、目安相記候テ可相渡候、

天明五巳八月廿二日

三一九〇

一御前向ニ差上候書付文字ノ儀付、去年四月申渡置、其後モ　御沙汰ノ趣有之、其段モ申渡置候処、諸御役所向書付今以不相直由、又々　御沙汰ノ趣有之候間、諸書付文字茎細見苦敷無之様相認、諸座々ヨリ御家老座其外御役席ヘ差出候書付・願書等、猶以不見苦様可相認旨被仰渡、

天明二寅二月

三一九一

(三一九〇号行間朱書)

一御前向ヘ差上候書付、文字太ク不敬ノ方有之候間、向後小ク奇麗ニ可相認候、諸御役所向書付ノ儀ハ右ニ可準候、御帳留ノ儀ハ後年ニ至リ無紛様可相記候、願書等不見苦敷様可書認旨被仰渡、

天明元丑四月

三一九二

(三一九〇号行間朱書)

一公辺ヘ御届ニ相成候儀ハ、文字其外纔トテモ相違ノ儀有之候ヘハ御面働ニ相成事候間、随分入念候様被仰渡、

天明二寅六月

三一九三

一御褒美事又ハ何ソニ付不念ノ儀トモ有之御断等ノ伺、其外御家老ヲ初、書役其以下マテモ依之一紙ニ相認候儀有之事候、大目付以上ハ格別ノ御役柄ニ候得ハ別紙ニ相認、其以下ハ是迄之通可有之旨被仰渡、

天明三卯八月

三一九四

一書役・小役人等姓名申上ニ相成候節ハ、片ニ役名相記可申事、

一無役ノ諸士、小番・新番ノ訳相記可申候、御小姓与ノ

儀ハ何ノ誰与御小姓与ト可相記、其以下モ右ニ準可相記候、

一部屋栖ノ儀ハ、大身分ヲ初、都テ不依誰人、父ノ名相記可申候、

但、大身分ノ儀ハ衣服又ハ初テノ　御目見相済候分ハ不及其儀候、尤、縁与願其外右類、依訳合ハ有来通父ノ名相記可申候、

一郷士ノ儀ハ何ノ誰地頭所何方郷士何ノ誰ト相記可申候、

右之通被仰付候旨被仰渡、

天明七未三月

三一九五

一御用筋付テ諸座問合ノ書付、御用人座ヘ差出候書付ノ儀ハ可被仰渡ト書記可申候、其外諸座奉行・頭人ヨリ御用筋問合ノ書付ハ可被申渡ト▽(朱)書記可申候、其外諸座奉行・頭人ヨリ御用、△向後書付可申旨、去ル十日申渡置候、

一大御目付並御書院方・御能方支配・寺社奉行・御勘定奉行・組頭並奏者番・御番頭・島津仁十郎殿・二階堂新五右衛門・相良新右衛門方ヘ奉行・頭人ノ書付ニモ、可被仰渡ト書可申候、其外諸座互ノ問合書ハ可被申渡ト書可申候、

一大御目付ヘ、何ソニ付テ寺社奉行・御勘定奉行・与頭並奏者番・御番頭・島津仁十郎殿・二階堂新五右衛門・相良新右衛門ヨリノ書付ニハ、何々可被仰渡ト書記可申候、

右之通、去ル十日被仰渡置候ヘトモ、又々細ニ被仰渡、

享保五子五月

三一九六

(三一九五号行間朱書)

一諸座互ノ問合書等、御役名ニテ遣候節ハ宛書御役名相認、御役所ヨリ遣候節ハ御役所宛ニ可認旨、先年申渡ノ趣有之候処、御役所ヨリ御役名宛認候モ有之、不相並由候間、向後不並ノ儀トモ無之様可認候、尤、御役柄御役名難認向ハ取次並進達掛等ノ御役名等可相認候、此旨向々ヘ可申渡候、

寛政元酉九月　　(島津久邦)石見

三一九七

（三一九五号行間朱書）

一諸座へ何ソノ御用被仰渡候節、軽儀ハ御書付（ヲ）ニ〈不及、口達被仰渡、重立候儀又ハ軽儀ニテモ意味有之御用ハ御書付ヲ以可被仰渡候条、諸座ヨリ申出候御用モ右ニ準シ、意味無之軽儀ハ口達ニテ可被申出旨、御差図ニテ候、

享保十二未九月二日　　鎌田太郎左衛門

三一九八

（三一九五号行間朱書）

一諸座へ申渡証文宛所連名ニテ申渡候節ハ、其座見合ニ成候儀マテヲ帳留致シ、其座へ無用ノ儀ハ可成程帳留無之様ニ可被申渡也、

享保十二未九月六日　　御勝手方印

三一九九

一御寺方　御参詣ノ節、御仏詣ト相認来候得トモ、以来ハ　御参詣ト可相認旨被　仰出、

天明五巳正月廿四日

三二〇〇

一御側役ヨリハ重御役ノ事候ヘハ、右用達ヲモ被召附置、役人御免ニテ、諸御役所ヨリ御用ノ依程合、用達又ハ役人召呼申渡候テ（ヲ）可〈相済事候、然処御用ノ品無勘弁、右ヨリ相下リ候御役柄ノ面々、直名前ヲ以軽キ御用向等触書ニテ御用申渡、何ソニ付上納物ナトノ書付等ニモ直名前ニテ申渡趣ニ相聞得、御役ノ高下モ不弁、甚以如何ノ儀被　思召上候、以来御側役ヨリ以上（ヲ）御役〈相勤候者ハ、右御役ヨリ相下リ候御役柄ノ者ヨリ直名前ヲ以御用申渡候儀、曾テ致間敷候、自然直ニ不申聞候テ難叶御用モ有之砌ハ、月番御用人ヘ其訳申達、月番御用人ヨリ何方御役所ヘ御用ニ付罷出候様切紙ヲ以可申達候、御側役以上ノ御役ヨリハ相互ニ御用可申渡儀候得トモ、是又　御先代被　仰出置候通、切紙ヲ以御用申渡、触書ニテ御用申渡儀致間敷候、且又切支丹御改ノ節、直印形申渡由候ヘトモ、是又寄合並以上ノ家格ヨリハ役人印形ニテ相済候間、直印ニ不及、役人印形ニテ可申渡、釈菜ニ付諸納物ノ儀、聖堂奉行ヨリ直名前ニテ御用申渡、右上納引付ニモ直名前ニテ申渡由候、

別テ如何ノ儀被　思召上候間、以来直名前ノ引付差出候儀致間敷候、用達・役人ノ内召呼可申渡候、其外御役所ノ高下無差別、右式勝手向ニ相掛候御用トモ、用達・役人ニテ可相済儀ハ其通相心得、引付手形等ノ書付直名前ニテハ相認間敷候、専御役々専(列之)立(列相)候様被仰付事候間、其弁ヲ以、右ニ準候儀ハ役々気ヲ付候様可申渡旨、被　仰出候段申来候条、可承御役々へ可申渡候、

天明四辰九月　（二階堂行旦）主計

三二〇一

一御役人其外名替伺ノ節、願名脇ニ相立、申渡書挙ニモ其通認来候処、御内沙汰ノ趣有之、伺ノ儀ハ是迄之通ニテ、申渡ノ節ハ本名ヲ肩ニ相記、別紙之通相認、書挙モ右ニ準取計有之候旨申来候間、右ノ振合ヲ以認方可被申付候、此旨申渡候、

天明五巳十二月　（島津久起）近江

三二〇二

一上々様ト書申候事ハ無用ニ可仕候、

一上覧ヲ御覧ト書可申候、

一御使被成下候節、上使ト唱申間敷候、

右之通被　仰出候間、諸役座へモ寄々可申達置旨被仰渡、

宝永七寅八月

三二〇三

一御家老座ヨリ御役順ヲ以申渡候触書下ニ御家老与与頭ト寺社奉行次ニ認来候得共、御勝手方次ニ相記シ、御用人座通達事、書役御用ニ付(列て)写方申付由候ヘトモ、向後御用人ヨリ写ヲ以書役へ相達、諸御役所ヨリ通達事等モ右ニ準候様被仰渡、

天明五巳八月廿二日

三二〇四

一先比申渡置候様、諸座書付並諸帳文字小ク行数モ多相調候ハ、紙数致減少筈候間、此中ノ半分程ニテ諸用紙

相済候様相心得可申候、

一諸蔵方取払帳、跡四双倍ニ定置候分、来ル二月朔日ヨリ二双倍ニ申付候、尤、諸帳・書付トモニ細字相調候付テハ、帳面ノ行数モ今一行相重メ九行書ニ相調候様ニ、支配頭ヨリ蔵役人方へ可申渡候、

以上、

正徳三巳正月

三二〇五

一諸座ヨリ被申出候書付ニ、兵庫殿・小源太殿事並　寛光陽院様　大玄(綱貴)院様ノ御子様方・御家老中ノ儀ハ、殿之字相用、其外ハ雖為誰人殿ノ字被用ニ及間敷候、以上、

正徳三巳正月廿三日

三二〇六

一諸御役座諸帳面等大文字ニ相調有之由候、日帳並諸証文ノ儀ハ其訳相知有之候マテノ事候間、行数多有之候様ニ可成程相調可申候、此段　御沙汰為有之事候間、拙者ヨリ通達申達候、

正徳二年巳(ママ)十二月廿日　　相良仁右衛門

三二〇七

一鎌田六郎太夫殿ヨリ御口達ニテ有川孝右衛門承候ハ、諸座ヨリ差出候御用筋ノ書付、文段長ク有之候付、御用多キ節御隙取ニ相成候間、可成長ケ手ミシカク相認(列)「本之マヽ、」肝要モ可有之候ヘトモ、先右之通相心得可罷居候、尤、書付等差出候節、御取次ヨリモ思召寄有之候ハヽ、可被仰聞候旨承リ候、此段(列)は諸座ヘモ不残御口達ニテ被仰聞候由承候事、

享保七年寅六月十九日、御船手御証文留、

三二〇八

一奥向御座並御用部屋ニテ申渡事等其外ノ儀トモ、首尾書・書挙等ニハ於奥ト可相認候、

天明三卯四月

三二〇九

一月限伺、且　御目見等ニ付書挙又ハ申渡ノ書付、部屋

栖ノ人名前肩書ニ只今マテハ家部元ノ人名字書来候ヘトモ、以来ハ肩書家部本ノ人名字ナシ名計ニテ部屋栖ノ人名書ニ名字相記、養子成又ハ違変ノ節ハ肩書家部元ノ人名字可相記候、右外何ソニ付伺・書挙・申渡ノ書付、部屋栖ノ人名前等相認候節モ都テ右同断、家部本ノ人無名字ニテ何左衛門嫡子末子ノ段、肩書可相記候、御役相勤候者ハ部屋栖ニテモ不及肩書候段被仰渡、

天明四辰八月十二日　（島津久健）仲

三二一〇

一何ソニ付願書等部屋栖ノ人名前申出候節ハ、都テ何ノ何左衛門嫡子末子ノ段、肩書可書記候、御役相勤候者ハ部屋栖ニテモ不及肩書候旨被仰渡、

天明四辰八月十三日

三二一一

一月限伺、且　御目見等ニ付書上又ハ申渡ノ書付、部屋栖ノ人名書肩書、家部元ノ人名字ナシ名計ニテ部屋栖ノ人名書ニ名字相記、養子成並違変ノ節ハ肩書家部元ノ人名字相記、部屋栖ノ御役人モ右同断肩書可相記候、右外何ソニ付伺・書上・申渡書付、部屋栖ノ人名前相認候節モ都テ右同断肩書ニ相記候様相達置候ヘトモ、肩書無之候テモ可相済儀ハ已前之通相認、肩書無之候テ難叶儀ハ月限ニ準シ可被相認候、御役人ノ儀ハ部屋栖ニテモ不及肩書候、且又家来以下ノ者ハ肩書有之節ハ家部本ノ者名字マテモ可被相記候、此旨申達候、

辰八月　安房

三二一二

一何ソニ付通達等ノ儀、末々ニテ不用ノ儀ハ相除申渡候様、仮於御白書院縁類御大老様・御老中様方御出席何々ノ儀被仰渡候ナト、申様成儀ハ、以来御白（書脱）院縁類ノ文字ハ可相除、都テ右振合ヲ以、仰出ノ儀トテモ下々ニテ承知仕不詮立儀ハ相除申渡候様ニト　御沙汰ノ趣申来候段被仰渡、

天明五巳十月十三日　（島津久金）伊賀

三二一三

一諸向トモ御帳留ニ相成候御用、　公辺ヘ相掛候儀ハ勿論、不依何篇追テ相替候儀有之候ハヽ、已来最前ノ書留有之候場所ヘ相替候趣、慥ニ朱書等ニテ仕付置候様可致候、尤、年久敷儀ニテモ、何年何月此通相替、其段ハ何帳ニ詳ニ有之候趣仕付置候ヘハ、後年紛敷儀モ無之筈候間、急度於向々申談、右初末相届候様可致候、右ニ付テハ、前々ヨリノ書留若不相届儀見当候ハヽ、其節々前文之通急ト可仕付置候、左候ヘハ、御用筋全相調、已来見合ノ節滞モ無之筈候条、奉行・頭人無油断心懸罷在、書役等ヘハ時々申聞行届候様可致候、此旨向々ヘ可申渡候、

寛政元年酉十月　　（島津久邦）石見

三二一四

一京都ヘ御用書付、急成儀ハ急御用ノ段、銘々致引札差越候様被仰渡、

天明二寅九月廿日

三二一五

一奥向御座並御用部屋ニテ申渡事等、其外ノ儀トモ、首尾書・書挙等ニハ於奥ト可相認旨被仰渡、

天明三卯四月

（三二〇八号文書に同じ）

三二一六

一御家老ヨリ申渡ノ書付等相下ケ、取次前ニテ書写相渡候書面見返㋐ニ別紙ノ振合ニ可相認候、此旨可承向々ヘ可申渡候、

天明六午正月　　（島津久金）伊賀

見返シ

何某殿ヨリ被相渡候御書付写　　何某

右、向々申付――――可申渡候、

何月　　誰

三二一七

天明二年寅

一御前ヘ差出候書付文字大ク無之様相認、且文言等モ人

柄又ハ御役之高下ニテ差別有之、御之文字用候節モ高下ノ差別ヲ以認候様、其外委細被仰渡、

寅四月

三二一八

一公辺ヘ御届ニ相成儀ハ文字其外纔トテモ相違ノ儀有之候ヘハ至テ御面働相成事候間、取シラヘ候面々モ兼テ其心得ニテ罷在筈候ヘトモ、猶又随分入念候様被仰渡、

天明二年寅六月

三二一九

一何ソニ付調方等被仰渡候節、本文ノ趣意ヲ以不残書認、其末ニ其座々差支ノ有無相記候向ニ大形有之候、本文所マテモ相紛、惣体シラヘ不書載候テモ可相済事候、向々ニテ右ノ振合ニ基キ、調事等手間不取埒明候様可心得旨被仰渡、

寛政三年亥十二月

三二二〇

一御用付差出候諸書付、向後月日附片ニ其年ノ十二支相記候様被仰渡、

寛延二年巳十二月

（樺山久初）主計
取次
肥後平左衛門

三二二一

一書付ニ御使便ヨリ御使便ニト認来候、向後御使便ニト認候様被仰渡、

寛保元年酉七月

（樺山久初）主計殿ヨリ

三二二二

一御近習役已上ヘハ衆ノ字相用候様被仰渡、

一小役人格ノ者ヨリ御役人ヘ遣候宛書ナトヘハ物奉行所御物奉行衆ナト、書調候様被仰渡、

寛保元年酉三月晦日

三二二三

一御使便ニ差遣候書状、切紙相認候様被仰渡、

明和二酉七月

三二二四

一何ソニ付諸御役々へシラへ事等申渡候節、本文之趣意不残書認、其末ニ差支ノ有無相記候向ニ有之、文言事長ク、於向々帳留旁モ甚面倒ノ事候間、肝要ノ事ヲ記、文言事短ニ相認候様、寛政二年戌九月名越右膳殿(恒鳳)ヨリ被仰渡、委細諸御役場ノ部ニ有之、可見合、

三二二五

一去ル卯年、何某方へ其外方ト認候儀ハ、不依何篇可成程不認様ニ可相心得旨、　御沙汰ノ趣有之、尤、不相用候テ通兼候儀ハ其通可有之事候へトモ、随分気ヲ付最通候様被仰渡置候処、頃日間ニハ、諸書付等ニ方ト認候向モ有之候間、已来右体ノ儀無之様▽(ヲ)寄々致順達候様△致承知候、已上、

天明七未十一月廿日　　御目付

三二二六

一諸座互ノ問合書、御役名ニテ遣候節ハ宛書御役名相認、御役所ヨリ遣候節ハ御役所宛可認旨、先年申渡之趣有之候処、御役所ヨリ御役名宛認候モ有之、不相並儀候間、向後不並ノ儀トモ無之様可相認候、尤、依御役柄難認向ハ取次並進達掛等ノ御役名可相認候、此旨向々へ可申渡候、

寛政元酉九月　　石見(島津久邦)
山田弥九郎(有貞)

(三一九六号文書に同じ)

三二二七

一先比申渡置候様、諸座書付並諸帳文字小ク行数モ多相調候ハ、、紙数致減少筈候間、此中ノ半分程ニテ諸用紙相済候様相心得可申候、

一諸蔵方取払帳、跡々四双払ニ定置候分、来ル二月朔日ヨリ二双払ニ申付候、尤、諸帳・書付トモニ細字ニ相調候付テハ、帳面ノ行数モ今一行相重メ九行書ニ相調候様、支配頭ヨリ蔵役人方へ可申渡候、

以上、

正徳三年巳正月　　取次　猿渡喜右衛門（信安）

（三二〇四号文書に同じ）

三二二八

一諸座ヨリ被申出候書付ニ、兵庫殿・小源太殿並　寛陽（光久）院様　大玄（綱貴）院様ノ御子様方・御家老（列中）ノ儀ハ、殿ノ字相用、其外ハ雖為誰人殿ノ文字被用ニ及間敷候、以上、

正徳三年巳正月廿二日　　取次　蒲生十郎兵衛

（三二〇五号文書に同じ）

三二二九

一御前ヘ差上候書付ニ誰奥又ハ内妻ト書付差上来候、向後ハ夫婦ノ内於　御前殿ノ字唱候妻ヲ内ト書付、其外ハ誰ニテモ妻ト書付可差上旨被仰渡、

享保十九年寅正月

三二三〇

一諸座書付、御近習役以上ノ御役者、其御役人ノ仮名ニ殿文字用候程ノ儀ハ、雖為証文御役名ニ衆ノ字可相付候、右以下ノ諸御役人ヘハ、其御役人ノ仮名ニハ殿ノ文字相付儀ニモ、御役名ニハ衆ノ文字相付ニ不及候、右ハ、諸書付御近習役已上ノ御役名、衆ノ文字相用候儀ニ付、享保十二年寄々可被申通旨相達候様有之候処、不相並儀モ有之候条、向後右之通可被相心得旨主計殿（列より）被仰渡、

享保十九年未（マ）五月廿四日

三二三一

朱書ニ、

一御近習役以上ノ御役人ヘハ衆文字相付、御用書付ニハ差図等ノ類可相調旨、主計殿ヨリ左近允与太夫（尚方）御取次ニテ、屹ト（列被）仰渡ニテハ無之候、寄々可申通旨被仰渡、

享保十二年未十二月十四日

三二三二

一御女性様ト書付、唱ニモ仕候ヘトモ、向後　御女中様ト唱、書付等ニモ仕候様、寄々可申通旨被仰渡、

元文元年辰十月十七日

三二三三

一諸人ヨリ差出候口上書等ノ儀、御近習役已上ハ杉原用候テ不苦候、

一御用触ノ節モ、御近習役マテハ御用人ヨリ手紙ニテ可申遣候、御留守居以下ハ触書出シ可申候、

右之通可相心得候、

元文巳（二年）十二月

三二三四

一小役人格ノ者ヨリ御役人ヘ遣候御用書付宛書、又ハ御用文箱ヘ上書、慇懃ニ可書記候、買物役ナトヨリ物奉行ニ遣候御用書付・御用文箱ナトニ、物奉行・買物役ト書候モ有之候由候、小役人格ノ者ヨリ御役人ヘ遣候最書（宛カ）、右之通ニテハ無礼ノ事候間、向後小役人ヨリ御役人ヘ遣候書付、タトヘハ物奉行所・物奉行衆ナト、慇懃ニ書調可然旨被　仰渡、

寛保二年戊三月三十日

三二三五

一享保十九年寅正月、　御前ヘ差上候書付、夫婦ノ内於御前殿ノ字唱候妻ヲ内ト書付、其外誰ニテモ妻ト書付差上候様被仰渡、右ニ付、御家老衆内ノ儀モ（ヲ）奥方ト書付等ニ書来候、奥方ト書可然哉、又ハ内ト書可申哉ノ旨御使番申出、御前ヘ差上候書付ハ右御本文ノ通相心得、諸座ヘ相係候御証文其外諸書付等ノ儀ハ都テ内ト唱書候様ニ、向後可相心得旨被仰渡、

元文二巳正月廿八日　　取次（純学）西彦太郎

三二三六

一御光儀願

一御役地頭職ノ御礼願

一御直元服・御名代元服並　御前元服、又ハ元服ノ御礼、初テノ御目見願

一家督・継目ノ御礼願

右、御近習役以上ハ杉原、尤、竪紙ニ、此外ハ文言長短ニヨリ切紙・下紙類麁相ノ紙ニテモ不苦候由、

朱本文ニ付
常式杉原紙用候面々、専通達承知有之筈ニ候、常式杉原紙不用面々、右之趣ヲ伝聞(承)、軽キ事トモ切紙ニテ差出候書付有之候ハヽ、其通ニテ可被相受取候、尤、与中ノ面々モ右ニ準シ切紙ニテ差出モ有之候ハヽ、与頭可被相受取候、外城ヨリ差出候書付モ同前ノ事、然共惣通達ニハ不及、杉原紙用来候面々ヘ専通達有之事、其外ハ承伝候テ其格ヲ以書付相認差出候ハヽ、其通ニテ相受取事、尤、切紙書付ニハ上包ニモ不及事候、

元文五年申三月八日

三二三七

一諸人ヨリ差出候口上書ノ末ニ此旨成合候様ニ被仰上(付)候様ニ(并)ト書候儀ニ付、成合ノ文字書申間敷旨、先年申渡置候、猶又気ヲ付候様、

一右ニ付、遠方外城ナトヨリ申出候儀、急不遂披露候テ不叶儀トモハ為相直候テハ延引相成候間、何様ニ可仕哉ノ旨、主計殿ヘ得御差図候処、中務殿被仰談、左様成節ハ其儘ニテ申出、已後相直サセ候様被仰渡候事、

御書向

三二三八

一日光様　　松平薩摩守

但、表立候ハ御直付不被遊候ヘトモ、若御内ニ彼御方ヨリ御書被進候儀有之候ハヽ、御向々　御名ハ彼方御書向ニ被準筈候、

一近衛様　　右同

但書同断、

一徳川民部卿様　　右同

但書同断、外御三家様モ御同様、

一松平筑前守様　　松平薩摩守

但、侍従以上御等輩之御方、

一伊東大和守様　　松平薩摩守

但、四品以上・四品以下ノ御大名様ニテモ御同様、乍然御高依多少、少々(々)ノ高下ハ其節ノ吟味可仕候、

一京極兵部様　　松平薩摩守

但、外御旗本衆御同様、

書礼向並目録振

三二三九

一兵庫殿　周防殿

一右へ大御目附以上御役・独礼ノ格ヨリ

一筆致啓上候　尊札致拝見候

被成御座　目出度奉存候

右之段為可申上如此御座候　恐惶謹言

島　兵庫様

返答

御札致拝見候　忝存候

一筆致啓達候　貴様　恐惶謹言

何某様　島津兵庫

一右へ寺社奉行以下一所持右ノ格、与頭並右格之嫡子ヨリ　㊀「本ノマヽ」

一筆啓上仕候　恐惶謹言

尊札拝見仕候　忝次第奉存候　宜御申頼存候

島　周防様　御披露

返事

御札令拝見候　忝存候　一筆令啓達候

何某様　島津周防

一右へ直触格又ハ与頭並ノ二男三男、御用人・御近習役以上ノ御役・地頭抔ヨリ

文章右ニ同、

兵庫様　御取次衆中トカ　御近衆中トカ

右返答

御状令拝見候　一筆令啓候

何某殿　島　周防

右以下御役、御小姓ナト相勤罷居者、無役ニテモ御馬廻・新番程ノ格式ヘハ、右ノ程ヨリ少軽ク、御歩行格式ハ直札ニ及間敷候、

正徳二年辰五月

三二四〇

一江戸御国許ヨリ御使便ニ何ソニ付差上候披露状ハ、有来通折紙ニ相認候様可仕候、諸人頼ノ書状大分ニテ荷

高ニ相成候間、向後諸人互ノ書通ハ勿論、御家老ヘ何ソニ付礼状等モ半切ニ相認候テモ不苦候旨被仰渡、

明和二酉七月

三二四一

一諸人取遣候目録、青銅・太刀ノ節ハ、太刀一腰・青銅百疋ト認来候ヘトモ、向後青銅・太刀ニテモ銀・馬代同断、太刀一腰・馬一疋ト目録可相認旨被仰渡、

元文二巳五月

「御本文ニ御ノ字不相見得候ヘトモ、御ノ字用候儀ハ此内ノ通ト張紙有之、」（行間朱書）

三二四二

一独礼ノ妻其外不依高下末々マテモ、妻ヨリノフミ・目録等ハ、以来誰内ト可相認候、此旨可致通達候、

寛政十二申閏四月　久馬（川上久致）

三二四三

安永二巳九月、左之通、

一御一門方ヘ大身分並大御目附以上其外文通格式、向後別紙之通被仰付候間、此段不洩様可致通達候、

巳九月　仲（島津久健）

御一門方ヘ大身分ヨリ

一筆致啓上候、弥御堅勝被成御座珍重奉存候、――――為可申上如是御座候、恐惶謹言、

貴札致拝見候――――恐惶謹言、

島津備前様

人々御中

貴報

御同人ヨリ大身分ヘ

一筆致啓達候、弥御堅固珍重存候、――――為可申達如斯御座候、恐惶謹言、

御札致拝見候、――――被入御念儀存候、恐惶、

何某様

人々御中

御報

御同人へ御家老・独礼ヨリ
一筆啓上仕候、愈御堅勝被成御座、珍重奉存候、――
――為可申上如斯御座候、恐惶謹言、
貴札拝見仕候、――――恐惶、
島津備前様
参人々御中
参貴報

御同人ヨリ右之面々へ
一筆致啓達候、弥御堅固珍重存候、――――為可申達
如此御座候、恐惶謹言、
▽㉑御札致拝見候、――――恐惶、△
何某様
人々御中
御報

御同人へ若御年寄・大御目附・同格ヨリ
一筆啓上仕候、愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、
――――為可申上如斯御座候、恐惶謹言、
貴札拝見仕候、――――恐惶、
島津備前様
参人々御中
参貴報

御同人ヨリ右ノ面々へ
一筆令啓達候、弥御堅固珍重存候、――――如此御座
候、恐惶謹言、
御札令拝見候、――――恐惶、
何某殿
人々御中
御報

御同人へ一所持・同格ヨリ
一筆致啓上候、愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、
――――為可申上如斯御座候、此旨宜預洩達候、恐々
謹言、
尊書拝見仕候、――――此由宜預洩達候、恐々、
役人ノ内

何某殿

御同人ヨリ右ノ面々へ

一筆令啓達候、愈御堅固珍重存候、――――如此御座候、恐惶謹言、

御札令拝見候、――――恐惶、

何某殿

人々御中

御報

御同人へ寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭・寄合ヨリ

但、右御役々、一所持・同格ヨリ相勤候時ハ家格之通、

一筆致啓上候、　備前様愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、――――為可申上如斯御座候、此旨宜預洩達候、恐惶謹言、

従　備前様尊書拝見仕候、此旨宜預洩達候、恐惶、

役人ノ内

何某殿

御同人ヨリ右之面々へ

一筆令啓達候、愈御堅達珍重存候、――――如此御座候、恐々謹言、

御札令拝見候、――――恐々、

何某殿

人々御中

御報

御同人へ一所持ノ二男・寄合並・御用人・町奉行・御近習役・同並・御留守居ヨリ

但、右御役々、格式宜面々ヨリ相勤候時ハ家格之通、

一筆致啓上候、　備前様愈御勇健被成御座、珍重奉存候、――――為可申上如斯御座候、此旨宜預御披露候、恐々(ママ)、

役人ノ内

何某殿

御同人ヨリ右ノ面々へ

一筆令啓達候、愈々無異珍重存候、――――如斯御座候、恐々謹言、

何某殿　　御一門名書、寄合並以上ハ二字名字、御用人以下ハ一字名字、

人々御中

御返事

御同人へ御納戸奉行・物頭已下直触ノ御役人ヨリ

但、右御役々、格式宜面々相勤候時ハ家格之通、

一筆致啓上候、　備前様愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、――――為可申上如此御座候、此旨宜御披露頼存候、恐惶謹言、

従　備前様御書拝見仕候、――――此旨宜御披露頼存候、恐々（ママ）、

役人ノ内

何某殿

御同人ヨリ右ノ面々へ

一筆令啓候、弥無異儀珍重ノ事候、――――如此候、恐々謹言、

芳札令披見候、――――恐々、

何某殿　「五」（朱書）御船奉行以下ハ殿文字ニ朱書之通、

是ヨリ脇付ナシ、

御同人へ諸御役人並御馬廻・新御番諸士ヨリ

一筆致啓上候、　備前様愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、――――為可申上如斯御座候、御序ノ刻可然様御執成頼存候、恐惶謹言、

従　備前様被成下御書拝見仕候、――――恐惶、

近習役ノ内

何某様

人々御中

御同人ヨリ右之面々へ

一筆令申候、弥無異珍重ノ事候、――――如此候、謹言、

芳札令披閲候、――――恐々、

何某殿

御歩行格式ハ直状ニ不及候、

右之通、天明五巳九月廿八日、比志島要人（範章）殿御取次ヲ以被仰渡、

三二四四

一玄蕃（島津貫備）殿・壮之介殿・兵庫殿ヘ拝領ノ御目録折紙ノ儀、

屹立候節ハ引合紙、軽キ事ニハ大奉書可用候、此節壮之介殿元服ハ為屹立御祝ニ候間、引合相調筈ニ候、中剃刀・紐直ノ祝モ有之筈候、右体ノ節ハ御目録ハ大奉書可相用候、

一御家中ヘ被下候御目録モ屹立候節ハ大奉書・中奉書夫々ノ格ニ応シ可相用候、例ノ軽キ事ニハ可為杉原紙候、

一寺院ナトニモ屹拝領被仰付候御目録ハ、大奉書・中奉書夫々ノ格ニ応シ可相用旨被仰渡、

元文五年申正月廿七日

三二四五

一御太刀進上ノ節、御太刀一腰・御馬一疋ト御目録ニ書認候モ有之、又ハ御太刀一腰・青銅百疋ト書候モ有之候、向後御太刀進上仕候程ノ者ハ都テ御太刀一腰・御馬一疋ト御目録ニ書調、御馬代ノ儀ハ御定之通可相調旨被仰渡、

元文二年巳四月十九日　　主計（樺山久初）

途中式対定

三二四六

一琉球王子御当地ヘ参勤於途中、兵庫殿・周防殿・小源太殿被為逢候節ハ、下馬下乗ノ筈候、勿論王子モ致下乗下馬、式対可有之候、

一大御目付以上御役人並独礼ノ方ニモ下乗下馬可有之候、王子モ下乗可有之候、

一右以下手鑓為持候人ヘ被行逢候時ハ、乗物ヲ居不及下乗、式礼可有之候、

一手鑓不持人致礼候時ハ、乗物ノ戸ヲ明、致式対可被相通候、以上、

辰五月　正徳二年

三二四七

乗馬・乗輿其外途中式対定

安永格

一備前殿・兵庫殿・因幡殿・若狭殿・玄蕃殿事、大御目付格已上ノ御役並独礼ノ面々ヘハ下馬下乗可有之候、其外ヘハ下馬下乗ニ及間敷候、組頭・御番頭・一所持格・寄合・寄合並ノ内、依人体ハ或乗物ヲ居、馬ヲ留、式対被致儀モ有之候、右外士ト相見ヘ候ハヽ、乗輿ノ戸ヲ明、馬上ニテモ自身可有式対候、

一大御目付格已上ノ御役ヨリ(ハ)鑓為持候御役格ノ者ヘハ可致下馬下乗候、鑓不持格ノ者ヘハ仮向ヨリ致下馬候トモ下馬下乗致間敷候、

一大身分・独礼格ヘ馬上・乗輿ニテ行合候節ハ、互ニ下乗ニ不及、式対可有之候、向歩行ニテ候ハヽ、勿論下馬下乗可有之候、

一大身分並独礼ノ面々、鑓為持候御役格又ハ鑓不為持候テモ、近付ノ内屹ト御役相勤候(之)者ヘハ可致下馬下乗候、其外小役人・御歩行ノ格ニハ下馬下乗ニ不及候、大御目付格已上ノ御役人ヘハ、馬上・乗輿ニテ行逢候節ハ互ニ下馬下乗ニ不及、可有式対候、尤、向歩行ニテ候ハヽ、可有下馬下乗候、

一寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭・寄合・寄合並已上並御近習役已上之御役人ヘハ可致下馬候、其外近付ノ士ヘハ致挨拶、下馬ニ不及候、向(ニ)ヨリ心入ヲ以下馬、勝手次第ニ候、

一備前殿已下右四人ハ格別候条、不依誰人、何時ニテモ下馬下乗可有之候、

一御当地士中雨天ノ節、重御役々面々行逢候節ハ、木履ヲ抜致式対者モ間々有之候、向後互ニ木履ニテ行逢候節ハ、軽キ方ヨリ木履抜候テ式対ニハ及間敷候、格別ニ重ク取持申筈ノ面々草履ニテ参候節ハ勿論木履抜可申、自分等輩ニハ草履・木履ノ無構、行掛ニ致式対可被通候、此式対ノ儀ハ、雨天ニ木履抜候テハ不自由成節モ有之候ニ付、右之通被相定候、

一誰人ニテモ、其身ノ格式ニテ無之様子ニ軽クイタシ行候儀有之候ハヽ、行逢ノ者ヨリ不致式対罷通候テモ不

苦候、

右式対ノ儀ハ先年被定置候、其内寺社奉行ヨリ御近習役以上並近付ノ士ヘ式対ノ儀マテ此節被相改候旨被仰渡、

安永二年巳六月二日

三二四八

一足軽ノ儀、士ヘ対シ麁礼等致間敷儀ハ段々申渡有之事候処、　御城内其外ニテ士ヘ行逢候節、麁礼又ハ不埒ノ体ニテ罷通者モ有之段相聞得、甚以不届ノ至候条、以来ハ兼テ存候人ヘハ相当ノ式礼イタシ、不存人ニテモ士ト見受候ハ、慇懃ノ体ニテ罷通、込合ノ節ハ行当ニ不相成様扣居、惣テ士・足軽ノ差別相分候様厳敷可申付候、就中定番（走カ）ノ儀ハ年若者而已ニテ候間、猶又不取違様ニ可申付旨被仰渡、

但、奥付足軽・座付ノ者トモ式礼ニ準、

安永七戌五月

三二四九

一大目付以上、御一門方ヘ参合候節ハ、下馬下乗可致候、

一大身分之者・大目付以上、互ニ馬ニテ候ハ、馬上ノ辞儀、馬駕ノ行合モ互ニ下馬下乗ニ不及、行成ノ辞儀、

一大御番頭ヨリ御側役マテ

一無役ノ寄合並以上

右、馬上ニテ大目付以上ヘ参合候節ハ下馬ニ不及、応身分、馬上行成又ハ馬ヲ留、辞儀有之筈、

但、略供ヤツレ等ノ節ハ辞儀ニ不及候、

一着座ノ門首ヘ下馬下乗可致候、

但、諸門中寺院ヘハ辞儀ニ不及候、

右之通可相心得候、此段致通達候、

天明六午五月　　伊賀（島津久金）

三二五〇

一御家老、年頭・節句日・御法事詰・釈菜其外屹立候勤方ノ節、乗輿・本行列、　御代参勤ノ節ハ片挟箱乗馬率カセ候様可致候、年頭外ハ御家老先供三人召列候様可致候、

一若年寄・大目付、年頭・節句日・御法事詰其外屹立候勤方ノ節、乗輿・本行列、年頭外ハ先供両人被召列候様可有之候、途中辞儀等ノ儀ハ平日ニ定置候通、右之通申談候間、致通達候旨、伊賀殿（島津久金）ヨリ被仰渡、

天明六午五月十六日

三二五一

一大目付已上日勤、当分ノ行列ニテ手鑓立サセ、家来二人駕籠前ニ次出可召列候、

一大目付以上ヘ御側役以上参逢候ハヽ、ヲノツカラ互ニ可有会釈候、尤、馬ヲ扣、厚会釈等ハ夫々可応御役柄身分候、

但、歩行ニテ参逢候ハヽ、下乗可有之候、

一無役ノ寄合並已上ノ儀モ家格行列ニテ参逢候ハヽ、右同断互ニ可有会釈候、

一御留守居已下ノ諸御役人並諸士、右同断参逢候節不及辞儀候条、不敬無之様（列ニ）〈相〉心得可罷通候、

一本行列ニテ通行ノ節モ右同断可相心得候、

右之通被仰付候段被仰渡候、

天明六午五月十六日　伊賀

三二五二

一御領国中ノ面々着笠相用候様、先達テ被仰渡置候、右ニ付、直触以下ヘ途中ニテ参合候節、向ヨリ着笠抜候テモ、寺社奉行ヨリ御近習役並マテ、無役ノ寄合並マテハ、抜候テ式対ニ不及候、尤、寺社奉行ヨリ以下直触ノ面々ハ互ニ着笠着イタシ可致式対候、且又直触以下ノ御役ニテモ依人体、着笠抜候テ式対有之候儀ハ人々心入次第可有之候旨被仰渡、

安永二巳五月廿三日

三二五三

一大御目付御役以上、馬上ニテ通行ノ節、諸士ノ内ニモ間ニハ不致式礼罷通者モ有之、乗輿ノ節同様ニ相考候者モ可有之候間、向後右体取違無之様可申渡候、

一諸郷士、途中ニテ右（列御）〈役〉以上参合候ハヽ、慇懃致式礼可罷通候、致無礼罷通候者ハ、家来又ハ用達ヲ以名元承届、支配頭ヘ可相達候、其外鑓為持候程ノ御役人ヘ

ハ都テ致式礼罷通候様、諸郷ヘ可申渡候、尤、郷士身分ニテ書役・小役人ノ致勤方候者、諸士同様可有之候、

一家来以下町・浜・寺門前ノ者トモ、途中ニテ右同断参合候ハヽ、随分慇懃ニ致式礼罷通候様可申渡(ヲ)候、乍其上不都合ノ儀モ候ハヽ、前条同断名元承届、支配頭(竹カ)へ可申達候、尤、鑓為持候御役人ハ致式礼罷通、其外御役人ハ勿論、士ハ行逢候節ハ、兼テ不存向ニテモ相慎可罷通候、且又雨天ノ節ハ先年度々被仰渡置候通ニ相心得罷在候様可申渡候、

一町家ノ者、店先ヘ不敬成体ニテ罷在候者モ有之候付、御役人ハ勿論、士ト見受候ハヽ慇懃成体ニテ罷在候様ニ稠敷可申渡候、横目中ヘモ、右体不敬ノ者見当次第相咎目、申分ニ依テハ名元承届、御目付ヘ可申出旨申付候、

一御城内供帰ノ節、家来ハ半股立、中間以下ハ致供候姿ノ儘ニテ下馬先マテモ致往来候、頃日間ニハ御門辺ヨリ股立卸シ致往来候者モ有之由候、右体ノ者見当候ハヽ、御門番並立番ヨリ主人名元承届、御目付ヘ可申出候、尤、家来・中間等御城内外ニテ御役人ハ勿論、士ト見受候ハヽ、不敬ノ体無之様、主人ヨリ稠敷申付候様可申渡候、

一町中ヘ致中宿居候者、鍔入脇差一切不相用様ニトノ儀ハ先年モ申渡有之候ヘトモ、于今不相用者モ有之由候間、鍔入御免外ノ町人同前相心得、長一尺マテノ合口帯シ候様可申渡候、

但、郷士以下ニテモ町人ノ家業不致者ハ、有来通可有之候、

右之通、前々ヨリ段々被仰渡置候ヘトモ、程過候ヘハ大形ニ成行候間、主人並支配頭ヨリ屹ト相守候様可被申渡旨可申渡候、

天明七未五月　　大御目付

三二五四

一御役人町内通路ノ節、慇懃ニ可致式対候、且諸士通路ノ節モ店等ニ腰ヲ掛、足ヲ出シ、其外無作法ノ為体ニテ罷居間敷候、途中ニテモ相慎可罷通候、且又町中ヘ致中宿居候者トモ鍔入脇差一切不相用、平町人同前一尺マテノ合口帯候様、町奉行ヨリ町中ヘ申渡候条、右

之趣屹ト相守候様、尚又支配頭・主人ヨリ可申付旨被仰渡、

安永八亥六月

但、町家ノ職不致者ハ有来通候、

三二五五

一近来ハ人体不相応ノ長脇指ヲ帯、或ハ士行逢候節麁礼ノ者モ有之由、不届ニ候、右式無之様、与頭又ハ支配前ヨリ可申渡旨、口達覚書ヲ以被仰渡候、

安永八亥六月十九日

三二五六

一此節町人鍔入脇指停止ニ付、合口不持合者、拵方不相済内ハ無刀申付候、

一他国使者等ノ節、宿主・用聞並給仕ノ者、以前之通鍔入一尺三寸マテノ脇指可帯候、上使ノ節御用相勉、尤、外城ヘ差越候者モ同前申付候旨被仰渡、

安永八亥六月廿三日　（小松清香）帯刀

三二五七

一百姓トモ山指帯候儀停止ノ事候処、頃日近名ノ者トモ、間ニハ脇指帯候者モ有之由候条、稠敷可申付候、相背候者ハ脇指取揚、其段可申出旨、郡奉行ヘ被仰渡候、

安永八亥六月十九日

但、浦人・野町人ノ儀モ同断、御船奉行・郡奉行被仰渡、尤、　御上下ノ節、人馬立頭主取ノ儀ハ有来通、

三二五八（の1）

一町人トモ鍔入長脇指帯ノ儀、前々ヨリ御法度候処、頃日緩セノ聞得有之、此節ヨリ年寄・年行司ノ儀ハ勤内ハ勿論、退役ニテモ長一尺八寸ヨリ内ノ脇指可帯之、平町人トモハ合口可相用旨相定、町奉行ヨリ申渡有之候事、

安永亥六月

（三二五八の2）

本文ニ付、町奉行ヨリ被申出趣有之、名頭マテハ一尺三四寸マテノ脇指帯候儀令免許、平町人ハ先達テ申渡

置候通、猶又無相違様屹ト可申渡置旨、町奉行へ可申渡候、

天明三卯正月　　仲（島津久健）

三二五九

一道筋罷通候者ハ互ニ本道相迦シ可被通候、右側ニ相迦シ候テハ何ソ俄ニ込合候節、行当旁差支事候条、兼々右之趣人々可相心得候、

一御領国中ノ面々日笠用来候ヘトモ、狭小路持（抔カ）行当旁ニ付相障事候条、都テ着笠可着候、乍然依人体、軽キ者トモ天気二様ニ有之、着笠難相済ト存候節、日笠相用候儀ハ御免被仰付候旨被仰渡、

安永二巳五月十七日

三二六〇

一足軽・御中間・御小者並家来ノ者、其外以下ノ者トモ、於中途御直士ニ行逢候節、雨天ニテ木履踏ナカラ礼イタシ罷通候者モ間々有之、無礼ノ至候、向後御直士ニ行逢候節、鑓為持候人体ニハ木履ヲ抜、慇懃ニ致礼可罷通候、其外ニテモ近付ノ士ニハ木履ヲ可抜候、近付ニテ無之候テモ士ト見受候ハヽ、相慎可罷通旨、先年被仰渡置候処、緩セニ相成候、此以後違背ノ者可及沙汰、且夜行・辻歌ノ儀モ兼テ御禁止候（之カ）処、不相守ノ聞得モ有之、不届ノ至リ候、以後右体ノ者候ハヽ、屹ト可申付候旨被仰渡、

明和七寅五月

三二六一

一御代参被相勤候面々、中途礼儀ナシニ　御名代勤ノ由相断被罷通候、　御代参勤ニ付テ中途ノ礼儀ニ付、川上久馬ヨリ申渡置候趣有之候ヘ共、　御代参ノ儀ハ御霊前ノ勤ニ候間、座席等ノ儀ハ当分ノ通ニテ、中途又ハ座敷ニテ礼儀ノ儀ハ平日ノ通可被致旨、元文元辰九月主殿（島津久貫）殿ヨリ被仰渡置候、此節猶又右之通可相心得旨被仰渡、

宝暦九卯八月

三二六二

一鹿児島並諸郷ノ博労トモ馬サシ〈方イタス事候ヘトモ、
依馬ハ猶又鞍付乗足等モ可試事ニテ、場内ハ勿論、諸
所乗アルキ候儀、家業ノ儀候故被差免候、
一諸家ノ乗馬ヲ家来トモ乗廻候儀被差免候、重御役ハ勿
論、近付ノ諸士ニ行逢候節可致下馬、往来余多ノ儀故、
近付ニテ無之向ヘハ乗馬ナカラ不敬無之様、其外通路
ノ障リニ相成候カ、右類其身ヨリ気不相付節ハ、ヲノ
ツカラ先方ヨリ申聞儀モ可有之、其節ハ致下馬可罷通
候、往還筋ノ儀ハ何方トテモ同断ニ相心得、聊往来ノ
サマタケニ不相成様堅可被申付候、
右之通、大身分以上ノ向ヘ可相達候、
別紙二通之通、此節若年寄ヨリ被申渡候、依之若於中
途不都合ノ儀トモ有之、年若キ面々心得違ニテ万一打
擲等ニモ及候テハ別テ如何敷候条、不束ノ儀トモ有之
節ハ、其主人又ハ可申出向々ヘ其訳申出候様可致候、
此段親兄弟・身近面々ヨリ委曲可申聞置候、
右之通、諸向（郷）ヘ不洩様可致通達候、
寛政六丑（マヽ）四月　（伊勢貞矩）播磨

（市田教国）勘解由

三二六三

一御役人其外登　城ノ節、　御城内又ハ於下馬先、家来
下人、間ニハ致麁礼者モ有之由、右ニ付テハ先達テ被
仰渡置趣モ候処、兼テ主人ヨリ申付様大形ノ筋ニ候条、
猶又厳敷申付、供帰リ等ノ節、　御城内・下馬先マテ
モ、家来ハ半股立、中間以下ハ致供候姿ノ儘ニテ致往
来候様可申付旨被仰渡、
安永八亥二月十六日

三二六四

一士中、雨天ノ節、重御役々（之）面々ヘ行逢候節、互ニ木履
ニテ行逢候者ハ軽キ方ヨリ木履抜候テ式対ニハ不及旨、
先年申渡有之候、然処重キ方草履、軽キ方木履ニテ行
逢候テモ、其儘ニテ致式対候向モ相見ヘ、不都合ノ至
候、向後屹ト木履ヲ抜可致式対候、若其儀難相調時宜
ハ致挨拶可罷通候、等輩ノ儀モ双方同様無之節ハ致挨
拶可罷通候、

一足軽・御口ノ者・御小人其外已下ノ者トモ御直士ニ行逢候節、鑓為持候人体ニハ必木履ヲ抜、慇懃ニ致礼可罷通候、其外ニテモ近付ノ士ニハ木履ヲ可抜、近付ニテ無之候テモ士ト見受候ハヽ相慎可罷通旨、是又先年申渡有之候、且御役人ハ勿論、対士致麁礼間敷趣ハ毎度申渡置候処、頃日間ニハ致無礼者モ有之候段相聞ヘ、別テ如何ノ至候条、前件申渡ノ趣緩セ不相成様、頭人・主人ヨリ屹ト可被申付候、

右之趣、向々ヘ不洩様可申渡候、

寛政九巳九月　（高橋種央）縫殿

三二六五

口達之覚

一大番頭以下無役大身分、馬上ニテ登　城ノ節、御作事奉行・諸役人行逢候節過半挨拶無之、馬上ナカラ行成ニ式礼ヲ受罷通候人有之、尤、右諸御役人ヨリ挨拶不致内、右通行ナリ馬上ヨリ致挨拶罷通候向モ有之、勿論御格之通致下馬罷通候人モ稀ニハ有之、不相並候、

右通　御城下近辺ニテ行逢候節ハ、馬ヲトメラレ候ハヽ、御作事奉行已下諸役人差寄、必致挨拶候様相心得可居候、右ニ応シ挨拶有之被致通行候様、互ニ心入ヲ以致右通候様可被相心得候、此旨無屹寄々致通達候様致承知候、以上、

天明八申六月十三日　　御目付

三二六六

一御領国ニテ直勤・倍（暗）臣ノ辞儀体、依事ハ相分ケ兼候向モ候間、以来倍臣ノ儀左之趣心得可申、就中御側役以上ハ御役柄モ相替事ニ候、致辞儀候振合、縦ハ行掛前以横向ニ相成蹲居、通掛リノ節可致辞儀候、先方馬上・歩行等ハ勿論、乗輿等ニ候ハヽ、ヲノツカラ戸ヲ引候テ可有会釈候、其以下モ右ニ準シ応夫々可致辞儀候、中間・小者等ハ辞儀ノ沙汰不及、行成蹲居可申候、道具・挟箱等持居候者之辞儀ハ、行掛ニ横向ニ相成、其品ヲ前ニ立罷在事ニ候、

右ノ心得ヲ以、夫々主人ヨリ被申付置候様、御目付ヨリ可致通達候、

天明七年未八月　（島津久邦）和泉

三二六七

一御領国ノ者トモ、高下尊卑ノ差別・礼讓等ノ儀ニ付テハ、先年已来段々被仰渡趣モ有之候ニ付、屹ト其詮相立候様可心掛候、大目付以上乗輿・馬上等ニテ通行ノ節、郷士トモ途中ニテ参逢候ハヽ、慇懃ニ致式礼罷通、其外鑓為持候御役人ヘモ屹ト可致式礼旨、当五月申渡置候処、今以弁薄不敬ノ者モ有之由相聞得、別テ如何ノ事候、畢竟諸役々申渡不行届筋ニ相見ヘ不可然事候条、以来取違無之様、尚又屹ト可申渡候、且又家来並寺社門前・在郷・町・浜人等大目付御役以上ヘ参掛候節ハ、七八間ヨリ通脇ヘ相片付、笠・カフリモノ・鉢巻類ハ取候テ致平伏居、雨天ニテ候ハヽ、下駄ヲ抜キ、馬率居候者ハ口縄短ク取、振売体ノ者ハ同断荷物卸置候様、所役々ヨリ稠敷申聞セ可置候、就中（列近郷）近在ノ者トモ日々稼方ニ付　御城下筋馬率越候折、御役柄ノ人ヘ参掛候節、甚不埒ノ体ニテ往来妨ニ相成候間、是又前文ノ趣ヲ以、郡奉行ヨリ委ク可申渡候、　中略、乍此上大形ノ聞得モ候ハヽ、所役々可為越度候条、此旨地頭・領主又ハ大番頭・郡奉行ヘ申渡、支配有之面々ヘモ可申渡候、

天明七未十二月　　大目付
　　取次　土師孫太夫

三二六八

正徳格　式対定之事

正徳二年辰五月

一兵庫殿・周防殿・小源太殿事、大目付以上ノ御役並独礼ノ面々ヘハ下馬下乗可有之候、其以下ヘハ下馬下乗ニ及間敷候、与頭・御番頭格ノ内、依人体ハ或乗物ヲ居、或馬ヲ留、被致式対儀モ可有之候、右之外士ト相見ヘ候ハヽ、乗物ノ戸ヲ明、馬上ニテモ自身式対可有之候、

一大御目付以上ノ御役ヨリハ、鑓為持候御役格ノ者ヘハ可致下馬下乗候、鑓不為持格ノ者ヘハ、縦向ヨリ致下馬候トモ下乗下馬ニ及間敷候、大身分・独礼格、馬上・乗輿ニテ行合候節ハ、互ニ下馬下乗ニ不及、式対可有之候、向歩行ニテ候ハヽ、勿論下馬下乗可有之候、

一大身分並独礼ノ面々ハ、鑓為持候御役格又ハ鑓不為持

候テモ、近付ノ内急度御役相勤候者ヘハ可致下馬下乗、
其外小役人・御歩行ノ格ヘハ下馬下乗ニ不及候、大御
目付以上ノ御役人ヘハ、馬上・乗輿ニテ行合候節ハ、
互ニ下馬下乗ニ不及可有式対候、尤、向歩行ニテ候ハ、
勿論下馬下乗可有之候、
一寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭・御用人以下ハ、
不依高下、近付ノ士ヘハ可致下馬候、双方馬上ニテ候
ハ、互ニ下馬ニ不及候、大御目付以上ノ御役人ニハ何
時モ可致下馬候、
一兵庫殿・周防殿・小源太殿ハ格別候条、不依誰人、何
時モ下馬下乗可有之候、
一御当地士中、雨天ノ節、重御役ノ面々ヘ行合候節、木
履ヲ抜致式対者モ間々有之候、向後互ニ木履ニテ行合
候節ハ軽キ方ヨリ木履抜候テ式対ニハ及間敷候、格別
重ク取持申筈ノ面々草履ニテ参候時ハ勿論木履抜可申、
自分等輩ニハ草履・木履ノ無構、行懸ニ致式対可罷通
候、此式対ノ儀ハ雨天木履抜候テハ不自由成節モ有之
候付テ、右之通被相定候、
一誰人ニテモ、其身其格式ニテ無之様子ニ軽クイタシ行
候儀有之候ハヽ、行合候者ヨリ不致式対候テモ不苦候、
右之通被仰渡(ヲ)候、

正徳二辰五月　　取次　相良権太夫

三二六九

一御名代参候節、途中互ノ礼儀ニ付、下馬下乗ニハ及間
敷候、其理申達可被罷通候、右之勤相済被罷帰候時分
ハ、人体相応ノ心得ヲ以可有礼儀旨被仰渡、

享保八年卯五月

三二七〇

一足軽・御中間・御小者並家中者其外已下ノ者トモ於途
中御直士ニ行逢候節、雨天ニテ木履踏ナカラ致礼罷通
候者モ有之由、無礼ノ至候、向後直士ニ行逢候節、鑓
為持候人体ニハ必木履ヲ抜、慇懃ニ致礼可罷通候、其
外ニテモ近付ノ士ニハ木履(履カ)ヲ抜候、近付ニテ無之候
テモ、士ト見受候ハヽ、相憤(相憤カ)レス可罷通旨、先年被仰
渡置候処、緩セ相成、間ニハ致無礼罷通者モ有之由相
聞ヘ候、此已後違背ノ者於有之者可及沙汰候、且又夜

行・辻歌ノ儀モ兼テ御禁止被仰渡置候処、是又頃日夜行・辻歌或ハ身分不相応ノ致行跡、其外不成合又ハ不宜聞ヘモ有之、不届ノ至ニ候、此已後右体ノ者モ候ハヽ、屹ト可申付候、

右之通相守候様、支配頭・主人ヨリ稠敷可申付旨、与中・支配中ヘ不洩様可申渡候、

明和七年寅五月廿四日　（小松清香）帯刀

（三二六〇号文書に同じ）

三二七一

落穂集

一諸侍、重御役々（列方）ヘ参合、雨天ノ節下駄ヲ抜候由、重役衆草履ノ節候ハヽ、尤、左モ可有之事ニ候ヘトモ、互ニ下駄ニテ候ハヽ、抜間敷旨被仰渡候処ニ、其後我等同役肝付五郎兵衛殿、帯刀殿ヘ参合、下駄ヲ抜御礼被申上候ヘハ、押付勉場ヘ以与力近キ頃為被仰渡儀ニテ、御目付役ニテハ人ノ上ヲモ可申所ニイカヽノ儀候間、向後ケ様ノ儀無之様ニ可心掛由被仰聞、我々同席中マテ御尤ノ由為申上儀有之候、以上、

三二七二

文化七年八月、従大目付衆

一町人其外下人類・寺門前者ノ内、長脇差ヲ帯シ異様ノ為体ニテ致徘徊、又ハ士已上ヘ対シ麁礼イタス間敷トノ趣ハ、先年已来厳敷申渡置候処、到頃日、間ニハ不守ノ者モ有之段相聞得、就中近頃町家ニテ座頭ノ歌ヲウタヒ、多人数相集、身分不成合ノ聞ヘモ有之、重畳不届ノ至候、末々ノ者不敬無之様ニトノ儀ハ、猶又此節分テ被　仰出趣モ有之候ニ付、聊以不致忘却、屹ト可相慎候、右ニ付テハ見聞役ヲモ掛置候条、乍此上右体ノ者見当候者名元承届、帯居候脇差ハ取揚申付、尤、不敬ノ者ハ屹ト咎目可申付候、

一近在諸郷百姓其外ノ者共荷負馬引越候節、繋場被相定、秋取納中ハ格別、其外二疋已上引続候儀不相成趣、先年已来申渡有之候処、到頃日、猥ニ小路ヘ馬ヲ繋、往還ノ妨相成候者モ有之段相聞ヘ、甚不埒ノ至候条、向後右体ノ儀堅令停止候、

右之通、支配頭並主人ヨリ可申渡候、

文化七年午八月十六日　川上右近（久芳）

但、大目付ニテ、

三二七三

一大目付已上、日勤乗物モ(初ニテ)手鑓立サセ登　城有之来候ヘトモ、御倹約中ニ付乗物台輪・駕籠勝手次第被仰付候、尤、当時日勤台輪・駕籠ニテ候ヘトモ、乗物ノ場御倹約ニ付右之通ニテ、殊ニ屹出勤ノ事候間、手鑓立サセ致出勤、外々ヘ屹相越候節ハ、日勤同様可有之旨被仰出候付、途中式対ノ儀ハ先年申渡有之候節之通可被相心得候、且シノヒ又ハ見廻先キノ向ニヨリ時宜次第手鑓伏サセ候間、其折ハ式対ニ不及候条、此旨向々ヘ不洩様可申渡候、

文化八年未閏二月　安房(島津久備)　信濃(頴娃久喬)

見舞之節送迎之次第

三二七四

一△――御一門家ヘ見舞ノ人有之、出迎ノ儀、左之通、

一大身分・御家老・若御年寄、何ソ屹ト立候節計、着座之次マテ出迎可被致候、其外出迎ニ不及候、

一△――御一門家之所ヘ見廻ノ人罷通候節、被相送候次第、左之通、

一大身分・御家老ノ儀ハ使者之間マテ可被相送候、若御年寄以下大御目付格ハ着座ノ席次ノ間マテ可被相送候、無役ノ一所持以下寄合マテハ座内ニテ見計可被致式対候、寄合並ヨリ諸士マテ着座ノ所ニテ式対可被致候、尤、依役柄ハ心入モ可有之候、

一御一門ノ式台ヘ向後取次ノ者上下着用ニテ出張居、見廻ノ人有之節ハ左之通、

一大御目付格已上見廻ノ節ハ、案内無之トテモ直ニ薄ヘリヘ出迎可致取次候、罷通候人帰候節モ出迎ノ所マテ可相送候、一所持ヨリ寄合マテハ板之間マテ出迎可致取次候、帰候節モ同断可相心得候、

一寄合並・直触以上ノ人ヘハ拭縁ニテ致取次、帰候節モ同断ノ所マテ可相送候、

一御普請奉行以下無役ノ諸士見廻ノ節ハ玄喚座内ニテ致取次、帰ノ節ハ拭縁マテ可相送候、

一使者ノ者差越候節ハ右ノ応格式、同断可相心得候、

一大身分ノ所へ見廻候人出迎ノ儀、左之通、

一御家老以下無役ノ一所持格、何ソ屹立候節、使者ノ間上マテ出迎、寄合・寄合並右ニ準シ候、御役人限着座ノ次ノ間マテ出迎、御留守居以下直触以上座内ニテ可致式対、御普請奉行以下無役ノ諸士マテ座内ニテ右ニ準シ可致式対候、

一大身分ノ所へ見舞ノ人、罷通罷帰候節相送候次第、左之通、

一大目付格以上見廻ニテ被罷帰候節ハ、玄喚板ノ間マテ可被相送候、

一寺社奉行以下無役ノ寄合マテ右同断ノ節ハ、拭縁マテ可相送候、

一寄合並以下直触マテハ着座ノ所ヨリ次之間マテ可相送候、御普請奉行以下諸士ノ儀ハ座内ニテ式対可被致候、

一大目付格以上ノ所へ見廻候人有之節モ大身分仕向ニ準可相心得候、

一大身分ノ面々式台へ取次ノ者肩衣不及着、出張居見廻ノ人有之節ハ左之通、

一御一門家見廻ノ節、地幅内マテ取次ノ者早々罷出、帰ノ節ハ猶又最初出迎ノ所ヨリ相進ミ可罷通候、大身分以下ノ取次ノ者都テ右ノ振合可相心得候、

一大目付格以上見廻ノ節ハ布石中程マテ出迎可致取次候、罷通候人帰ノ節モ同断可相送候、

一一所持以下寄合並直触以上ノ人見舞ノ節ハ、薄縁へ出迎可致取次候、帰ノ節ハ最初取次ノ所マテ可相送候、

一御普請奉行以下御役人限ハ拭縁ニテ致取次、帰候節ハ板之間マテ可相送候、

一諸士之儀ハ玄喚座内ニテ致取次、帰候節板之間マテ可相送候、

一一所持以下寄合並ノ所へ見舞候人有之節、送方左之通、

一御家老以下寄合格式ノ御役人マテ、相互ニ玄喚板ノ間マテ可相送候、

一寄合並以下直触ノ御役人マテ、見舞ノ節ハ拭縁マテ可相送候、御普請奉行以下無役ノ諸士ハ座内ニテ可致式対候、

一一所持以下寄合ノ所へ見廻ノ人有之出迎ノ儀、左之通、

一大御目付格已上ハ使者ノ間末マテ出迎、一所持格以下寄合並マテ相互ニ使者ノ間マテ出迎、大御目付格已上

相勤候者ノ儀、無役ノ一所持・寄合並マテ屹立候節使者ノ間マテ出迎可致、寄合並以下直触以上着座次ノ間マテ出迎、御普請奉行已下無役ノ諸士マテ座内ニテ可致式対候、

一一所持以下寄合並マテ取次ノ者出迎ノ儀、左之通、

一大目付格已上見廻ノ節ハ、布石中程ヨリ門涯ノ方ヘ取次ノ者罷出可致取次候、帰ノ節モ同断可相心得候、

一直触以上ノ御役人見廻ノ節ハ薄縁ニテ致取次、帰ノ節モ同断可相心得候、

一御普請奉行以下御役人ヘハ板之間ニテ致取次、帰ノ節モ板之間マテ可相送候、

一諸士ノ儀ハ玄喚座内ニテ致取次、帰候節ハ板ノ間マテ可相送候、

一門番所ヘ番人差置候程ノ人所ヘ士以上見廻、門鎖居候節ハ大戸相開キ可差通候、家中ノ儀ハ小門ヨリ出入申付候、

一大身分・一所持・一所持格ヘ御一門見廻ノ節、板ノ間マテ亭主出迎、帰ノ節薄縁マテ可相送候、

一寄合ヘ御一門見舞ノ節、亭主薄縁ヘ出迎、帰ノ節布石マテ可相送候、

一寄合並以下諸士マテヘ御一門家見廻並大身分見廻ノ節、門涯マテ亭主出迎案内、帰候節モ同断ノ所マテ可相送候、

一御一門家ヨリ使者被遣候節御受答、左之通、

一大身分・御家老・大御目付格・一所持マテヘ御一門家ヨリ役人使者被遣候ハヽ可致直答候、役人以下番頭已上ノ使者ニ候ハヽ、役人ヲ以御返答可申達候、番頭以下ノ使者ニ候ハヽ、用人ヲ以返答可申達候、

一大御目付格已上ヘ御役ニ付テ使者被遣候節ハ右之沙汰ニ不及候、

一寄合並御役人限ニ御一門家ヨリ使者被遣候ハヽ、役人ヲ以御返答可申達候、御一門家ノ使者役人格ノ者ニテ候ハヽ、直答可致候、

一寄合並以下ノ諸士ノ儀ハ、御使者柄ニ無構、何時ニテモ可致直答候、

右之通、格式被究置候ヘトモ、多人数出入ノ儀ハ不行届儀モ可有之候ヘトモ、人々右之通可相心得候、兼テ門番不差置候者トモノ儀モ右同断ノ振合ニ相心得候様、

家来末々へ者可申付置候、

安永二年巳五月廿九日

但、上下略、

三二七五

一大御目付格以上、年頭・節句計乗輿被仰付候、寄合以上ハ、御一門ノ所ヲ初、同輩相互ニ馬・駕籠ニテ見舞ノ節、門々ノ地幅マテ乗掛、下馬下乗可致候旨被仰渡、

同年巳五月廿九日

三二七六

一歳暮・年頭・暑寒・諸節句、大御目付格以上ノ御役人宅へ御役人・諸士並寺院見廻ニ付、右為礼、人ニヨリ見廻又ハ使遣事候へトモ、御役ニ付テ見舞ノ事候間、見廻又ハ使遣候儀無用可致候、御役人又ハ無役ノ者ニテモ無拠間柄訳有之、祝儀見廻候儀ハ格別ニ候、右外何ソニ付御礼見廻ノ節ハ、猶以御役付テノ儀候間、挨拶ニ不及候、且又琉球人上国ノ節、御家老宅へ首尾届等々見廻事ニ候、御役付テノ儀候間挨拶ニ不及候、尤、自分付届ノ品物遣候儀可成程無用可致候、無拠間柄ニテ不致付届候テ不叶節ハ格別ニ候へトモ、軽クイタシ可相済候、無拠間柄ニテ無之者へ心入ヲ以相贈候儀ハ勝手次第ニ候、

安永二年巳六月廿七日

三二七七

一歳暮・年頭・諸節句、大御目付御役人宅へ御役人・諸士見廻候ニ付、右為礼人ニヨリ見廻又ハ使ヲ遣事候へトモ、大御目付以上御役人ハ御役ニ付テ見廻申事候間、都テ見廻ノ礼又ハ使等遣候儀無用可致候、御役人又ハ無役ノ者ニテモ無拠間柄訳有之、祝儀見廻ノ儀ハ格別ニ候、右外何ソニ付御礼廻ノ節ハ、猶以御役ニ付テノ儀ニ候間挨拶ニ不及旨被仰渡、

寛保二年戌十二月廿七日

島津家歴代制度巻之四拾四

屋鋪定
借地屋鋪
高持御格式
切明屋鋪

屋敷定之事

三二七八

一御一門家、本屋敷一ヶ所・中屋鋪・下屋鋪二ヶ所、都合四ヶ所、此節被相定、当分屋敷数ヨリ相重致所持候人此内之通ニテ、已来ハ所持ノ屋鋪被相除、又ハ屋敷直之儀被申出候テモ右四ヶ所ノ外御免不被成候、居屋敷引続候屋敷買取、御物へ差上リ御借屋敷ニテ一囲御免被仰付来候へトモ、是又御借屋敷ニハ不仰付候、本屋敷差迫、無拠儀ニテ四ヶ所外添地ニテ一囲相円メ候儀、依願之訳御免可被成候、大身分・御家老、是モ有来候屋敷ハ当分ノ通ニテ、中屋敷・下屋敷、都合三ヶ所御免被仰付、右外御免被成間敷候、居屋敷引続候屋敷ハ右同断被仰付候、

一人柄役柄ニ無構、持高二千石以上致所持居候人、屋敷引迫、家来共召置候余地無之、依願之訳下屋鋪一ヶ所御免可被成候、

一若御年寄・大目附相勤候人、依願下屋敷一ヶ所ノ外ハ御免被成間敷▽㊀候、併居屋敷△手狭ニテ、父子勤方有之、家来等召置候余地無之、無拠差支候者ハ、依願訳者二ヶ所マテハ御免被仰付候、右外何様差支候トモ御免不被成候、居屋敷へ引続候屋敷ノ儀ハ同断被仰付候、

一寄合並以上・直触以上ノ御役相勤候人、只今マテハ右同断御借屋敷ニテ一囲ヒ御免被仰付来候へトモ、是又已来者□(添カ)地ニテ一囲御免被仰付候間、御借屋敷ノ名目相除、添地ト可相唱候、尤、願之節ハ委敷遂吟味、差支候程無拠相聞へ候ハヽ、依其趣御免被仰付候、

一御城下士ノ内、㊀何そ其依訳、御物ヨリ御借屋敷被仰付置候地面ノ儀ハ、御借地ト可相唱候、能々無拠訳筋無之者ハ御借地ハ被仰付間敷候、御借地ニテ罷居候者、屋敷トハ相唱間敷候、

一郷士並諸職人座付等御借地ニテ罷居者モ屋敷トハ唱間敷候、都テ御借地ト相唱、書付等ニモ可相認候、

一南泉院下大小路御借地ノ類モ右同断被仰付候間、御預地又ハ御借屋敷ナト、相唱間敷候、

一家々ニテ中屋敷ヲ本屋敷ト繰替、下屋敷ヲ中屋敷ニ相改候類ノ儀ハ勝手次第可有之候、尤、右屋敷ノ内、蔵屋敷・作事屋敷ナト、相唱候儀モ勝手次第可有之候ヘトモ、御勘定所帳面又ハ何ソニ付書付等ヲ以申出候節ハ、前例ノ通相心得候様被仰付候、

右之通被相定候条、当分自分ニ買取候屋敷御物ヘ差上、御借屋敷ノ名目相除、諸帳面添地ト可相改候、持高千石以下ニテ無役ノ人ハ、家格人柄等無構、千坪以上ノ屋敷ハ御免被成間敷候、当分持来候人ハ此内之通被仰付可然候、其外ノ儀ハ是迄ノ通相心得候様被仰付候旨、被仰渡候事、

天明三年卯五月

（喜入久福）主馬
（島津久健）仲

三二七九

一持留地又ハ持留屋敷ノ儀、已来抱地屋敷ト可相唱候、家来・家番等不召置田畠マテノ地面ハ持留高ト唱来候ヘトモ、是又抱地ト相改、仕向ノ儀ハ当分ノ通ニテ、向後左ノ通被相定候、

一抱屋敷ノ儀、持高ノ多少ニ不依、寄合並以上ハ二ヶ所、其外ハ一ヶ所ニ定置候、持来候分ハ其通ニテ被差置候、

一右抱屋敷ノ儀、御一門ヲ始御役柄又ハ依人体、御定ノ外無拠願ノ訳モ候ハ、其節ノ吟味次第可被仰付候、

一新規抱屋敷囲等致候節ハ願可申出候、御鷹場等ノ支於有之ハ藪屋敷等ニテ召置筋可被仰付候、

一居屋敷不致所持、抱屋敷其身居住ノ人ハ、依願之訳ハ御定ノ外一ヶ所御免可被仰（付脱カ）候、

一抱地ノ儀ハ是迄ノ通、御物ヘ不差障所ハ御免可被仰付候、囲ハ一切不相成候、竹木植ノ儀モ見分ノ上可差免候、併鹿児島近在ハ勿論、諸外城ニテモ、御挙場・御

鷹御鳥飼場等ノ儀ハ、御鳥見方見分ノ上、不差支候ハ、筋々ニ願出有之節吟味次第可被仰付候、

一郷士ノ儀ハ都テ御城下士同前ノ振合被仰付候ト被仰渡候、

右之通、天明四年辰閏正月、被仰渡、

三二八〇

一屋敷直ノ願申出候節、売渡買取候ト認来候ヘトモ、以来譲受又ハ繰替等ノ節ハ相対替ト可相認旨被仰渡、軽キ身分ノ者(ハ)ハ是迄ノ通可有之候、

天明五巳八月廿二日　(島津久金)伊賀

三二八一

一外城衆中二男三男又ハ外城中宿ノ座付二男三男、御奉公相勤候者トモヨリ先例ヲ以切明屋敷ノ願申出候ハ、、別立候以後切明屋敷ノ願御法様ノ通可申出候、家内部屋栖ニテ罷居候者トモ、屋敷致所持筈ニテ無之候処、此内ニハ不別立内切明屋敷ノ願申出、御免以後別立候故、乍一往部屋栖ニテ屋敷致所持候者モ有之、別テ不相応ノ事候、屋敷ハ知行高同然ノ事候処、部屋栖ヨリ願ヲ立候儀ハ御格式ニモ致相違、第一願ノ次第不宜候間、向後ハ其通可相心得候、此旨支配中並地頭所ヘ不洩様可申渡候、尤、切明屋敷願付テ首尾相掛リ諸座別立候訳モ承届、相シラヘ可申候、

右之通、支配頭・諸地頭・諸奉行ヘ可致通達候、以上、

享保五子十月　(島津久貫)内記

三二八二

一御城下士屋敷・座付屋敷・職人屋敷ヘ名子・下人等差置、窓ヲ明、見世ノ様ニイタシ、又ハ藪ヲホガシ、売物ヲ出シ候儀、以前ヨリ御法度候処、不宜仕形候条、此後右体ノ儀堅無用候、

一端々ヘハ軽売物無之候テハ小身者トモ用事不相調、且又往来ノ者不自由モ可有之候、依之今度方限相究候間、向後堅固ニ可相守候、

一後迫三本杉限　一鼓川御屋鋪限

一内ノ丸観音之下限　一城ケ谷入口限

一興国寺下草野五右衛門屋鋪限

一新上橋限　　一西田橋限
一高麗橋限　　一武橋限
右方限ノ内、窓ヲ明、藪ヲホカシ、致商買候儀、堅無用ニ候、乍然小路ヨリ不相見得様ニ内ニテ致家職、軽売物取ヤリイタシ候儀ハ不苦候、士屋敷ニテ致商買候儀不成合ノ事候間、少ニテモ小路ヨリ不相見得様ニ可仕候、
一右方限ノ外、本通筋ニテ候故、見世等出シ候儀無用ニ申渡候道筋、
一内ノ丸観音下ヨリ新納四郎左衛門屋敷限
一興国寺下草野五右衛門屋敷ヨリ税所弥五太夫屋敷先キ橋限
一城ケ谷入口ヨリ種子島十郎右衛門屋敷限
一新上橋ヨリ弟子丸兵橋屋敷限
一新上橋ヨリ内記屋敷限
一西田橋ヨリ町屋敷ハ格別、仁礼仲五右衛門屋敷脇道ヨリ高麗町松元勘之丞屋鋪限
一武橋ヨリ郷原金太夫屋敷限
右方限ノ外ニテ候ヘトモ、本通筋ニテ候間、見世等出候儀無用候、乍然御勘定所帳面ノ外、右地借地ノ屋敷々々士罷居、名子・下人等見セ出候儀、御勘定所ヘ相付其願申出候ハヽ、見分ノ上差免儀モ可有之候条、聊大形ニ存間敷候、
一右方限ノ内ニテ致商買候儀、前々ヨリ御免ノ者モ有之候ハヽ、御勘定所ヘ委細ノ訳可申出候、右段々方限ノ内ニテモ寺社門前ノ儀ハ有来通御構無之候、
右之通、堅固ニ可相守候、
右、御禁止ノ儀付テ以前ヨリ申渡委細無之候付テ、此節右通委被仰渡事候条、自今以後若違背ノ者有之候ハヽ、其者ハ勿論、主人屋敷主マテモ急度曲事可被仰付候条、此旨支配中ヘ不洩様可被申渡者也、

享保五子七月廿二日　　御家老座

三二八三

一御城下士、近名者勿論、外城ニ相掛リ候テモ、開地等致度所存ノ者ハ、取込拝借等有之候テモ御物ヘ不被差障場所者勝手次第御免ノ旨被仰渡、

安永三午六月

三二八四

一鹿児島諸所川溝筋屋敷洗崩候節ハ、屋敷主ヨリ御修補ノ願申出、見分ノ上御物修補申付来候ヘトモ、屋敷主ヨリ小破ノ節取繕置、乍其上大破ニ相成御物御修補願出候ハヽ、吟味ノ上諸入具並調夫ノ内、屋敷主ヨリモ差出候様申付候条、役々見分ノ節、屋敷主応所帯、員数相究申出、若纔トテモ差出候様(ヲ)難調人モ候ハヽ、其訳申出候様可被申渡、尤、入具ノ儀ハ御物御取替ヲ以御修補申付置、以後返銀可申付旨被仰渡、

明和四年亥十一月十日　藤馬(菱刈実詮)

三二八五

(三二八六号行間朱書)
一諸外城衆中並浦町・野町屋敷売買之儀付、去午九月委細被仰渡置候、然ハ割屋敷ノ願申出候テモ御免無之、当分ノ畦反ニテ売買御免被成候条、兼テ可被得其意旨弾正殿御差図ニテ候、以上、

享保十二未七月廿八日　大御支配所印
取次　宮之原甚(重行)太夫

三二八六

一外城衆中屋敷並浦町・野町屋敷売買被成御免候間、今度就大御支配相改候新屋敷帳相渡リ候、以後左之通相定候、

一衆中屋敷新帳相渡リ候ハヽ、於所写相渡(ヲ調)、嘱方ヘ差置、屋敷売候者ヨリ売証文嘱見届、屋敷相払候者取込拝借等無之候ハヽ、嘱致次書地頭ヘ差出、地頭承届可差免候条、嘱方ヘ差置候帳面相直シ、何月何日差免候段右帳面ヘ可書記置候、

但、取込拝借等有之候共返上方引立相成程ノ持高有之者ハ勿論、無高ニテモ屋敷受取候方ヨリ当人上納於難成ハ、自分引受可致上納ト申出書物差出候者ハ、是又可差免候、

一浦町屋敷ノ儀モ前条同断ニ仕置、売手買手並五人組中願書浦役人ヘ差出、売手取込拝借無之者候ハヽ、嘱・浦役人次書ヲ以地頭所ヘ差出、地頭所以奥(衍カ)書ヲ以御船手ヘ差出、御船奉行承届差免候段、証文ヲ以地頭ヘ可相達候条、地頭承届可申渡候、帳面ノ首尾方前条同断、

但、取込拝借上納方引当有之者ハ勿論、無之候テモ

当人ヨリ上納於難成ハ、屋敷受取候者ヨリ引受上納可仕旨書物差出候者ハ可差免候、

一野町屋敷ノ儀前条同断、売手・買手・五人組中願書町役人へ差出、売候者取込拝借無之者候ハヽ、曖・町役人次書ヲ以地頭へ可相達候条、地頭承届可申渡候、帳面ノ首尾方前条同断、

但書同断、

一互ニ屋敷替イタシ候者モ右同断ノ首尾可仕候、

一外城衆中高百石以上ハ屋敷三百坪、

一右同九十九石ヨリ七拾五石マテハ屋敷二百四十坪、

一右同七十四石ヨリ一ケ所取マテハ屋敷百五十坪、

右之通、以前ヨリ高ノ依多少、坪数被定置事候間、屋敷直申出候節、於所座シラヘノ上可申出候、

一屋敷相払無屋敷ニ罷成候以後、拝領屋敷願並切明屋敷ノ願申出間敷候、尤、自分才覚ヲ以屋敷相求候儀ハ可為格別候、

一右之通、於所帳面写ヲ以致首尾置、毎年八月中屋敷帳並屋敷帳写、地頭免証文取揃、直ニ御勘定所へ可差出候、其節本屋敷帳名付相直可相返候条、年々右ノ首尾可仕候、

但、御勘定所へ帳面差出候儀、高帳同前可相心得候、

一御用地且又何ソニ付上地罷成候節ハ、何左衛門先何左衛門居屋敷ト所帳面ノ通致坪付、早速御勘定所へ可被差出候、

右之通相定候条、首尾不洩様可申渡候、以上、

享保十一年午九月七日　　大御支配所印
取次　鎌田太郎左衛門

三二八七

一上甑島百姓共致切明屋敷置候、年々大山野見掛ヲ以致上納来候処、此節大御支配ニ付、去冬郡奉行藤野次郎右衛門御竿入相成候、（判）然就テハ、甑島百姓ノ儀ハ浦百姓ニテ水手銀致上納候付、屋敷高ハ前々ヨリ納御免被仰付置候間、右高ノ儀モ水手屋敷同前、納方御免被仰付（度脱カ）願出、享保十一年午二月三日大御支配所御証文ヲ以御免被仰付候、

三二八八

一享保八年、阿久根三ヶ浦屋敷御竿入有之候処、出畦過分ニ有之、人体過分ニテ屋敷迫リ趣ヲ以、出畦ノ段御屋敷ニ被仰付度、尤、御法様ノ五セニハ少ハ不足仕所モ御座候ヘトモ、割合ニ被仰付度旨願出、御免被仰付候事、

三二八九

一大慈寺門前屋敷ノ儀、志布志町二男三男之者共屋敷無之候ニ付、依願借地御免被仰付候、享保巳十(ヵ)二月廿五日御証文、

三二九〇

一屋敷掛四壁山植替、又ハ石垣土留等相調候節ハ、前以道奉行方ヘ申出事候処、間ニハ自儘ニ仕調候向モ有之由候条、向後取違無之様向々ヘ可申渡候、

文化元子八月　（菱刈実祐）下総

三二九一

一元文四年未八月、西方浦人本左衛門切明屋敷、大山野二畦程願申出候、御郡奉行シラヘノ内、地方検者見分申渡候処、何ソ諸障リ無之、三十六ヶ月ヨリ内ニ屋敷立移□（空白）場所ニテ御座候間、願之通被仰付度、　以下略ス、

申出候通被仰付候、元文四年未八月廿二日御証文、

三二九二

一寛政六年寅十一月、指宿ヘ為　御湯治就　御光越、湊浦太平次所御本亭相成、水手屋敷御取添有之(ヵ)候、返地又ハ代銀被成下候ニ付、御勘定奉行吟味ノ内、本文指宿湊浦太平次所御本亭ニテ、水手屋敷御取添ニ相成、返地等(ヵ)高ノ儀申出趣有之、シラヘ被仰付相糺候処、諸人屋敷ノ内御用地等ニ相成候節ハ、三十坪ニ不及地者代銀被下間敷候、何ソニ付余地被下候節モ三十坪ノ内ノ地ニ候ハ、代銀上納申付間敷候、併屋鋪主不勝手ノ訳有之候ハ、、三十坪以下ニテモ吟味ノ上代銀可被下旨被仰付渡置候、右ニ付テハ次右衛門・仙右衛門屋敷

御取添、坪数モ纔ノ事候ヘトモ、軽キ者共ノ儀ニ候ヘハ纔トテモ迷惑ニ相成筈候間、所役々吟味通ノ代銀被成下、新左衛門屋敷ノ儀モ御船奉行申出之通、返地被成下度、尤、返地ノ儀ハ郡奉行ヘシラヘ被仰渡度候、以上、

寅五月十二日（朱三）　御勘定奉行

三二九三

覚

一上屋敷十五歩　代銀五十目　湊浦ノ次右衛門
一同十五歩　代銀右同　同所ノ仙右衛門
右之通、相当可仕ト吟味仕候、以上、
寅正月十四日　指宿浦役

郷士年寄

御船手

一上屋敷五畦歩　内、拾五歩御用　次右衛門
一上屋敷五畦歩（朱）▽内、拾五歩△御用　仙右衛門
一上屋敷二畦二十五歩　皆同　新左衛門

三二九四

正徳三年巳

一士屋敷ニ地ヲカリ罷居候者共、自分ニ別々（朱之）門ヲ明、一ケ所ニ四五門有之所モ有之候、屋敷内ヲカリ候者ハ屋敷主ノ門ヨリ致出入可相済候、広キ屋敷ハ裏門モ有之事候得共、小身者ノ屋敷ニ門多明候者見分モ不宜候間、今度小路改候序ニ右ノ事致吟味候、士屋敷ニテ致商買候事モ有之由候、此儀モ気ヲ付可申旨被仰渡、

巳十月三日

三二九五

安永五年屋敷改ニ付仰渡

一惣テ掛持屋敷停止之事、

一屋敷替イタシ候節ハ、本屋敷買手無之内ハ自掛持ノ姿ニ相成候、且又屋敷買取候已後、小身者ハ急ニ居宅引移難成、時節ヲ見合候儀モ有之、其内ハ掛持ノ姿ニ罷成様候、右式ノ者ハ何レモ無拠儀候条、往々子細御勘定奉行マテ届申出、月限等ヲ致置候筋可致候、乍然屋敷買取候以後十二ヶ月過候マテ不罷移者ハ、御法之通

屋敷可取揚候、夫共無拠儀訳有之、月限延申出候ハ、、吟味次第可差免候、

一無御免人屋敷二ケ所致所持候ハ、、一ケ所ハ可取揚事、

一屋敷相直候以後自身不罷移、余人へ預置候儀、令停止候事、

一初条相記候通、小身者急ニ罷移候儀難成者ハ、其旨御勘定奉行へ可申出置候、其内屋敷番如ク移置候儀心次第候、

一士屋敷ヲ内々ニテ町屋敷ニ成置候事、又ハ町人へ借置候儀、令停止候事、

一屋敷拝領被仰付、十二ケ月過マテ不罷移候ハ、可取揚候、依場所急ニ屋敷立候儀難成所ハ十二ケ月ノ内ニ御勘定所へ其旨申出、差図次第可致候事、

一近所ノ屋敷買添、一ケ所ニ纏置罷居者於有之ハ、一ケ所可取揚事、

右之通候へトモ、親子兄弟屋敷並罷居候境ヲ取除候儀ハ格別之事候間、右体ノ者ハ御勘定所マテ申出置候上ニテ屋敷境ヲ取除、後年紛敷無之様ニ慥成印ヲ致置、表向ハ二ケ所ト相見得候様ニ一ケ所ニ門一ツツ、明置候様ニ可申付候、

一屋敷差迫、親子・兄弟・家来等ヲ差置候余地無之者ハ、近所ノ屋敷一ケ所内々ニテ取添置、屋敷主ヲ可差置候、左候テ、内々境ヲ取除候儀ハ心次第可申付候、

一一ケ所ノ内境相立候儀有之候、且又百五十坪ヨリ内、屋敷致小割、売屋敷ニ出候儀、停止ノ事候故、至テ小身者ニテ差迫候者ハ、内々居屋敷ノ内相払、相栖居罷居候者モ有之、或加勢ヲ請、屋敷内ヲ少々割候テ渡置モ有之、或致介抱候テ不叶者ヲ屋敷内へ差置候儀モ有之、或名子類ヲ差置、諸用相達人モ有之、左様成者ハ内々ニテ境相立置由、是ハ無拠訳ニテ前々ヨリ右之通為致置候、然者右体ノ屋敷ハ内々ノ境立マテ相改ニハ及間敷事候条、表向小路並ハ一ケ所ノ姿相見へ候様ニ可致候、勿論門一ツノ外、別ニ小門ニテモ明間敷候、乍然門一ツニテ差支訳有之、依願明置候儀ハ格別候、

一屋敷ノ内ヲ近所ノ人へ取添遣候儀有之、然ハ百五十坪有之候屋敷ノ内ヲ近所へ取添遣置、境相立候テモ、諸屋敷別テ小屋敷罷成、目立筈候間、表向小路並小割イタシ候ト不相見得様ニイタシ、内々境相立候儀ハ可為

心次第候、右式内々近所へ遣候儀ハ無拠訳ニ付テコソ右通致筈候間、内々ノ境有之者構無之候、

一諸座付並諸職人、御預屋敷へ其身不罷居、余人致居住候儀、令停止候事、

一諸士二男屋敷被下候人、養子罷成候ハヽ、右屋敷可差上之、買屋敷ノ儀ハ可為格別候、

一三百坪以上ノ屋敷ハ高三百石已上ノ者ニテ無之候ヘハ居住不罷成候、然共御側ヘ相勤候歟、▽(例)諸奉行歟、△又ハ無役ニテモ御馬廻相勤候カ、右通ノ者ハ依願之訳ハ御免可被成候、右ノ外、百石以下三百坪已上ノ屋敷願取揚間敷候、持来候者ハ格別候事、

一三百坪已上ノ屋敷ニテモ、場所悪敷又ハ屋敷ノ内重々ノ岸又ハ池ナト有之屋敷ハ、依願百石以下ニテモ可被成御免候事、

一御預屋敷・御借屋敷被仰付置候人ハ、何様ノ訳ニテ被仰付候趣、来月二十五日ヨリ内、御勘定所へ可申出候事、

一鹿児島中屋敷改ノ儀、来月初ヨリ有之筈候間、改人差越候節屋敷主出合請合可申候、当時他行ノ人ハ近所ノ慥成名代兼テ頼置可申候、

一当分屋敷主罷居候テモ士屋敷ト不相見得、買人等召置、不相応ノ家作等相調候者有之候ハヽ、是又見分悪敷無之様ニ可致置候、

右之通被定置候条得其意、何ソ訳有之申出儀於有之ハ、来月五日ヨリ内ニ御勘定所へ可申出候、改ノ節ニ至リ申出候共取揚間敷候、御法違ノ屋敷ハ可被取揚候、此旨致承知候様、支配中へ可被申渡者也、

申三月廿二日　　御家老座印

三二九六

鹿児島中屋敷数

一鹿児島上方屋敷六百六十五ケ所

内、五百四十四ケ所　　士屋敷

内、十五ケ所吉野　　御用地

十六ケ所　　神社地

六ケ所　　屋敷

三十五ケ所

内、十ケ所諸名寺社家並門前

三ヶ所　島津美作殿・同飛騨殿奥方・入来院主馬殿御懐
二ヶ所　島津但馬殿・琉球仮屋
五ヶ所　諸御蔵地
十三ヶ所　御小者屋敷
内、五ヶ所吉野
十四ヶ所　吉野　御中間屋敷
十四ヶ所　賦屋敷
十三ヶ所　足軽屋敷
一鹿児島下方屋敷千百四十七ヶ所
内、八百六十五ヶ所　士屋敷
四ヶ所　御用地
四ヶ所　御蔵地
二十八ヶ所　屋敷
内、廿ヶ所諸名寺社家並門前
六十一ヶ所　御小者屋敷
内、四十ヶ所諸名
十九ヶ所　御中間屋敷
内、五ヶ所諸名

二十七ヶ所　賦屋敷
百三十六ヶ所　足軽屋鋪
内、廿ヶ所諸名
岩崎並東福城
一御城内屋敷六十六ヶ所　士屋敷
但、廿四人分
(新)本照院並高麗町・荒田
一屋鋪百六十二ヶ所
内、三十二ヶ所荒田・新屋敷　士屋敷
一ヶ所　御小者屋敷
合二千四十ヶ所
右、貞享五年辰九月、　御前御用ニ付支配奉行ヨリ書出、

借地屋敷

三二九七
文化八年未三月

一諸人在中へ致借地居、其地面へ相掛候取納方相滞、皆済ノ支ニ相成由候、借地ノ儀ハ百姓相対ト存、取納方致延々ニ候儀心得違ノ儀ニ候、年貢地ノ事候ヘハ、定置候日限之通不致取納候テ不叶事ニ候、右ニ付テハ延享三年郡奉行ヘ申渡候趣モ有之候処、程過等閑ニ相心得候哉、近年借地取納段々相滞、不可然事候条、向後定置候日限通無相違屹ト可取納候、自然及延引候ハ、皆済ノ支不相成様、親類引受致取納候様申渡、乍其上不納人々（之人）ハ、早速地面在中ヘ相返候様可申渡候、

右、可承向々ヘ可申渡候、

未三月　　信濃（頴娃久喬）

三二九八

文化十一年戊

一近在諸人借地漸々相重及差支候付、先年郡奉行致吟味申出儀有之、諸士マテ新規借地差免、郷士已下借地ノ儀ハ差留、田畠共時々郡奉行ヘ申出、見分ノ上、不差支田地ハ得差図候上差免、畠地ノ儀ハ郡方ヨリ直ニ差免候様申付、郷士已下ヘハ新規借地ハ勿論、譲渡トテモ一切不相成方、去ル丑年申渡置候処、右借地ノ内郡方ヘ不申出取計候筋相見得、段々入替有之由、別テ不可然事ニ候、近来借地譲渡ノ節、間々ニハ居屋敷同様差心得、地面・家作相混、代料相受取候モ有之由相聞得、右体心得違候所ヨリ▽内々ニ而△相対買ノ筋合成行、別テ不都合ノ至候、向後譲渡候節ハ時々郡方ヘ申出、免許ノ上可譲渡候、乍此上内々ニテ取計候者モ候ハヽ、譲受候地面屹ト取揚可申付候、

右之通、支配中ヘ申渡、奥掛・表方ヘ可相達候、

戊四月

右之通、（以下欠）

取次
相良此右衛門

給地高御格式

三二九九

一万石成御免ノ儀、別テノ訳無之者御免被成間鋪候、

一寄合並ノ格ニテ無之者ハ、千石ニハ御免被成間敷候、

一祖父・曾祖父代々ヨリ（ヨリも）屹立候御役相勤候者、且又地頭職ヲモ被仰付候者ノ子孫、小番勤来候者ハ五百石成御免可被成候、小番マテヲ勤来候者ヘハ、五百石成御免被成間鋪候、

一三百石成ハ、代々士筋ニテモ近代御歩行格ノ勤マテヲ仕、其身モ右通ニ候ハ、御免被成間鋪候、乍然江戸詰ナトニ道中鑓為持候程ノ勤仕候者ハ、様子ニヨリ御免被成儀モ可有之候、道中鑓為持候者ニテモ御歩行格ノ者ニテ鑓為持候共、右体ノ者ヘハ御免被成間敷候、

一初テ高持ノ願申出候者ハ、吟味ノ上御免可被成候、

一外城養子ハ其身ノ代ニハ高五十石ニハ被仰（付脱カ）間敷候、悴代ニハ五十石以上ニモ可被仰付候、座付士ハ三十石ニ被仰付間敷候、

右通候ヘトモ、御奉公ノ品ニヨリ（ヨリ候）テハ格別ニ候、只今持来候者ハ其通ニ候、尤、其上ノ高上リハ被仰付間敷候、

一外城ヨリ養子ニ相成候者、三四代過候ハ、百石成御免可被成候、座付御赦免ハ、座ヲ離御奉公仕候者三四代相過、百石成之願申出候ハ、御免可被成候、三四代ノ内ニテモ諸奉行格、無役ニテモ御馬廻又ハ小番ニ御免被成候者ハ、百石成御免可被成候、

一外城養子ニテモ小番ニ被召入候ハ、三百石成御免可被成候、且又御赦免者小番相勤候筋目ノ養子ニ罷成、小番相勤候ハ、、是又三百石成御免可被成候、

一外城之者又ハ御赦免者、其身芸能ニ付テ被召出候者、又ハ筆者・小役人体ノ勤マテニテ大番相勤体ニ候ハ、、百石成御免被成間敷候、乍然月次　御目見仕候程ノ御役相勤候カ、又ハ中通ニモ被仰付候程ノ者ハ、百石成御免可被成候、

一右之通、段々高上リノ儀被相定候ヘトモ、或病者、或御奉公難相勤体ノ者ヘハ、向後ノ高上リ御免被成間敷候、

一外城衆中高上リ、以前ヨリ士筋目ニテ三四代差立勤来候者ノ子孫高上リ申出候ハ、、百石マテハ御免可被成候、祖父・曾祖父代御赦免ノ者子孫、当時衆並ニ勤居候者ハ、五十石マテノ高上リ御免可被成候、外城衆中ノ儀、都テ百石以上ニ者高上リ御免被成間敷候、以前ヨリ百石以上ノ高持来リ罷在候者ハ御構無之候、当分

持高百石以上ニハ其上ノ高上リノ願申出候トモ御免被成間敷候、

一外城衆中何ソ御奉公不仕者、或幼少、或病者体ニテ御奉公不仕罷在候者、此節ヨリ小普請銀被仰付候、尤、小普請ニ被召入候者、弥小普請銀被仰付候、

右者、寄合又ハ寄合並格ノ者共ヨリ以下高上リノ儀、且又外城養子並御赦免高上ノ御格式被相定候間、時々入念吟味ノ上可奉伺候、且又外城衆中高上リノ儀ハ向後時々地頭所ヘ申出候様申渡、此節被相定候趣ヲ以、願出候者ノ筋目相糺候上、高上リノ儀申出候ハ、御家老承届可差免之、小普請銀ノ儀ハ、御奉公不仕者又ハ小普請ニ被召入候者相糺、鹿児島致同前、於地頭所相シラヘ、明所ハ当番御用人ヨリシラヘノ上可申上候、右之通被相定候間、諸地頭並表方支配中ヘ可被致通達候、以上、

正徳三巳九月

三三〇〇

一外城衆中持高高上リノ儀ニ付テハ　此節御格式被相定、委曲被仰渡候、然ハ高上リ御免無之者、或高上リ願モ不申出者、或衆中外ノ者共、内々ニテ所務受取、附高ニ致置候者モ有之由候、又ハ其外城衆中ニテ無之、鹿児島高又者別外城衆中高致所□(空白、務カ)候衆中モ有之由候、右式ノ高ハ被召上之、高預置候者ヘ急度御咎目可被仰付候、右ニ付テハ横目ニモ段々申付置旨モ有之候間、此段末々マテ致承知候様、地頭所ヘ可被申渡者也、

正徳三巳九月

三三〇一

一初テ高持成又ハ高上リ願申出候節、此程ハ何某ヨリ高受取申立候間、初テ高持並高上リ御免被仰付度旨願書出事候、然共御免無之内右通申出候儀如何ニ付、向後ハ高何程何左衛門ヨリ借銀弁方ニ相渡度由申候、又ハ高相払度旨申候、於御免ハ右高相求申度候条、初テ高持成・高上ノ儀御免被下度趣、願出候様可被申付候、此旨与(ヲ)頭〈中〉ヘ可申渡候、

正徳五未十一月三日

三三〇二

一其身ヨリ願ニテ致外城養子候者ハ、其養子代ニ者高五十石ニハ被仰付間敷候、悴代ニハ五十石以上ニモ可被仰付候、座付士ヨリ表方士ノ養子ニ罷成候者モ右同断、右体ノ者三四代過候ハ、百石成御免可被成候、座付士ヨリ表方士ノ養子ニ罷成者モ右同断、

一右二ケ条之通ノ御定ニ候ヘハ、其身ノ功又ハ無隠手柄等イタシ候者ハ、其身代ニモ鹿児島代々士同前ノ御法ニ可被仰付候条、諸奉行等ニモ右体ノ者見合可申候、

一依願外城養子被仰付候者、御太刀進上又ハ御番相勤候家筋致相続候テモ、其家ノ格式一段被相下(召)御法ニ候ヘトモ、御見合ヲ以養子ニ被仰付候者、向後其家ノ格式之通可被仰付候、

一外城衆中、無隠手柄ナトイタシ鹿児島士ニ被仰付候者、且又　思召ヲ以被召出候歟、又ハ芸能ニ付被召出候者ノ儀ハ、常体依願養子被仰付候者トハ訳モ相替候条、向後右体ノ者高上リ其外諸事鹿児島代々士格ニ被仰付候、座付士モ同断、

一外城養子ニテモ小番ニ被召入候ハ、三百石御免可被成候、且又御赦免者小番相勤候筋目ノ養子ニ罷成、小番相勤候ハ、、是又三百石成御免可被成候、

一座付士、其座ニ相勤候内ハ三十石ニハ被仰付間鋪候、

一外城養子ヘ罷成候者、座付士座ヲ離レ御奉公仕候者ハ、三四代相過候ハ、百石成御免可被成候、三四代之内ニテモ諸奉行ノ格、無役ニテモ御馬廻リ又者小番御免被成候者ハ、百石成御免可被成候、

一外城養子又ハ座付士ヨリ表方士ノ養子ニ罷成者、五十石以上ニハ不被仰付筈候ヘトモ、只今マテ持来候者ハ其通ニ候、座付士座ヲ不離者、三十石ニハ不被仰付候ヘトモ、只今マテ持来候者ハ右同断ニ候、尤、只今マテ持来候者モ右之程ヨリ右ノ高ニテ候ハ、、其身ノ高上リハ被仰付間鋪候、

右ハ、高上リノ儀被相定候ヘトモ、或ハ病者、或ハ御奉公難勤体ノ者ハ、高上リ御免被成間敷候、向後初テ高持ノ願申出候テモ御免有之間鋪候、小普請ニ被入置候者又ハ幼少御奉公難勤体ノ者ヘモ高上リ御免不被成候御格式候、然共身弱マテニテ当時御奉公不相勤、尤、田舎入不申出相応ノ御奉公被仰付候ヘハ相勤筈ノ者モ

可有之候、左様成者ハ定病人ニハ訳モ相替候ニ付、高上リ御免可被成候間、向後其通ヲ以高直シラヘ可仕候、小普請被入置候者又ハ為差知病者ニハ御奉公難勤者、其外幼少・田舎入御暇等申出候者ハ、高上リ御免不被成候、以上、

享保三年戌七月

三三〇三

一諸士高相求申出候者、拝借取込等有之候テモ高直御免被成候ヘトモ、向後拝借取込等有之、皆返上不相済内ハ、高直御免被成間敷候、此外ノ儀ハ有来御法ノ通被仰付置候、

右之通、此節被相定候間可致通達候、以上、

享保二十年卯九月五日　（堀興昌）四郎太夫

三三〇四

一取込拝借銀米有之人、持高相払候テモ高不相直事候間、右体ノ人者高払間敷候、雖然持高ノ内取込拝借返納ノ方ニ引当残置其余分相払候カ、又ハ不残相払候ヘハ、引当無之候ヘトモ、返上方滞候節、高受取候方ヨリ引受致返納事候ハヽ、格別ノ事候間、右両様ノ儀ハ申出、御免ノ上高相払候様与中ヘ被仰渡置候間、此段可承座々ヘ可被仰渡旨、（島津久豊）本殿御差図ニテ候、以上、

享保八年卯七月二十九日　取次　伊地知越右衛門

三三〇五

一諸士高百石以上ニ罷成者ハ何百石ニテモ百石毎ニ高上リノ願申出候テモ、御免無之者又ハ高上リ願モ不申出者、且又士外ノ者共内々ニテ所務受取、附高ニ致置者モ有之由、其聞得候、此儀以前ヨリノ御禁止ノ事候間、右式ノ高ハ被召上之、高預リ候者ヘハ急度御咎目可被仰付候、右ニ付テハ横目ヘモ段々申付置旨モ有之候間、此段支配中ヘ可被申渡者也、

享保十巳九月朔日　御家老座印

三三〇六

一諸士持高ノ儀ニ付テハ御格式被相定、此程被仰渡置候故、御法違ニ仕置候人ハ無之積ニ候、尤、士外ノ者共

ハ曾テ所務請取候儀不罷成事候ヘトモ、若了簡違ニテ高上リ御免無之筈ノ士又ハ士外ノ者共、本物返ノ約束カ高ノ所務請取候者モ有之由、其聞得候、右式ノ者ハ本高主方ヘ高請戻可申候、若本高主請戻難成者ハ、高免御免可被成人ヘ高相渡候様可仕候、何レノ筋ニモ御法(列様)之通高片付可申候、

一御法違ニ所務仕来候高片付候儀、鹿児島中ハ今月晦日限、諸外城者来月十五日限ニ可片付候、若又片付難成者ハ、高主並所務請取等ノ者ヨリ何様ノ訳ニテ片付難成旨、高所ヘ可申出候、於其儀ハ右高ハ可被召上候、

附、高片付候者ハ右月限ノ内、其首尾高奉行ヘ可申出候、御法違ニ所務不致来者共ヨリハ申出ニ不及候、

一高上リ御格式被相定候付テハ、御当地士高直不申出候テ不叶者モ可有之事候処ニ、高直申出候月限相過候ニ付、夫故差支儀モ可有之候間、高直可申出筈ノ者ハ当月ヨリ来月正月マテノ内、高直ノ願高所ヘ可申出候、正月以後ノ儀ハ此已前之通、月限ヲ以高直可申出候、

一鹿児島士中借銀返弁方ニ□(空白、列「右体高本ノマヽ」)請取候者トモ、高直願可申出事候処ニ、高主幼少又ハ御物ヘ取込拝借ノ銀米等有之、又ハ何ソ子細有之、高直差支候者ハ、何某ヨリ高何程請取候故、高直ノ願申出筈候ヘトモ、右式高直之支御座候旨、時々高奉行ヘ其届申出置候上ニテ所務請取可申候、

附、高上リ御免不被成筈ノ者共ハ、右式ノ支無之候テモ高直不罷成事候ヘハ、右之通高奉行ヘ届申出候儀、尤、内々ニテ所務受取候儀、曾テ不罷成事候、

右之通被仰付候間、此段末々マテモ奉承知候様ニ早々支配中ヘ可被申渡者也、

享保十巳十月六日　　御家老座印

三三〇七

高直ノ事

一持高永代売渡候高直証文案紙、高奉行所御規ノ内

証文

高何石ノ内　　何方郷(列何)村ノ内

高何斛　　何門

右者、御方ヘ此節右高永代ニ売渡申候間、被成御披露、御方高ニ御直可被成候、為後証如斯御座候、以上、

年号月日　　高主何某　印
証拠何某　印
何某殿

一借銀為返済永代相済候高直証文案紙

証文

高何斛　　何方郷村ノ内（列何）
何門

右ハ、御方へ借銀為質物渡置候処ニ、現銀ニテ返済難成候ニ付、此節右高永代相渡申候間、被成御披露、御方高ニ御直可被成候、為後証如此御座候、以上、

年号月日　　高主何某　印
証拠何某　印

何某殿

一寄合並已上持高被相払役人ヨリ申出候高直証文案紙

高何石ノ内　　何方郷村ノ内（列何）
高何斛　　何門

右ハ、何某持高ニテ候処ニ、御方へ此節右高永代ニ売渡申候間、被成御披露、御方高ニ御直可被成候、此旨何某承届、為後証如此御座候、以上、

年号月日　　高主何某役人何某　印
証拠何某（印脱カ）

何某殿

三三〇八

一高請取候方高直願書物案文

差出

一高何石　但、何某方ヨリ買取申候、借銀返弁方ニ受取申候、

一持高何石

合高何斛

一何百石高上リ又ハ初テ高持成、何ノ何月何某殿御取次ニテ御免被仰付置候事、

一先祖代々何様ノ御役相勤、地頭職ヲモ被仰付、代々小番ニ被召入置勤来候事、

一代々御城下士ニテ何御番又ハ何御奉公相勤候事、

一外城養子、座付士御赦免被仰付、何代罷成、何御番又

ハ何御奉公相勤候事、

一外城ヨリ被差出又ハ御赦免被仰付、何代罷成、何御番又ハ何御奉公相勤候事、

一初テノ　御目見並継目家督ノ御礼相済申候事、

一当時何御役又ハ何御奉公相勤候ニ付、高直申上候段、御支配頭へ何某殿御取次ニテ申出候処ニ、被聞召置候由被仰渡候、且又小与頭相勤申候ニ付、与所へモ申出置候事、

但、前髪有之無役ノ人ハ、当時家督有之候ニ付御番等モ不相勤候へトモ、当時何歳ニ罷成候旨可被書出候、尤、寄合已上ハ被申出ニ不及候、

一右高直御免不被仰渡内ニ持高ノ内相払、高直之願申出間敷候事、

一何方御座へモ、何ソ取込拝借上納方無御座候、

右ハ、高直ノ儀ニ付、段々御格式被相定被仰渡候趣承知仕、御法様ノ次第ヲ以、高直申出儀御座候間、私高ニ被召置(列直)被下候様ニ奉願候、若相違ノ儀御座候ハ、何様ニモ可被仰付候、為其如斯御座候、以上、

何ノ何月日　　何某　印

高奉行所

一高相渡候方差出案紙

差出

高何斛

右ハ、私持高ノ内何某方へ永代売渡、借銀返弁トシテ相渡申候儀、別条無御座候、私事、初テノ　御目見並家督継目ノ御礼相済申候、尤、取込拝借上地高無御座候間、右何某方へ高相直申候様奉願候、私事、当時何御役相勤申候ニ付、右之趣御支配頭へ何某殿御取次ニテ申上候処、被聞召置候由被仰渡候、且又小与頭相勉候ニ付、与所へモ申出置候、尤、右高直証文証拠人、親子兄弟並外城衆中ニテ無御座候、且又右高直何分ニモ不被仰渡内、高相求高直ノ儀申出間敷候、此段申上候、以上、

但、御役並小与頭、何御奉公モ不相勤人ハ、無役ニテ何御番相勤候訳可被書出候、且又取込拝借有之人ハ、何方へ取込銀米拝借銀米何程有之候へトモ、残高何石並居屋敷一ヶ所所持仕候付、右返上方引当ニ仕置候間、

高相直申候様奉願候通可被書出候、
但、家内子孫何某取込拝借有無ノ訳、
何ノ月日　何某　印
高奉行所

一分地高願書案紙

口上覚

私事、別立ノ願申上候処、願之通被仰付難有奉存候、依之親兄持高ノ内何程差分度由申候間、初テ高持成御免被仰付被下度奉存候、此等之趣御申上可被下儀奉頼候、以上、

月日

口上覚

私何事、此節初テ高持成ノ願申上候、願之通御免於被下之（列は）、持高ノ内何程差分申度御座候間、此等之趣御申可被下儀奉頼候、以上、

月日

一別立ノ者、親父（又カ）者兄共ヨリ高可差分ト申候ニ付、初テ高持成願申出候節ハ、親兄共ヨリモ初テ高持成御免被下候ハ、持高ノ内何程差分申度旨、別紙案文之通一所ニ可申出候、

但、親兄共ヨリ差分高ニテ無之、初テ高持成願候儀ハ此内之通候、

右之通、向後被相心得候様、組頭ヘ申渡置、高奉行ヘモ可申渡候、

享保十四年歟十二月　（樺山久初）主計

（列イ）享保十四年酉十一月四日

三三〇九

一別立並分地高、一度ニ親並兄ヨリ依願申出候通被仰付候人ハ、一度ニ御免被成候訳、御証文ヲ以被仰渡相済候人ハ、初テ高持成願書ニハ不及候由、先年被定置候由、享保十三年申十二月二日鎌田太郎右衛門御取次口達ニテ薬丸猪右衛門方ヘ被仰渡致承知候、以後共右体ノ人別テ高持成願出ニ不及候、後年為見合記置也、

三三一〇

有馬千左衛門

一右者、亡父遺言ノ訳ヲ以、弟有馬正左衛門ヘ高附属仕度旨申出、願之通御免被成候、向後有之者ニテモ、親兄弟共ヨリ附属高ノ願申出者有之候節ハ願可被取揚候条、御規模ニモ記置候様、首尾掛ヘ可被仰渡置旨、主殿殿御差図ニテ候、以上、

巳三月廿九日　　島津弥一郎　印

御勝手方

此表之通得其意、諸事如例可被申渡也、

巳三月廿九日　　御勝手方印

取次　大野清右衛門

三三一一

一初テ高持成並高上リ願ノ人差出案紙

一代々御城下士ニテ、先祖代々(ヲ)ニ何御奉公又者何御番相勉候事、

一外城ヨリ養子ニ罷成候人者、何方衆中ニテ、代々御城下士何某養子ニ被仰付、何代ニ罷成、何御番又ハ何御奉公相勉候事、

一外城又ハ座付ヨリ何ソニ付被召出、且又御赦免被仰付候人ハ、祖父並親何某代御赦免被仰付被召出、何代罷成、何御奉公又ハ何御番相勉候事、

一病者ニテ御奉公難勉体ニテ候ハ、其訳之事、且又前髪有之人ハ当年何歳ニ罷成候段可被書出候、尤、初テ御目見並継目家督ノ御礼相済候事、

一二男三男別立候人ハ、代々御城下士何某二男ニテ別立被仰付、何御奉公又ハ何御番相勉候事、

但、無屋敷ニテ御番等モ不相勉人ハ、無屋鋪故御番等モ相勤不申、高相直リ申候節ハ御番相勉申覚悟ニテ罷在候通可被書記候、

一何方ヘモ何ソニ付取込拝借上納方有無ノ訳可被書出候、

右ハ、初テ高持成高上リノ願申上置候処ニ、右之通可申上旨被仰渡、別条無御座候、為其如斯御座候、以上、

月日　　何某　印

高奉行所

三三一二

一高上リ初テ高持高直規模、高奉行所御規ノ内

一諸士借銀方ニ受取候高又ハ買地分地等付テ高直ノ儀、其時々可申出候間、月限ノ定不及証文請取置、五通十通積候節段々相シラヘ、年中幾仕切ニモ可得差図候、且又〈御〉加増・新地仕明高等ノ儀ハ御家老任引付可致其沙汰事、

一外城衆中高ノ出入、年中抑通ノ筋ニテハ八朔高帳差出候支有之候故、毎年正月ヨリ六月マテノ間、高直申付置候間、七月ヨリ十二月マテハ高直請付間鋪〈候〉事、

一外城ト外城又ハ鹿児島ト外城、高ノ出入可為停止事、

一寺社家ヘ被附置候高ノ外、借銀方ヘ相請取、高直之儀申出候テモ、寺社家ヘハ御免不被成候間、取次仕間敷事、

一借銀返弁方受取ノ高又ハ高相求候節、百石ヨリ千石マテノ間、段々百石ツヽノ涯ニテ其人ヨリ願申出、於御〈免〉許ハ高直ノ儀可有取次事、

一親相果、高主ニ被仰付候人、継目御礼不相済候テモ高可相直候、乍然初テノ御目見不相済者モ可有之候間、左様成者ハ継目之御礼不被仰付内ハ高相直間鋪候事、

一高直証文、其年々証文ニテ可有披露、若無拠前年ノ証文ヲ以申出候人、直ニ月番ノ御家老ヘ可申出事、

一借銀方ニ高相渡候人又ハ高売渡候人、高直証文出置、其節何者（何そか）出入ノ儀於有之ハ其訳申上、高可相直候、不依公私入組等有之、以後高直証文差出候テモ取次有間敷候、雖然入組等前ノ日付ノ証文紛無之候ハヽ可致披露事、

一諸士二男三男不別立人、借銀方ヘ高相請取又ハ高相求、高直ノ儀申出候共取次有間鋪候、

一高直証文ニ親子兄弟証拠相立儀可為停止事、

一諸士持高借銀返弁方又ハ売高ニ相渡、高直御免被成、高帳面ノ首尾マテモ相済候以後、其年中ニテモ又ハ（又々カ）自分方ニ高相求、高直ノ願申出候ハヽ可有取次事、

一万石成御免ノ儀、別テノ訳無之候ハヽ御免被成間敷候、当分万石以上ノ面々高上リノ人有之候共、御免被成間敷候事、

一一所持・一所持格・▽〈寄〉合△寄合並其外御家老直触ノ面々、持高百石千石ニ及候節々、前以高上リノ願申出

ニ不及、高直可申渡候事、

一万石以上ニ高上リ御免無之人モ私領並持切名ノ仕明高ハ持高ニ可相加候事、

附、諸士持留高位増等ノ増高モ右ニ可準事、

一寄合並ノ格ニテ無之者ハ千石ニハ御免被成間敷候、只今マテ持来候ハ格別候、持来候者モ千石已上ニテ候ハ、其上ノ高上リ御免被成間敷事、

一御家老直触ノ外、当地（当時カ）屹立候御役被仰付置、又ハ地頭職被仰付置候者、持高千石ヨリ内々高上リ御免可被成候、右体ノ者当分持高ヨリ上九十石余百石ノ内（例之）ニテ高上リ者、御法之通高奉行シラヘ申出候ハ、高直可申付候、百石ノ節ハ越候節ハ、願ノ上奉伺御免可有之事、

但、右体ノ者御役御免ニテモ首尾能御免ノ者ハ、持高六百石以上千石ヨリ内ノ高ニテ候ハ、、持高ヨリ上九十石余百石ヨリ内高上リ、其身代ニ者御免可被成候、且又隠居以後悴代ニ罷成、又ハ首尾悪敷御役御免ノ者、右六百石已上ノ持高ヨリ上、少ニテモ高上リ御免被成間敷候、

一祖父・曾祖父代ヨリモ屹立候御役相勤候者、且又地頭職ヲモ被仰付者ノ子孫、小番勤来候者ハ五百石成御免可被成候、小番マテヲ勤来候者ハ五百石成御免不被成、四百九十九石余マテノ高上リ御免可被成事、

但、百石ノ節ヲ越候涯々ニテ願出候節、奉伺御免可有之候、

一三百石成ハ、代々士筋ニテモ近代御歩行格ノ勤マテヲ仕、其身モ右通候ハ、、御免被成間敷候、乍然江戸詰ナトニ道中鑓持セ候程ノ勤仕候モノハ様子ニヨリ御免被成儀モ可有之候、道中鑓モタセ候者ニテモ右体ノ者ヘハ御免被成間敷候、代々士筋目ニテ大番相勤候者ハ二百石成御免可被成事、

但、百石ノ節ヲ越候涯々ニテ願出候節、奉伺御免可有之候、

一初テ高持ノ願申出候者ハ吟味ノ上御免可被成事、

一外城養子、其身代ニハ高五十石ト被仰付間敷候、悴代ニハ九十（五カ）石以上九十石マテノ高上リ御免可被成候、座付士ハ三十石ニハ被仰付間敷候、右之通候ヘトモ、御奉公ノ品ニヨリ候テハ格別ニ候、只今マテ持来候者ハ其通候、只今マテ持来候者モ右ノ程ヨリ上ノ高ニテ候

ハ、其上ノ高上リハ被仰付間敷候、座付ヲ離、士ノ養子ニ成候者、高上リハ外城養子ノ格式可為同断事、

但、五十石成ノ節ハ奉伺御免可有之候、

一外城養子ノ儀、三代目ヨリ五十石ノ節ニテ不及伺事候間、高奉行承届、御格式ヲ以相シラヘ、高相直候様ニ可仕候、

一外城（外ヨリ）養子ニ罷成候者、三四代過候ハ、百石成御免可被成候、座付士座ヲ離御奉公仕候者、三四代相過百石成ノ願申出候ハ、御免可被成候、三四代ノ内ニテモ、諸奉行ノ格、士役ニテモ御馬廻又ハ一代小番御免被成候者ハ、百石成御免可被成候事、

但、百石成ノ儀ハ伺ノ上御免可有之候、

一外城養子ニテモ代々小番ニ被召入候ハ、、三百石成御免可被成候、且又座付士小番相勤候筋目ノ養子ニ罷成、小番相勤候ハ、、是又三百石成御免可被成事、

但、百石ノ涯々ニテ奉伺御免可有之候、

一外城ヨリ鹿児島士養子罷成候者、向後ノ儀、外城ヨリ持高致所持、直ニ其高持出候者マテヲ御免可被仰付候、無高ニテモ無拠血筋又ハ為差立訳有之、願ノ依趣ハ被仰付儀モ可有之、

右之通、向後被仰付候条、表方ヘ致通達、御側方・御勝手方ヘハ写ヲ以可相達候、以上、

但、諸外城役人共ヘハ、地頭並月番御用人ヨリ可申渡候、

元文二年巳五月　（島津久貫）主殿

三三一三

一外城衆中、文武ノ芸能ヲ以鹿児島士ニ被仰付候者ハ、依願外城養子被仰付候者マテハ訳モ相替候条、向後右体ノ者高上リ、諸事鹿児島代々士格可被仰付候、座附士モ同断、

一外城衆中、家職ノ芸能ヲ以鹿児島士ニ被仰付候者高上リノ儀、外城養子ノ格式可為同断、乍然月次御目見仕候程ノ御役相勤候歟、又ハ中通ニモ被仰付候程ノ者ハ百石成御免可被成候、座付士モ右同断、

一病気有之、為養生座敷ノ内取拵召置候者、持高ノ内借銀返済方ニ相渡候歟、又ハ相払候節ハ、無拠両人親類ノ証文ニ御法之通証拠人相立、高直願申出候ハ、御免

可被成候事、

一鹿児島士並外城衆中高上リノ御格式段々被定置候ヘトモ、小普請ニ被召入候者、又ハ幼少又ハ病者ニテ御奉公難勤体ノ者、御当地・外城共、向後高上リノ願申出候共、只今マテ所持ノ高ヨリ上ニハ少ニテモ増高御免被成間敷候、勿論初テ高持ノ願申出候テモ御免有之間敷候、身弱マテニテ当時御奉公ハ不相勤候ヘトモ、相応ノ御奉公被仰付候ヘハ相勤筈候者モ可有之候、左様成者ハ定病人トハ訳モ相替候間、高上リ御免可被成候条、其意ヲ以高直ノシラヘ可仕候、田舎入ノ御暇申出者、又ハ御暇ノ者ニハ、高上リ御免被成間敷候事、

但、或老体或身弱有之、御番難勤、代番差立候者、又ハ嫡子何ソ御奉公相勤候者ヘハ高上リ御免可被成候、

張紙写

一高直御規模ノ内

幼少ノ者高上リ御免被成間敷候旨被定置候、然共何才マテハ高上リ御免不被成、何才ヨリ高上リ御免被仰付候段、分テ御格式不相見得候旨、左之通被相定候、

一寄合並已上ノ儀ハ、其身幼少ニテモ間ニハ人数等差出候御用ヲモ被仰付、御見合ヲ以被召仕儀モ候ヘトモ、幼少ニテモ高上リ可被仰付候、

一右ヨリ以下ノ者、幼少ニテモ勤方有之候者ハ有来通高上リ御免被成、勤方無之者ハ都テ十五才ヨリ高上リ御免被仰付、十四才マテハ高上リ御免被仰付間敷候、

右之通、此節高上リ御規模被相定候間、座々御規模張紙ニテ記置、諸事如例可被申渡也、

元文元年辰十二月晦日　　御勝手方印

取次　山岡権太左衛門

三三一四

一鹿児島士、借銀返済方ニ知行高受取又ハ買取候者共、高直ノ儀申出候節、高主拝借取込銀米等於有之者高直間敷候、然共返済方ノ引当相成程ノ残高又ハ居屋敷致所持候者ハ、高奉行シラヘ申出候マテ高直可申渡候、引当致置候高・屋敷相払候節ハ、高受取候者ヨリ返上方引取候ハヽ、其旨前以支配頭ヘ相付申出、差図ノ上可相払候、

一高直御格式致相応高可相直之、諸士ニテモ内々ニテ借銀返済方ニ高受取（列置）〈、又ハ為利払所務受取候人者、其旨双方ヨリ高奉行ヘ申出置候旨、所務受取可申候事、

附、高直不相応（列済）筈ノ者ハ、借銀弁方又ハ利払ノ方タリトイフトモ、内々ニテ所務受取候儀不罷成候、尤、高上リ御免無之筈ノ者、内々ニテ高求置所務受取候儀、曾テ仕間鋪候事、

一御役人・小役人明細帳ニ載候程ノ者、高直ノ願申出候節ハ、其段双方ヨリ支配頭ヘ可申出、或高主幼少或無拠子細有之、高直差支候者ハ、是又支有之高不相応ノ故、所務マテヲ請取又ハ相渡、右同断支配頭ヘ可申出、銘々首尾申出候時、高奉行ヘ高直ノ願又ハ差支ノ訳可申出旨可申渡候条、其趣高奉行承届、高直ノ儀ハ御法ノ通相シラヘ申出相済候節、明細帳仕付ノ首尾当人支配頭ヘ申出、且又支有之候高ノ儀ハ其段承届候上、是又書付ヲ以当人支配頭ヘ書付ヲ以可申出候、右書付ヲ以明細帳ノ仕付可有之候、尤、右式高直ノ支有之、所務マテヲ受取候段ハ、於高奉行所帳面ニ記置、紛敷無之様可致置候事、

張紙写

高奉行ヘ可申渡覚

一御役人・小役人明細帳ニ載候程ノ者、高直ノ願申出、又ハ高直ノ願申出筈候ヘトモ支有之候故所務マテヲ受取候通、銘々支配頭ヘ右之通首尾申出候儀別条無之哉ノ旨相尋候上、書付ヲ以又ハ申出、明細帳ノ首尾有之事候得共、以後ハ右之通首尾仕ニ不及候条、銘々ヨリ高奉行ヘ高直ノ儀申出候節、御法ノ通相シラヘ申出、高直相済候節、明細帳仕付ノ首尾当人支配頭ヘ可申出候、且又支有之候高ノ儀ハ其趣承届、是又書付ヲ以銘々ノ支配頭ヘ可申出候、其書付ヲ以明細帳ノ仕付可有之候、尤、高奉行座ニテモ其訳帳内ニ可記置候事、右之通可申渡候、

十二月　　蔵人

三三一五

一無役ノ者高相求候節、無拠訳有之、高直申出儀難成者ハ、其子細ヲ高奉行ヘ申出候上ニテ所務受取可申候事、

但、内々ニテ高相求、別人名付ノ高所務仕候儀、堅

令禁止候、

一外城衆中高直ノ儀、地頭ヘ相付申出、地頭ヨリ高奉行ヘ可相達候、其節高奉行ヨリ諸事高直ノ格式ヲ以相シラヘ、被定置候高頭ノ内ニテ候ハヽ、高直相究、高奉行ヨリ直ニ地頭ヘ可相達候、百石五十石ノ節ニ及候高上リノ節ハ、地頭ヨリ月番御用人ヘ申出、差図ノ上高直ノ儀ハ高奉行ヘ可申出候事、

但、取込拝借有之候者高直ノ儀ハ、鹿児島士高直ノ格式可為同断、且又取込拝借ノ引当ニ致置候高相払候節ハ、高受取ノ者ヨリ返上方引取候者ヘ其趣ヲ以地頭ヘ相附申出、地頭ヨリ月番御用人ヘ申出、御免ノ上可相払候事、

張紙

本文附衆中、初テ高持成並高上リ、外城衆中同様可相心得候、右ノ訳御規帳ニモ可記置旨申渡、可承座々ヘモ可申渡候、

四月　　主計

三三一六

一外城衆中初テ高持・分地等ノ儀モ、地頭ヨリ御格式ヲ以相シラヘ、其上高奉行ヨリ御格式ノ旨ヲ以相究、地頭ヘ可相達事、

一外城衆中ノ儀、都テ百石已上ノ者（ハ）高上リ御免被成間敷候、以前ヨリ衆中筋目ニテ、三四代差立勤来候者ノ子孫ハ、百石マテハ高上リ御免可被成候、代々衆中筋目ニテモ所衆中並マテノ御奉公相勤候者（ハ）、五十石已上九十石余ノ高上リ御免被成、百石ノ高上リハ御免被成間敷候、祖父・曾祖父代御赦免者ノ子孫、当時衆並ニ勤居候者ハ、五十石マテノ高上リ御免被成、其上ノ高上リハ御免被成間敷候、以前ヨリ百石已上ノ高持来罷在候者ハ御構無之候、当分持高百石以上ニテ其上ノ高上リ願出候共、御免被成間鋪候事、

朱書

本文之通被定置候ヘ共、自今以後（は）右体家筋ノ者ニテモ、其者ノ器量行跡不宜、又ハ下輩ノ家業致候者ヘハ、高上リ御免被成間敷候、往々屹ト役目ヲモ可相勤程ノ者、家業モ宜候ハヽ、御法之通高上リ御免可被成候間、高上リノ儀申出候節右之趣ヲ以曖致吟味、其上地頭前ニテ委細ニ相調願取上候様可被相心得候、此段諸地頭

並明所ノ外城ハ月番御用人ヨリ可申渡候、

八月　　主計

右規模此節相改候条、堅固可相守（刃之）、若後年相替儀有之節ハ御勝手方ヘ可得差図者也、

享保十三年申十二月十五日

三三一七

一依科已来没収被仰付候高、千石内外ニ相成候節、相当ノ直付ニテ本人親類外諸士ヘ申受可被仰付候、尤、御取揚高ノ内、本人ヨリ借候様質物遣置、本銀目成候マテ年々所務代銀被成下候高ノ儀ハ、右所務差引相済候後申受可被仰付候、且何ソニ付引当ニ差出置候高、本銀上納不相済、御取揚相成候ハヽ、其引当ノ直付ニテ申受可被仰付候、若拝借（刃傾）高被仰付儀モ候ハヽ、其石数ハ御取揚高ヲ以致差引、御高ノ儀ハ減少無之様被仰付候条、可承向ヘ可申渡候、

但、蔵方不足ノ方ニ御取揚相成候高ノ儀ハ申受不被仰付候、

享和四年子正月　　伊織（川田佐賢）

三三一八

一御養子・御縁与共御持参高ノ儀、是マテ諸出来（米カ）相掛候モ有之候ヘトモ、給地高トハ訳相替候付、已来賦米マテ相掛候筋被究置候条、此旨掛ノ向ヘ可申渡候、

但、島津因幡（忠厚）殿・玉仙院・心鏡院殿ヘ被遣置候御高ノ儀（刃は）モ、賦米マテ相掛候様被仰付候間、是又可申渡候、

享和二戌九月　　市正（赤松則決）

三三一九

一御側方支配筆者・小役人、初テ高持成高上リ願ハ御側ヘ相付差出、附属高ハ表方ヘ差出候様被仰渡、

安永十年丑二月朔日

三三二〇

一高上リノ儀、幼少ノ者ヘハ御免被成間敷旨被相定候、然トモ左之通、

一寄合並已上ノ儀ハ、其身幼少ニテモ間ニハ人数等差出候御用ヲモ被仰付、御見合ヲ以被召仕儀モ候ヘハ、幼

少ニテモ高上リ可被仰付候、
一右ヨリ以下ヘハ、幼少ニテモ勉方有之者ヘ有来通高上リ御免被成、勉方無之者ハ都テ十五才ヨリ高上リ御免被仰付、十四才マテハ高上リ御免被仰付間敷候、
右之通被仰渡、
元文元年辰三月　主殿

三三二一
一外城衆中高直ノ儀ハ、時々地頭ヘ申出相直来候ヘトモ、此涯(ほの)程高上リノ御格式ヲモ為被相究事候条、向後高直ノ儀地頭ヘ相付申出候節、地頭ヨリ高所ヘ申出、高奉行ヨリ御格式ヲ以相調候上高直相究、其旨高奉行ヨリ地頭ヘ可相達候、
一高帳ノ儀、其地頭以証印高増減等相記事候、此儀ハ已前之通、地頭可為証印候、
一外城衆中高直ノ儀、今マテハ月限無之候ヘ共、自今以後鹿児島士高直同前ニ、四月ヨリ八月マテノ内、高直ノ願地頭所ヘ可申出候、
一鹿児島士ノ儀、取込拝借ノ銀米有之候者ハ持高他ヘ相直候儀ハ不罷成候、然共残高又(ゆくは)屋敷致所持、取込拝借返上ノ御引当有之者ハ、依申分高直御免被成事候、外城衆中高直ノ儀ニ付テハ此程右ノ沙汰ニ不及候ヘトモ、向後ハ右同前格式被仰付候間、右体ノ者ハ地頭ヘ相付訴訟申出候節、地頭ヨリ当番御用人ヘ相付可被申出旨被仰渡、
正徳三年巳十月

三三二二
一諸士高帳・持高帳、合勺才マテヲ記有之候ヘ共、地面モ無之、目録モ無之候ニ付、勿論高主可致所務様モ無之者ハ、今マテ有来通高ニ懸候出銀出米ノ節ハ、弥無高同前ニ沙汰可仕候、然共高帳可被消除筋ハ無之候間、地面モ目録モ不被下置、帳面計ノ高持ハ、向後無高同前ト唱可申候、重テ知行高求候節、初テ高持成ノ願ハ申出不及候、唱マテヲ右之通被相定候旨被仰渡、
正徳三年巳四月十六日

三三二三

一大身分格ニテ一万石已下ノ人ハ九千二百石マテハ高上リ御免可被成候間、九千石ニ不及内ハ百石千石ニ及候節々、前以高上リノ願申出ニ不及高直可申渡候、九千百石ニ及候節ハ、願申出達　貴聞、御免ノ上高可相直候間、御法ノ通可申出候、

一一所持ハ七千石、一所持格ハ五千石、寄合並ハ二千石マテ高上リ可被御免成候間、右定ノ高ニ不及内ハ百石千石ニ及候節々、前以高上リノ願申出ニ不及、高直可申渡候、右定ノ高ニ及候節ハ、願申出達　貴聞、御免ノ上高可相直候間、御法之通願可申出候、

但、二千石ト限リ御免ノ事ニハ候ヘトモ、高直ノ節少々余計有之、差支儀モ候ハヽ、御定ノ高ヲ越候共、百石ノ内御免ノ内ニ相加、高可相達候、

一右定ノ上高上リノ儀、為差立故有之候ハヽ、格別ニ候間、願可申出候、左候ハヽ、其節ノ勉方人々ヨリ御加増ノ思召ヲ以、高上リ御免可被成儀モ可有之候、何ソ故モ無之願マテニテハ御免被成間鋪候、

一寄合並ニテ無之者ハ、千石以上ニハ高上リ御免無之候ヘトモ、寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭ナト被仰付候者、御役目ハ勉方人々ヨリ御加増ノ思召ヲ以、千石マテノ高上リ御免可被成儀ハ品ニヨリ可有之候間、無拠儀訳有之候ハヽ、願可申出候、達　貴聞、何分ニモ可被仰付候、尤、千石ヨリ内ハ百石ノ節ハ前以高上リノ願申出ニ不及、高直可申渡候、

但、千石マテ高上リ御免被成候人有之、高直ノ節少シ余計モ有之、差支儀モ候ハヽ、千石ヲ越候テモ百石ノ内ハ御免ノ内ニ相加、高可相直候、

一右定ヨリ上ノ高、当時持来候者ハ格別ニ候、持来候者其上ノ高上リハ願マテニテハ御免被成間敷候、勉方人々ヨリ御免被成儀モ可有之候間、無拠訳有之候ハヽ、願可申出候、私領並持切名仕明高ハ格別ニ候間、定ノ上高上リ候共、前以願申出ニ不及候、右之増高ハ持高ニ可相加候、

右之通被相定候旨被仰渡、

享保廿一年辰二月廿八日　（島津久豫）本

三三二四

一口上覚

高三拾一石六斗三升六合四勺六才

但、高崎善之進並大原林右衛門ヨリ

右之通、此節高相求、高直ノ願申出候間、此段被聞召置被下度奉存候、此等ノ趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

文化十一戌六月朔日　三原善兵衛

但、無役ノ者御届沙汰無之、

右之通、月番御用人へ差出候処、翌二日同人御取次ニテ被聞召置候旨被仰渡、

切明屋敷

三三二五

一写

切明屋敷目録　高江久ミ崎村

大豆三升五合

切明屋敷（七間拾間半）二畦十四歩　定船頭　猪兵衛

大豆三升五合

切明屋鋪（九間十二間）三畦十八歩　水手ノ　嘉左衛門

大豆五升

合、切明屋敷、（以下欠）

安永九年子十一月

三三二六（の1）

一写

切明屋鋪目録　高江久ミ崎村

切明屋敷（七間十間半）二畦十四歩　定船頭　猪兵衛

大豆三升五合

切明屋鋪（九間十二間）三畦十八歩　水手ノ　嘉左衛門

大豆五升

合、切明屋鋪六畦二歩、

合、大豆八升五合、

高ニシテ八升八合五勺四才、

右切明屋鋪、安永九年子十一月、郡奉行内田喜三右衛門竿相究差出候帳面之通、為居屋敷被下候旨、天明元

年丑七月廿三日、御家老衆任御引付令支配者也、
天明元年辛丑十二月廿三日　小林中太兵衛　印
二階堂源大夫　印
仁礼仲右衛門　印
鎌田太郎右衛門　印

（三三二六の2）

右ハ、卯九月十一日、御勘定奉行島津内記ヨリ御格ノ通被相渡、和田平右衛門相受取、写差越候、以上、
天明三年卯九月十二日　御船手
久ミ崎御船手

三三二七

文化八年未　切明屋敷直方、

一証文

切明屋敷八間十一間三畦二歩　久ミ崎御船手付ノ甚右衛門（列左）

右ハ、私屋敷ニテ御座候処、身上逼迫仕、此節御船手付与力石塚武右衛門方へ永代売渡申候、屋敷直ノ儀ニ付テハ御格式被仰渡趣奉承知候間、彼方居屋敷ニ直候様御申上奉頼候、私儀古未進並取込拝借等無御座候、左候テ、無屋敷ニ相成候テモ所中（列衆）並ノ御奉公堅固ニ相勉可申候、且又此已後切明屋敷願申上間敷候、為其証文如此御座候、以上、
文化八年未四月廿七日　御船手付亡甚右衛門（列左）養子　孝之助
右同証拠人藤四郎

高江御郷士年寄衆中

三三二八

一口上覚

切明屋敷八間十一間三畦二歩

大豆六升一合屋敷

右ハ、御船手付ノ孝之助屋敷ニテ御座候処、此節永代ニ私買取申候故、孝之助証文差上申候間、私屋敷ニ相直リ申候様ニ被仰上可被下候、尤、右孝之助事取込拝借無御座段承届申候間、此等ノ趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、
文化八年未四月廿七日　御船手与力　石塚武右衛門

高江郷士年寄衆中

右、申出之通、久ミ崎御船手付孝之助居屋敷ニテ御座

候処、御船手与力石塚武右衛門永代ニ買取候儀、別条無御座候段承届申候間、奉願候通御免許被仰付被下度奉存候、尤、本屋敷主証文相添差上申候、且又親類中御咎目親族付等被仰付置候者無御座候、以上、

文化八年未四月廿七日　郷士年寄　鵜木伝右衛門
小幡甚五右衛門（列左）

久ミ崎御船手

右之通、申出趣承届申候間、御法ノ通被仰渡度御座候、以上、

未五月廿六日　久ミ崎詰御船奉行　横山勘助

御勘定方小頭衆

本文願ノ通令免許候条、可被申渡候、以上、

未六月廿八日　御勘定所

三三二九（の1）

安永四年未

一加世田片浦村

一長瀬山　大山野五畦程　浦人　長蔵

一中道　同五畦程　同　長兵衛

一同所　同五畦程　同　杢右衛門

一同所　同五畦程　同　清七

一見ノ山　同五畦程　同　長四郎

一同所　同五畦程　同　覚兵衛

一同所　同五畦程　同　▽弥三兵衛△（列）

一同所　同五畦程　同　喜八

右ハ、加世田片浦村大山野（列山）ニテ御座候処、右ノ者共水手屋敷所持不仕、当分借地ヘ居住仕候間、右ノ場所切明水手屋敷御免被仰付度旨、御船手ヘ相付法様ノ書物ヲ以願申出候間、山奉行ヘ問合仕候処、山方ニ付支無之段承申候間、此節財部孫之丞差廻候序、見分仕候処、作方ニ付テモ何ソ諸障無御座、尤、三十六ヶ月ヨリ内、屋敷立罷移場所ニ（列も）御座候間、切明水手屋敷御免被仰付度奉存、此段得御差図申候、以上、

未十月九日　郡奉行　財部孫之丞
市来新左衛門

（三三二九の2）

此節申出候通申付候条、如例可申渡也、

未十月十日　　御勝手方印

取次　横山権右衛門

御船奉行

▽(列)山奉行△

郡奉行